

特50
965

佛へドルワールドレゼー演述

日本林 壽太郎筆記

增補
訂正
真理之本原

天主教會藏版

明治
43. 6. 8
内交

天竺公會藏本

五篇真經之本原

日本小引

手合

小引

本書ハ曩キニ佛國人宣教師ドルワールド、レゼー氏が
各地ニ於テ演説シタルモノヲ、私カニ筆記シ置キタ
ルモノ、中ヨリ、取捨撰擇シテ「第一篇天主ニ關ス
ルモノ」「第二篇人ニ關スルモノ」「第三篇耶穌基利斯
督ニ關スルモノ」「第四篇聖公會ニ關スルモノ」ヲ編
輯レ一部ノ書トシテ刊行ス、然レドモ素ト通俗ヲ旨
トシ、婦人小童ニモ解シ易カラシムコトヲ欲シ、務メ
テ口述ノ儘ニ存シ、難澁佶屈ノ文字ヲ避ケタリ、看
者幸ヒニ言語ノ卑俚ト、文字ノ平俗ナルヲ咎ムルキ

小引

第九 造物主の全善なること 五十七頁

第十 造物主の攝理なること 六十二頁

第十一 造物主と人間の關係 六十九頁

第十二 神に就て諸種の謬説 七十四頁

第二篇 人間の事

緒言 七十九頁

第一 人間は肉軀の外別に靈魂を具へ居るや 八十一頁

第二 靈魂は如何なるものなりや並に其本原 八十六頁

第三 靈魂は滅すべきものなりや 百一頁

第四 靈魂は生れ代るものなるや 百十五頁

第五 靈魂は何れへ行くべきや 百二十頁

第六 死後の罰 百二十九頁

第七 死後の賞 百三十五頁

第八 聖書は天啓の書なること 百四十四頁

第九 人性の墮落 百五十七頁

第十 原罪の傳來 百六十七頁

第三篇 耶蘇基利斯督の事

緒言 百七十五頁

第一 耶蘇基利斯督は何故貧賤を以て世に處ることを望みしや 百七十七頁

第二 豫言を以て耶蘇基利斯督の神なることを 百八十七頁

證言 百八十七頁

第三 誕生を以て耶穌基利斯督の神なることを 百九十八頁

第二 證すを以て耶穌基利斯督の神なることを 百九十八頁

第四 奇蹟を以て耶穌基利斯督の神なることを 二百八頁

第一 證すを以て耶穌基利斯督の神なることを 二百二十頁

第五 教訓を以て耶穌基利斯督の神なることを 二百二十九頁

第六 死去を以て耶穌基利斯督の神なることを 二百二十九頁

第七 復活を以て耶穌基利斯督の神なることを 二百三十七頁

第八 耶穌基利斯督は世界を如何に感化せし 二百五十二頁

第四篇 聖公會の事

第一 聖公會の必要なること 二百七十三頁

第二 聖公會とは何ぞや 二百八十一頁

第三 聖公會の權利 二百八十三頁

第四 聖公會の標號 二百八十七頁

真理の本原目次終

東京大司教伯多禄沙勿略

東京大司教伯多禄沙勿略

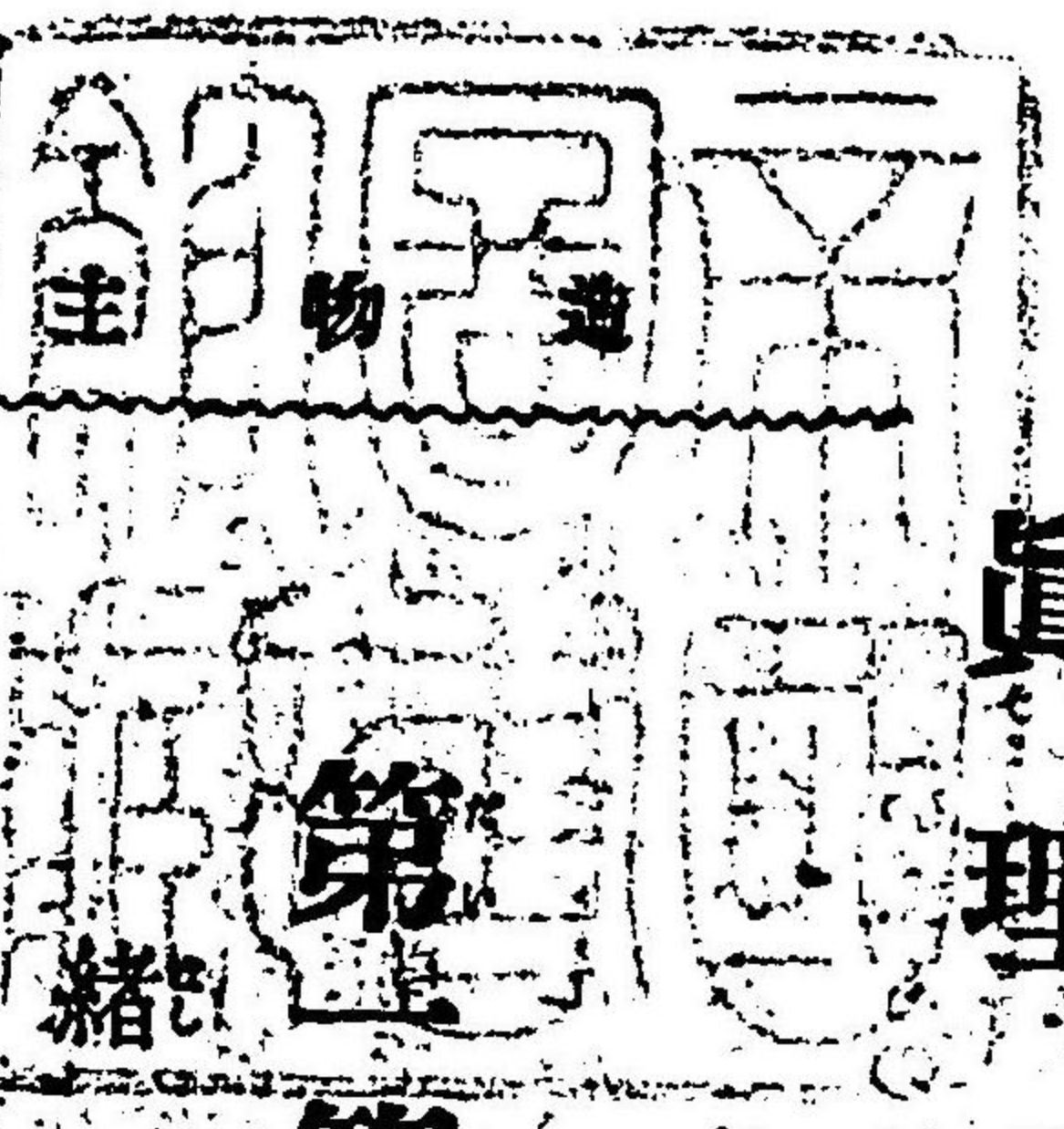
真理の本原

佛人 ドルワール、ドレゼー演述

日本 林 壽 太 郎筆記

第一篇 造物主の事

緒言



事の

諸君に對してお話するのは、今日が初めてです。私の上身に就ては種々なお疑を起すお方もあらうかと思ひます。如何となれば、私の如き外國人が、其本國を去て數千里離れたる日本國に態々渡り來て、氣候も違ひ、食物も變り、習慣も異なり、其上言葉も一向通せぬといふ様な、さまざまの困難があるにも關らず、所々方々巡回して、自分の信仰する道を弘めたいと云ふは不思議ではないか、難儀苦勞は成るべく避けるが人情である、好んで難儀するものはない、シテ見ると宗教を弘めるの他に何

緒言

二

か目的があるたらうと、斯様にお考へなさるお方もありませう、然し乍ら只一席のお話を以て、斯様なお疑を晴すことは逆も出来ませぬ、ソナお疑が全く晴れるには、我信する道即ち天主公教の眞の意味が分らねばならぬ、天主公教といふ道は、凡ての他教と大に違ふて、一言に申せば愛教といふ、何故愛教なるやといふに、現今世界に生息で居る人類は凡そ十四億六千七百萬人である、此多くの人類は皆悉く同一なる神即御一體に在す造物主に造られたものである、されば假ひ數千里を隔て海を異にし山を異にして生れ、容貌から言葉習慣に至るまで違ふといふても、同一本原から出たものであれば私も諸君も兄弟である、四海兄弟といふは此譯だからである、既に諸君も私の兄弟であるならば、私の善いと思ふ事は諸君にも知らせたいといふは人情ではありませんか、ソコテ私の一番善いと思ふ事は何であるかといふに、即ち眞の道を信するといふことである、何故また眞の道を信するが一番善いことであるかといふに靈魂といふものは不滅のものでありますから、若し諸君方が誤謬の道に入らば其害は獨り現世のみに止まらず來世にまでも及びます、何うか諸君道理を以て少しく

お考へを願ひたい、神といふものは是非とも唯一無二でなければならぬ、數多くあり國に因て異なるといふ譯は決してない、神は此の地球斗りでなく、太陽月星まで皆な悉くお造りなされたので、日本の神、支那の神、西洋の神など、ソナニ小さく限られたものが何うして神でありませうか、神は此世界のみではなく天地萬物の主である、神が無邊絶對の御者でないならば、此森羅萬象を創造ことは出来ない、天地萬物の原因となることは出来ない、此故に眞の神は御一體であるといふは道理にして、二つ以上の神があるといふは不道理である、意味のなげ脱と云はんければならぬ、ソッして眞の神が御一體ならば矢張り眞の道も唯一つでなければならぬといふ道理である、即ち造物主御自身が垂訓された道斗りが眞の道で、古來世界各國に行はれた數多の他教は人間の想像した誤謬の道と云はなければならぬ、人間の想像能れば之を信しても何の益もない然らば神御自身が垂訓された眞の道は何であるかと云ふに、其が即ち我天主公教であると確かに信する、又た其證據も澤山ある、されば天主公教の他の道は孰れも誤謬の道で、之を信するものは此上ない不幸なものであるから、其等の

人々を眞の道に入れたいといふのが私の本願で、牛國を離れワザ／＼遠方の日本國に渡りたる次第であります、私には此目的の外何もありません、一刻も早く日本の人々を眞の道に入れたいと只管望みますけれども諸君の如き教外者は、未だ天主教の大体をも御存ないから、直ちに其委敷お話をすることは出来ぬ、故に先づ其基礎なる點から徐々お話しねばならぬ、是非又た其必要がある、何となれば當時日本の状態を見るに、概して云へば、佛教なれ神道なれ、其壇家信徒たるのは從來よりの習慣に繋がれて居るので、眞の信仰を持つものは僅かに一部の人がだけである、如斯無信仰の人々と云つても、心の底より神が無いと思ふ譯ではありません、けれども其行爲を見れば、神に對して、何の心配もなく何の務めもなく、又た假ひ神があると信じてても其神は如何なる甲召なるかといふことを知りたいたいと思はぬ、此世に働くのは徒に麴包の爲めのみである、一生涯僅か五尺の肉体を養ふことに解して居る、如斯な人々は其行ひの上からは全くの無神教者である、言葉を換へていへば形而下即ち肉眼に視へる物に心を奪はれて、形而上即ち肉眼に視へないもの、就中神及び靈魂などの

緒言

四

高尚なる問題に就ては一向頓着せない、何と概はしいことではあるまいか、諸君も失禮ながらソウだらうかと思はれます、斯様に腹藏なく申上るのは、決して諸君に耻をかゝせるといふ積りではない、只無宗教といふことは人間の上に甚だ危険だといふことをお分りになるやうに致したい熱心の餘りで与ります、熱々お考なさい無宗教即ち神に對して何の心配もせぬのと、宗教を奉じて神に對するの務を盡すのと、孰れが道理に合ふことであるかといふことを、尤も若し神が無いと云ふ證據を一つでも擧げることが出来たならば、幾分か安全にも思はれませうが、如何なる學者でも如何なる學問を研究しても、神が無いといふ證據は決して擧げることが出来ない、否なめて研究すればする程、物理學にも動物學にも天文學にも、神が有るといふ惟かな證據を發見する其他哲學上から云ふも、萬民の心情を調べて見るも、神のあることは甚だ明かである、其故に昔より今日に至るまで世界萬國の高名なる學者等は皆な神が有ることを堅く信じて疑はない、サレバ神が無いといふは、總ての學問及萬民の心情に合はない説で、通常の人間より心情と智慧が拗れたものゝ想像である、倍根といふ哲學

緒言

五

第一 何故結果ありて原因なしといふか
六
者が、己れの利益の爲めを除くの外神無しといふものなしと曰れた通り、何か自分の爲にする所のものがあるから神がないと云ふのである、其爲にする所とは即ち善なる義なる神を信すれば己の過誤及心情の拗戻汚濁を俊めなければならぬ、私慾を恣にする事が出来ない其故に神が無いと云ふのである。

第一 何故結果ありて原因なしといふか

吾人々類の如く智慧を具へたるものに對して、造物主の存在を説くに、是非とも證據を擧げねばならぬ、證據がなければ信することが出来ぬといふ程に、人智が味むたは、サテ／＼驚くべく悲むべき次第ではありませぬか、哲學者パスカル氏曰ふ、神の存在なくんば如何にしても森羅萬象の理を知るに由なし、然るに何故に神の存在を信するに其證を擧げるの必要あるかと、是蓋し人智の昧むたのをいふたのであります、若し人智明かなれば、決して證據を擧げるの必要がないのは、恰も光があるといふことを説くに證據立するの必要がないと一般である、吾人人間の智慧が斯くまでに味く

なつたのは、抑々何の故であるかといふに實に人間の情が振れたからである、即ち人が神の存在を信すれば、嫌でも之を拜み之に従ふと云ふ義務を生じて、人間が獨立すること吾儘勝手にすることが出来ない、是非神の善全なる律法を守り悪心を抑へ罪辭を矯正し善行をする、などの事に心配せねばならぬ、若し之に背けば罰せられる其が嫌だに依て可成的神がないやうにしたいからである、斯く智慧や情が味むたものから、神の存在を説くに證據を擧げねばならぬ、サウして若しも其證據に一點の疑はしいことかあれば、人々は直に其振れた根情に引かされて決して信仰しないでありませう、依て私が之より擧げるところの有神論證は、皆學問上よりするので明かに且つ確かなるものでありますから、願くは諸君高尚なる心を以てお聴き取りなさい。サテ如何に無學な者でも、自然に曉る所の規則が一つある、其は即ち結果あれば原因あり未われれば其本なかるべからずといふことである、今人が船とか家とか若しくは機械などを見て、之が偶然に出来たものであると思ふものがありませうか、決してない必ずや人の手に成たと知るでありませう、船でも家でも機械でも追作人がなければ出

第一 何故結果ありて原因なしといふ
 来ないといふは明かである、煙の揚るを見て其下に火のあることを疑ふものは一人も
 ない、故に出来たもの即ち結果があれば、之を造出したもの即ち原因がなければなら
 ぬと、知るは別に考へを要するまでもなく人々直に知るところの明かなる真理である
 故に之を自明の真理といふ、ソウして世界の中原因なくして出来たものが何かあるか
 といふに、其一ツもないことは自明の真理に因て明かに知られる、試みに世界萬物を
 視よ、天には日月星の大なるを始め、地には海陸山川草木禽獸人間の小さなものに至
 るまで、其數擧げて數ふべからざる程である、然れども此夥しき萬物の中、一つだ
 も偶然に在るもの即ち原因なくして存在するものはありません、原因なければ草一
 本はおろか演の眞砂の一粒だに在ることは出来ませぬ、然らば則ち此天地萬物なる精
 果の原因は何であらうか、草木は吾其種より生ずるを知る、禽獸は吾其親より出ると
 知る、亦は吾其酸素水素より成るを知る、然れども其種其親其酸素水素を抱合する第
 一原因は何であるか、斯の如く推究れば如何しても吾人は其大原因なるもの、原因な
 き原因、即ち無邊絶對なる神に到達しなければなりません、孔子が其末を見て其本を

第一 何故結果ありて原因なしといふ

凡

知ると曰ふは通り、天地萬物といふ末を見て之を創造し給ふ本なる造物主を知るとい
 ふは、苟も狂者にあらざるよりは承知しなければならぬことではあるまいか、以上は
 人々自然に曉る所の規則即ち自明の真理に依て證據するので、如何に無學なる人でも
 造物主の存在を信するには此簡單なる證據のみで充分でふります、私に尙進んで
 學問上から證據立てて見せよう。

凡そ如何なる學問でも、深く研究すれば益々造物主の存在は明かであり、實に倍
 根が膚淺なる學問は人をして益々神に遠ざからしめ深遠なる學問は人をして愈々神に
 近かしむ、と曰れた通りで、吾人は學問を研究して愈々造物主の存在を疑ふべからざ
 ることを知るのである、前に擧げました所の、原因結果の真理は自明にして、人々自
 然に曉り無智無學なる苟莖雜鬼の輩までも皆承知致します、其のみならず此規則
 は官に於ての學問の土臺で、如何なる學問も皆此規則の上に立つて居るものである、
 何となれば學問とは萬物の現象を研究して、其狀態其規規其原因を知るといふことで
 ある、ソコで於ての現象は何であるかと云へば、皆或原因の結果である、これは最も

第一 何故結果ありて原因なしといふ

凡

第一 何故結果ありて原因なしと云ふ事

明かなること若し之を打壞したならば凡ての學問は忽ち無くなつて仕舞する、分り易い例を申せば、茲に兇器を以て殺されたるものがあるとするれば、之は結果であるから其原因がなければならぬ、然し其原因は他殺であるか自殺であるか、若し他殺なれば謀殺なるか故殺なるかと、斯やうに其原因を細かに調べるといふは、法律家の任でふりませうツツして之が明細に分れば擬律の錯誤がない、又茲に病氣なる人があれば、是亦矢張結果であるから其原因がなければならぬ、之を究めるのが醫術で其原因が明かになれば病は癒し易い、又百姓が不作なれば其原因を調べて、風の爲か雨の爲か或は害虫か肥料か地味に合はぬかと知るのが農業の目的で、之が分れば不作は少い佛蘭西のバストールといふ學者は、蠶病の原因なる微粒子を發見して大に蠶業に利益を興へた、総て皆事々物々此通りで、出來事即現象は結果である、故に其原因がなければならぬ、之を調べて其原因の何なるかを知り、又た其現象の因て來る方法規則を辨へるといふのが、即ち學問で學問の世に益あるも是が爲である、之に由て觀するると、凡ての學問は、結果あれば原因あるといふ規則の上に立てられたことは明かである

ありませう、尙又進んで高尙なる學問に至りませしても、矢張同じで、ツマリ結果を見せ原因を尋ねるのである、只高尙に進むに従つて其原因が分らない、今日に於ては、未だ現象の主要原因を知つたことは一つもない、蓋し人智に及ばぬことで明かに分ることとは出來ないことである、即ち如何にしても其本原を物質内に發見ことは出來ないのである、故に學者は現象の方法を解く爲に想像を以てする、而も其想像に何の證據もない、否な證據なき想像といふのみならず、総ての學者等が承知する想像說の中に道理に合はぬことさへもある、即ち物質の性に合はぬ想像があります、けれども今日に於ては其他に現象を解く方法がないから、止むを得ず道理に合はぬ想像と知りつゝ、暫く之に依つて現象を説明して居るのです、先づ一二を擧げますれば、風とは何であるか、空氣の流動である、其原因は如何、熱である、即ち総て物は熱に遇へば膨脹する、空氣も同じく熱に遇ひて膨脹し軽くなつて上に昇る、上に昇れば近傍の空氣が其後を補はんとして此に流動が始まる、是即ち風である、されば風といふ現象の原因は熱である、然れども熱も亦た一の現象に過ぎない、故に結果である、然らば其原因

第一 何故結果ありて原因なしといふか
 十二
 は何であるか、此に至て少しも分らぬ、物理学者は之を説明す爲に珍しい想像をした
 即ち萬物の中に吾人の目にも觸れず手にも感ずることの出来ない一種の氣體があるだ
 らう、想像して、其想像物をエーテルと名づけた、而して熱は此エーテルの震動であ
 ると説明します、其他光、越歴も矢張此エーテルの別なる震動だといひます、成程エ
 ーテルといふ氣體が實際にあるとすれば熱、光、越歴などの現象を説明すに便利であ
 る、幾分か分り易い、雖然エーテルなるものは今迄見たことも感じたこともない、
 ツマリ實際したことの無いもので、其性質其力其作用などを研究することの出来ない
 ものである、其有無全く分らぬ想像物である、斯く証據なき想像物といふても總ての
 學者は止むを得ず之を有るとして説明して居るのであります、シテ見ると物理学に於
 ける多くの現象の説明し或は虚偽なるやも知れぬ尙又天文学に於ても同じことがある
 先づ宇宙にあらゆるものは悉く運動する、月は地球の周圍に運動し、地球は又他の
 七つの行星と共に太陽の周圍に運動し、太陽は又是等八つの行星を將つて他の星の周
 圍に運動して居ります、只其の星は何處にあるか分らないのです、けれども太陽が

ヘルキユルといふ星宿の方に向つて、非常な速力を以て進むといふことは最早疑がひな
 い、之を以て見ると、萬物は各々相關係して運動するといふは明かである、而して運
 轉とは一の現象にして即ち結果である、故に其原因は何なるか之を知らなければ此大
 なる運轉を説明することは出来ませぬ、所が茲に今より二百五十五年前、即ち西暦一千
 六百四十二年英國に生れたる牛童といふ大學者は、之を説明す爲に、凡て物は皆相互
 ひに引く力を有つて居ると想像し、之を引力と名づけた、而して其相引く力は物の量
 に正比をなし距離の自乗に逆比するものであると知つた、之を引力の規則といふ、此
 規則を以て凡ての運轉を説明せば成程大に分り易い、又天文学上總ての算はよく
 此規則に符つて居る、之を以て學者は皆此引力を以て天文学の土臺と致します、然し
 引力が如何に天体の運行に能く當るも、素是れ想像に過ぎない、猶又深く考ふれば、
 之は道程に合はぬことで、逆も人間の智慧に分らぬ、何故ならば引力は全く離れたる
 二物の間に働く力である、例へば太陽と地球とは凡そ三千八百萬里離れて居る、此大
 いなる距離に在る太陽が地球を引くといふならば、太陽其ものは其体の在らざる所ま

第一 何故結果ありて原因なしといふか
 十四
 で働くといふはなければならぬ、左様な働は人間は勿論造物主までも出来ないかと思はれます、元來働とは働いて居るといふ意味である、故に働く其物の在る所にのみ出来ることで、在らざる所に働いて居るといふことは決して出来ぬといふは眞理である、是は漁者、樵夫までも承知できる明かな論ではありませんか、是引力説の眞理に合はぬ一證である、次に高名なる哲學者にして海軍の役人なるド、プロツグルがいふ如く、若し引力が眞實に有るものとせば、静止する二物も其相引く爲に運動を生ずる、然らば運動は静止より出ると云はなければならぬ、是は物皆情性なりといふ物理学の明かなる規則に背く(情性を論ずる章を看す)又部分より全体を出すこと能はず小は大を生む能はずといふ哲學の原則に反することである、諸君はコンオ話をお聴きなされて驚きなざるかも知れぬ、天文學者が一般に承知する規則を批難するなどは耻を知らぬもの、云ふことであると思ふかも知れぬ、雖然決してソウでない、是は私の論ずることでない、引力の規則を始めて想像した所の大學者牛董自らが曰ふたことで其著書に左の如く記してある、或物が全く離れたる眞空間に何の媒介もなく働くやうに物質が引力を有す

るといふ説は、決して物質の本性に合はぬことにして餘りに愚論とせねばならぬ、幾分でも哲學の智識ある人に於ては決して信じられぬ、故に吾は萬物の運轉を解くに當りて、萬物が眞實に引力を有するとは云はず、只引力を有するらしく萬物が運轉するといふのみと、以上申上る如く如何なる學問でもあらゆる現象の中只一つの丈も其本原の分つたものはない、此故に彼の無宗教家なるスペンセルまでも云ふた、凡て定義原則なるもの、例へば時間、空間、運動、力等は、其性質及其相互の關係を知ること、人知に及ばざることで畢竟不可知的に屬すると、之を以て見ますると如何程深い學問でも、物質のみを以て考へ、物質以外に存する力、即ち造物主の力といふことを除いたならば、決して此宇宙間の森羅萬象を解釋することは出来ませぬ、故に森羅萬象の本原を知りたいならば何うでも原因なき原因、始め終りなきもの、無遠絶對なる造物主を知らなければならぬ、換言れば世界萬物は皆始めあるものにして、全能なる造物主に何もなき所から造り出され、又其働き即ち運轉、光、熱、越歴などの凡ての現象も、矢張造物主の御力で出来ると云はなければならぬ、是天地萬物を創造又終始

第二 何故地球上に生物あるか
十六
之を幸り給ふ造物主の明かな證據ではありませぬか、天文學者ヒルヌが著したる萬物の組織といふ書に、正直なる學者の爲めに造物主の存在するといふことのみならず其主宰することまでも、數學幾何學の定義に於ける如く明にして近世學問の結論なり、と記してあります、何と諸君斯く高尚なる論議をお聴きなされても、まだ造物主の存在をお疑なされませうか。

第二 何故地球上に生物あるか

次ぎは死物と生物の差別より出る證據です、御存の通り死物とは金石水空氣等の如き生命なく活きて居らないもの、生物とは草木禽獸蟲魚人間等の如き生命ある活きて居るもの、ソウして昇等の生物が死物なる金石類から出来る筈はない、何となれば死物といふものは生命がない、已れに無い牛味を他に與へることは決して出来ないといふは分り切れたことで論ずるまでもない、ソコデ天文學や地質學を調べて見ますると吾儕の今載て居る地球といふものは、最初其出來始まつた時には今日の如く固まつた球で

はなく、彼の太陽の如く火の燃へて居る球であつた、其火の球が表面から漸々冷却固つて殆んど皮のやうなものが出來た、地質學者は其皮を五つに分けます、之を地層といふ、ソウして其皮の最も深い所即ち一番下の地層が最も始に固まつたる部分で、其所を學者は無生層と名けた、何せならば其地層の中には少しも生物の跡を發見ないからである、其上の地層を第一地層といひ、其より順次第二第三第四地層といひまして、第四地層が最も深い地層即ち、一番上の地層である、ソコデ前申した無生地層の中に於ける礦物類を調べれば、此地球が初めに火の球であつたといふ事は確かである、是に就て疑を懐く學者は一人もない、サテ右の如く地球が往古に火であつたならば、其時には人間は勿論草木禽獸蟲魚に至るまで此地球の上に生息して居らなかつたといふことも矢張疑ないことである、高名なるキユグエーが申されました、地球に始めより生物のあらざりしと云ふ事は如何にも確實なりと、其のみならず地質學者に取つては、五つの地層の内何の地層から生物が在り始めたといふ事を知ることとは極く容易ことである、然らば今日世界に生息して居る所の草木禽獸蟲魚人類等は何うして生じたか

第二 何故地球上に生物あるか 十八

のであらうか、何處から來たものであらうか、前申上た通り地球は元と金石水空氣等の如き死物でありまして、決して生物に生命を與へる力がない、之に由て觀るときは是非とも地球の他に或る原因がなければならぬ。即ち大なる能力が有つて生きて居る御者が草木禽獸蟲魚人類をお造りなされ、又た彼等に生命を與へて地球の上にお載せなされたと申さなければならぬ、尙ほ分り易い例を以てお話し致しませうに、諸君の日々の糧食なる米は、昔より確固不動規則に従つて年々歳々必ず稔ります、即ち種を地に蒔けば漸々成長して花を開き實を結び再び前の米を得る、然しながら若し種を地に蒔かなかつたならば決して生へない、是れ地は草木を成長させる養ひを供給も新たに生せしむる力がないからである、故に世界にある所の米を悉く滅して一粒も残さないならば、其種は全く絶えて世の終りまで地上に生へることはありませぬ、此時に當り米を得たいならば、是非とも世界の他から其種を求めなければならぬ、此理は獨り今日斗りでない世の始めに於ても同じことです、地より自然に米が生ずる譯はない、必ず他より種が來なければならませぬ、ソテ見ると經ての生物のある前に造

造物主が仕らせられ其御ものが生物の種をお造りなされ、ソツして是を地に蒔けば成長して花を開き實を結ぶといふ規則をお定めなされたといふことは何よりも明かな話ではありません、ソツして其御者が拉丁語にはデウスといひ、英語にはゴッドといひ日本語にはカミといひ、漢語には天主或は上帝若くは造物主といひまして、名は國に依て異なりするが畢竟其指す御者は同じである、以上申述べた所は地質學上から立てた證據で其だ明らかであります、西洋の無神論者が其證據を打潰したいと思ふて色々心配致しましたが、遂々骨折は徒勞でありました、將來とても同じこと、如何に造物主が無ひやうにしたいと心配しても、眞直な智慧を以て研究したならば却て其存在を認めねばならぬ、昔羅馬のシセロといふ學者が、造物主の在るといふことは恰も太陽が日々世界を照すといふことの如く明かななりと曰はれた通りであります。

第三 何故太陽、月、地球等に運轉あるか

造物主が、世界萬物は恰も書籍の如し、書籍は之を見て以て益々其理を明かにし、萬

第三 何故太陽月地球等に運動あるか。 二十

物は之を見て以て愈々造物主の存在と其全能と全智なることを知る、と曰はれましたが真に其通り、吾儕が萬物を見又之を研究すれば、何うしても造物主の在ることを疑ふことは出来ませぬ、今茲に一例を擧げてお話し致しませう、先づ物理学上學者等が天地萬物を調べて見て、動すべからざる定論が一つ分つた、即ち凡そ有形なる物質は一たび動さるれば始終動いて已れの力を以て止まることは決して出来ない、又た止つて動かないものなれば始終動かすして已れの力を以て動くことは決して出来ない、之を物質の惰性といひます、例へば今机の上に石を置きませうに、若し他から之を動かさなかつたならば、其石は何萬年たちましても決して自ら動くことなく何時も同じ所にシット居るでありませう、若し又た其石を取て投げたならば、際限なく投げられた方に進みまする、決して自らの力を以て止まることは出来ませぬ、尤も是は一寸考へると實際に合はぬやうである、何せなれば石は如何程強く投げましても、直に地に墮ちて動かぬやうになるからですが、然しこれは石自ら止まつたのではない、空氣が其石の進むを障碍し、又た地球の引力が其石を下に引きつける此二つの力が止めるので

ある、此故に多くの學者は惰性は物質の性質であると申す、是は物理学上疑ひのない定論で世界各國の學校に教える所の規則であります、サテ此規則に依て見ますると有形なる世界萬物が動くのも、或は動くものが止まるのも、皆な自らの力でなく他から受ける力でありませう、ソコで天文学に依て見ると彼の渺々たる蒼穹の中に、驚くべき程大なる運轉が行はれつゝある即ち地球に一番近い處にある月といふものは、二十九日十二時四十四分二秒を以て吾儕の載て居る地球のグルリを一度廻る、其速度を計算して見れば一時間に八百四十里づゝ進むといふ、實に早い運轉ではありませぬか、又た吾儕の載て居る地球は是よりも尙ほ一層早く運轉する、即ち地球は一秒の間に七里半餘一分に四百六十里一時間に二萬七千六百里の速度を以て進みつゝ太陽のグルリを一年一度だけ廻る、之れ實に驚くべき事ではありませぬか、地球の周圍は一週で一萬里程ある大なる球である、此大なる球が一時間に二萬七千六百里進む、即ち最も大いなる大砲の彈丸より四五百倍早く進むといふことは實に感心ではありませぬか、如斯く早く地球が運轉する爲めには如何程強い力を用ひなければならぬか、

第四 何故世界萬物に秩序あるか

二十二

られない、天文學者でもソナナ計算は逆も出来ませぬ。尙又月地球斗りではなくての行星から太陽に至るまでも皆悉く運轉いたして居ります、太陽はヘキキルといふ星宿に向て進んで居るといふことは最早只今は明かに分つて来た、故に學者等は萬物の中に運轉しないものは一つも無いと考へます、斯様に萬物の運轉するは何故でムリませうか、前に申した通り有形なる萬物は皆情性にして已れのを以て運轉するといふことは出来ないとはいふ規則である、然らば誰れが運轉させますか、是非とも有形ならざるもの、即ち無形にして生きて居る御者が御自分の力を以て運轉させなければならぬといふことは疑ひありません、其御者が即ち神でムリませう。

第四 何故世界萬物に秩序あるか

諸君が上野の博物館及圖書館に入り御一覽なされた時に、最も目を惹くものは何でムリませうか、先づ其秩序整然たる所でありませう、即ち同種類なる物は悉く一所に陳列して、陶器の間は陶器類を集め、武具の間は武具類を集め、決して彼是混交して

居りませぬ、又圖書館に於ても其通り、歴史の書の幾何學の書と混じて置くやうなことはなく、學問の種類に依て其蔵する萬卷の書籍も皆夫々分類されて居る、尙其上にも一々明細に其題名を記したる札がある、故に入用の書籍は立所に之を辨ずることが出来ず、實に感心の外はない、ソウして斯く多數のものが少しも混雜せぬやう取方附て置くといふは、随分心配と手数の懸ることです、其のみならず才智あつて能く考へる人でなければ出来ないのでありませう、今東京中の人々のうち斯やうな仕事の出来る人が幾人ありませうか、實に少いで、ムリませう、然るに茲に、或博識先生があつて、意氣傲然と博物館圖書館の秩序整然たるを感ずる人を侮り、汝は憐むべきものである、斯く種々なる品物書籍が夫々分類して陳列され少しも混雜せぬといふは、別に智慧ある人がすることでない、之は自然に出来たことである吾の如く近世の學問を研究したもの、目から見れば、彼の多くの品物の原子(アトム)は物質固有の力の作用に由て自然に片附けられたものだといふことを知て居るから少しも感心するところはない當然です、などいふたならば諸君は何と思ひなされますか、其先生が如何に

第四 何故世界萬物に秩序あるか

二十三

近世の學問に達したる大先生といふても狂氣の沙汰とするでムりませう、今活眼を開いて世界萬物を見よ、其秩序整然たることは豈に夫れ博物館圖書館の比でありませうか、彼の器物書籍は死物にして自ら動かざるものである、故に人一度之を整ふればイツモ其通りにして決して變らない、然るに此世界萬物は凡て皆な運動するものである太陽地球行星を始め總ての星は皆悉く驚くべき速力を以て運轉する、地球には又た活物があつて種々の働きをする、換言れば世界萬物は運動を以て滿されて居るといふてもよい位である、然るにも係らず此等の萬物が少しも混雜せぬやう各々秩序を保つて居るといふは、之は眞に感服すべきことではありませんか、此秩序整然たるを日々夜々に視ても別に大なる智慧あるもの即ち造物主のあるでなく偶然に出來たものだといふ無神論者は、如何に意氣傲然たるも如何に近世の學問に通じた積りでも、前の大先生よりも一層ひどい癡狂者に相違ない、斯やうな無神論者は却て近世の學問を知らぬ虚偽の學問皮相の學問を學んだ丈で眞理を解せぬものであります、私は前の演説に天文學者ヒルヌ氏の言を擧げましたが、今又茲に再び繰返しませう、曰く凡て正直な

第四 何故世界萬物に秩序あるか

る學者は造物主の存在を知る是近世學術の結論なりと、私は是より世界萬物の秩序其整然たる状態、其旨く立派なる様子を種々の學問に由て知らるゝといふことを述べてヒルヌ氏の言の偽りならざることを證しませう。

先づ凡ての學問に由て見ますと、世界萬物は完全なる秩序を有つて居り、又微少も變らないやう確かり極つて居るのです、御存の通り太陽系に屬する球、即ち太陽を中心として、其の周圍を運轉する行星は、水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星の八つである、此八つの球が太陽と離るゝこと、及其速力其軌道其廻る時間などは各々違ふて居る、例へば水星は太陽に最も近いもので、其平均の距離は凡そ五百萬里、其太陽を一周するは三ヶ月であります、其次は金星、其次は地球である、地球は其距離凡そ三千八百萬里（軌道は皆な楕圓形を爲す故に其距離は總て平均を云ふ以下同じ）にして、其太陽を一周するは三百六十五日と五時四十八分四十九秒、七である、一番遠きは海王星にして、其距離凡そ十一億二千百萬里で殆んど地球の距離の三十倍に異る、其太陽を一周するは百六十四年と二百八十一日である、天文學者は皆此通り八つの行星の軌道、其一周する

第四 何故世界萬物に秩序あるか

二十四 何故世界萬物に秩序あるか

二十六

時間まで明かに分つて、シウして始めより今日に至るまで厘毛の變りも誤りもなく全く同じ勢力を以て同じ軌道を運轉して居る、決して凡そ此位の時間に此邊を運轉するといふやうなことでないのです、一例を申さば地球は凡そ三百六十五日で太陽を一周するといふことでなく、全く三百六十五日五時四十八分四十九秒七を以て太陽を一周するので、秒數までも違はぬ、否々秒數どころでない秒の十分の七といふ斗られぬ程僅少の時間までも違はぬのである、是は今を去る二千年前からの研究に依て明かなこととであります、斯く秒以下の僅少の時間まで違はないやうな時間を造ることが、力に及ひませうか、逆も出来ない、彼の東京神戸間を往復する流車を御覽なさい、其距離僅に二百里に満たぬ、其速力僅か一時間に十里進む丈である、此運程と其速力とを彼の行星に比べて見たならば如何でせうか、實に十層な違ひでふりませう、然るに東京神戸間を往復する流車は、其半數か少くも三分一丈は延着するのがある、軌道に破損がなくとも、何かの障礙があつて、一ヶ月を續いて全く一定の時間に發着したことは嘗てありませぬ、ないと云ふても流車の發着を以て、斯く東京神戸間の二百里の道

程を日々往復することが出来るといふは、感心すべきことである、又是を取扱ふ人も餘程熟練して居らなければならぬ、然るに地球の進むは一時間に十里位のことでない一秒間に凡そ七里半進むのである、斯やうな速力を以て一年間に何百億萬里の遠き道程を昔より今日まで一秒以下の僅かな時間でも誤りなく運轉して居るとは、實に驚くは感心なことではありませんか、如斯完全なる秩序を保ち確かり極まつた運轉をするのを見て、尙偶然に出来たと云やうな先生があるならば、ソレは實に險毒ですから早く瘋癲病院にお入れなさい、吾々は細かに研究すればする程、世界萬物は全き秩序確き秩序を有つて居ることが知れる、四季は毎年定まつた日に遷り、同じ現象は同じ時節に變りなく現れ來ます、冬に至れば草木の多くは落葉して眠るかの如く、春喧風暖なる時に至れば忽ち醒めて、葉を生じ花を咲き、夏に實を結び、秋に熟する又麥の如く早熟もあり、稻の如く晩熟もある、梅は五月に其實熟し、柿は十月に其實熟す、如斯現象は世界開闢の始めより今日に至るまで、數千年の久しき年々歳々同じである、是豈に偶すべし秩序ではあるまいか、又彼の定風を見よ、定風とは何月よ

第四 何故世界萬物に秩序あるか

二十八

何月に至るまで全く同一の方向に吹く風である、日本と赤道との間に於ては、此風は四月より十月に至る西南より東北に吹く、故に帆前船にて日本に航するには最も好時節である、又十月より四月までは東北より西南に吹く、故に日本より南方に航するには好時節である、ソウして年々極つて此通りであるから、水夫は能く之を知り此風を利用して目的地に往く、是亦た矢張感心な秩序ではありませんか、猶又鳥魚類を見れば如何、彼等の中には毎年極つた時節に當て海を隔つる遠方なる國へ場所替をするのがあります、ソウして珍しいことには、彼等は各々別々に渡るでなく多數集つて渡ります、例へば燕は春に當て南の方から来る、故に燕の来るのは春の時候の徴で、秋になれば復び南の方へ往く、其他雲雀、鴨、雁なども年々同じ時節に來たり、同じ時節に復る、魚も同じで鱒、鱒、鱒などは矢張年々極つた時節に同じ道を集まつて往來する、故に新潟邊には夏の始めに鱒の漁が澤山あり、却て上総の九十九里邊は冬の最中に鱒の大漁がある、其時節には海岸が賑しく迎も食べ切れぬから、干鰯として肥料にする、是は諸君よく御存の所でムりませう、諸君よ鳥魚の如き智慧なき動物が斯く

四季を辨へて渡るべき時節を知り、往べき道を間違はぬと云は、是又實に感服すべき秩序ではありませんか、世界萬物総て皆此の通り、完全なる秩序を有ち、旨く組立てられて居る、然るに人間は智慧淺く、兎角唯利是奔るところの慾心に引かされ、少しも思慮がないから、不斷眼に觸れるものは視慣れて少しも感服せぬといふ癖になり、狗や猫が高尚なる美術品を視る如く、此感服すべき天地萬物の有様を見ても一向感じがない、況して其原因を究めたいなどいふは思ひも付かぬことである、是は實に人間として、耻ヶ敷次第ではありませんか、人間は造物主より考ふべき智慧を賦へられて居りながら、造物主の感心なる所作又其深き恩を考へず、甚だしきに至りては此完全なる秩序を見て之を爲さしむる原因なく、偶然に出來たものだといふ程心の捻れた人間さへもある、實に憐むべきものではないか、以上申上たる如く世界の秩序は實に完全であるが、其斗りでなく人間が如何に力を盡しましても決して此秩序を亂すことは出來ないはと確固と極つて居ります、只時として工夫を以て天の規則に逆らふて幾分の變りを生せしむることが出来る、雖然ソレは逆らふて居る間だけで、直に元に復

第四 何故世界萬物に秩序あるか

三十

ることは、は彈器を手にて押へたるが如く其手を放すと同時に元に復つて仕舞ます、
 今茲に禽獸の種類に就て一例を挙げれば、彼等の種類は全く異なりて定められたるも
 のですから人開が如何程工夫致しても決して之を亂すことは出来ませぬ、例へば狗と
 猫とは全く異種類故人ありて無理に交配たならば或は出来ることがあるかも知れぬ、
 けれども決して子は生れませぬ、馬と鹿、熊と虎に於けるも皆同じであります、然し
 其利の最、近きもの即ち馬と驢の如く死んど同じ何類のやうなもの、交配することが
 出来る、尤も野獸なればたとひ同じやうな近き種類でも自ら交配することは決してないの
 です、ソコデ人が工夫して牡馬と牝驢とを無理に交配たならば子を産む、之を驢とい
 ひます、シカシ驢は常に子を産むことはない、只五六斗り子を産むことがあつた
 といふ、ソウして驢の子即ち二代目の驢は、最早子を産むだことは一度もありませぬ
 畢竟驢が繁殖して其種を繼續することは出来ないのであります、如斯く尾て子を産
 む程に近い種は實に少ない、私は種々動物を調べましたが僅かに四つだけ分りました
 即ち馬と驢、羊と山羊、狼と狗及び穴居する兎と、穴居せざる兎であります、私は此

四つの外未だ見當りませぬ、ソウして又或ものには其種が澤山あるのがあつた、例へば
 狗に大なるもの、小なるもの毛の長さ、短き、白き、黒きなど様々であります、けれ
 ども元全く同じ種で、人間の心配に依て様々の差ひが出来たのである、故に之を捨て
 置いたならば遂には其元の種に復ります、無理に出来た色々の差ひが無くなつて仕舞
 に相違ない、例へば家に飼はる、狗と山に棲む狗とは其吼方全く違ふ、然るに飼狗を
 人なき島などに捨てれば僅の間に其吼方を失ふて山に棲む狗と同じに歸る、是に就て珍
 らしい経験がありました、可歴一千七百年に當つて西班牙人が亞米利加の近傍にあ
 るシュアン、フアールナデズといふ無人島に、山羊が餘りに澤山棲んで居て困つたか
 ら、之を殺させる爲に狗を多く放つて置きました、其より三十三年即ち一千七百四
 十三年に當つて、西班牙の海軍艦長ウ、ロアといふ人が、其島に往つて前に放つたとこ
 ろの狗が其吼方全く變つて山狗の如き吼方になりましたから、其中少しく連れて西班
 牙國に歸り飼狗と一所に置きました、すると彼等は飼狗の吼るを聴いて其如く擬似や
 うとしたが出来なかつた、ソウして飼狗と全く同じに吼へられるやうになる爲に、隨

第四 何故世界動物に秩序あるか

三十二

分永き年月であつたといふ、牛馬猫などの総ての家畜獸は皆な是と同じで、人間に離るれば其本なる野獸に復へること疑ひありません。昔し北亞米利加には馬がなかつた故に歐羅巴から持つて往つて野山に離しました、所が其丈其毛色までも悉く野馬の如く鼠色に變りました、又豚は本野猪より出たものですから、山に放せば直に野猪の如く其耳は立ち、又産れて六ヶ月間は野猪の子の如く黄色の斑條が頸より尾の際まで並んである、鳥も矢張同じで、鶯は本鶯より出たものだが、鶯には純白なものがあつて鳴には無い、然し若し鶯を放したならば漸々其純白な色は變つて鳴の色に復る、シラ見ますると全く異りたる種は確く極つて居つて、人間が微少でも混亂ことは出来な、馬と驢、狗と狼の如く最も近い種の間には幾分か混亂ことが出来るけれども、僅かに一二代に止まります、又同じ種には色合、毛狀、形狀などは人の心配に依つて變らせることが出来ても、決して種を變へることは出来ない、故に人が心配を止めれば程なく本に復つて仕舞ます、之に由て觀れば禽獸にも亦た堅い規則があるのである、是は實に感心な秩序ではありませんか、今申上る所は幾度も學者等が仔細に經驗して研

究したことである、ダルヴン迄も格別鳩に就て經驗した、即ち家鳩、野鳩の類には其異なりたるものは百五十種もある、之を色々経験して、其本はビゼといふ一種より出たものであることが分つた、右種々の例を以て觀ればダルヴンの唱へた進化説は大に誤つて居り、近世の學問に合はぬといふは明かではないか、又禽獸の異種類の間より子が産れて其種を繼續することが出来るといふ證據なき中は、ダルヴン説は檢れた智慧の想像に違ひない、是等の經驗が明かになつたから、西洋各國にダルヴン説は大に勢力を失ひ、今之を賛成する人は剛情なる半熟先生斗りである、然るに日本國は遠く離れて居ますから、總ての事が何うしても遅れ勝である、故に彼説を賛成する學校の先生が多い、然し十年若くは二十年の後には餘程少くなること疑ひありません、サテ今迄述べました所は禽獸に就てのみであるが、草木の類にも矢張同一の規則がある、人参の種を幾時時でも葱の生へることは決してなし、人力を以て草木の種を亂すことは逆も出来ぬ、さうながら矢張禽獸と同じく或種に就て其外形又變ることが出る、例へば日本に於て國丁などが、工夫を以て菊とか牡丹とか薔薇などの種を

第四 何故世界萬物に秩序あるか

三十四

際限なく殖すかと思はるゝ程年を追ふて殖します、けれども本、一種から出たものであり、ますから、人の手を離れて野山に捨て置くならば程なく其本なる一種に復ること疑ひない、是は園丁などが知る所でムリませう、シテ見ますると草木には完全なる秩序があります、以上論ずる所に依て、宇宙萬有は太陽行星より、地球上に於ては其四季の循環より定風等の種々の現象及禽獸草木等に至るまで、皆々悉く旨く組織てられ完全にして確固たる秩序を有つことが表はれて居ります、ソウして秩序あるものは智慧より出るの結果である、智慧がなければ決して出来ぬ、秩序あるものは智慧より出るとは哲學の定則である、されば世界萬物の完全なる秩序を見ても、尙偶然に出来たとはいふて、無邊なる智慧を具へたまふ造物主の爲し給ふのでないといふ説は、全く智慧も情も捨てたる人の想像にして、近世の學問に全然反對する説でムリです、諸君はどうか、正直な心に従ふて萬物を創像し、組織て給ふた、無邊なる造物主を堅く信仰なさるやう希望致します。

第五 何故人間一般に神の思想あるか

ダヴィド王の時に、愚なるものは心の中に神なしといへり、と書いてあります通り狂妄者を除くの外如何なる悪人でも心から神がないと思ふ人はありませぬ、彼の悪逆なる文學者ヴォルテール、デイードロの様な者でさへも、造物主のあるといふ事は餘りに明らかですから之を無いと云ひ黒めることは出来なかつたのみならず却て其在るといふことを立派に證據致しました、即ちヴォルテールが曰ふのに時計が時計師に造られたることを證し家が工匠の手に成りたることを證するに、何故獨り天地萬物が絶對なる造物主より出たることを證せざるか、一本の樹、一匹の獸、一個の星を見て、何故プラトンが無上の幾何學者と讚美したる造物主の跡を其中に顯はさずといふか、若し世界萬物にして造物主の存在を顯はさざるものあらば其一つにても之を擧げよ、未だ今日迄一つも之を發見せんと能はずと、又たデイードロが曰ふたのに、人間に思想なしと云はゞ人之を愚説なりと笑はん、然れども萬物の中只一匹の小さき蝶の翅に顯

第五 何故人間一般に神の思想あるか

三十三

はれたる智慧の徴表を見て之を造りたる智慧を認めずといふは、人の言行に顯れたる思想の徴表を見て之を爲さしむる思想と認めずといふよりも尙一層の愚昧なりと云はざるを得ず、昆虫一匹の体の構造が顯はす所の智慧と秩序は人間が其言行に顯はす所の智慧と秩序より小なりとするや、ニュートンの智慧がニュートンの著書に顯はるゝ如く、造物主の智慧が彼の昆虫の眼一つの中に顯はれざるや、世界萬物を説明すに由て學者の智慧が證せらるゝことよりも、創像せられたる世界萬物が其創像者の智慧を證することの弱さや、嗚呼世界萬國恐らくは如斯考ふる狂妄者は一人もあらじと、詩君よ斯様に巧みにして而かも眞なる有神論が、ヴォルター、デイードロの如き天主教に太く反對したる天主教を酷く誹謗たるもの、口から出たとはナント奇らしい事ではありませんか、之を以て見ますと、口には神が無と云ふても、心から神が無と思ふものは狂妄者の外なからうと思ふ、學問や智慧の優れた人は明かに神のあることを信する、然しながら神のあることを知るのは學者智者でなければならぬといふ譯ではない、學者が其深い智慧を以て世界萬物を調べて造物主を信すること、

第五 何故人間一般に神の思想あるか

文盲者が其浅い智慧を以て萬物を見て造物主を信すること、聊かも違ひはない、昔し亞刺比亞の沙漠に住む或る野蠻人に、汝は何に由つて造物主を信するかと問ひました野蠻人は答へて、沙の上の足跡を視て其鳥なるか獸なるかを明かに知る如く、天地萬物を視て造物主あることを明かに知りといひました、之に依て觀れば野蠻人と文明人とに係らず、學者不學者を問はず、神を信することに於て何の違ひは与りませぬ、次にマ御一体なる造物主を信するといふことは新しい事であるか、近世斗りであるかといふに、決してツツでない、昔より外教の國、外教の人に之を信じたものが澤山ある、殊に昔に於つて天主教信者でない有名な人、十九世紀の今日から哲學者と稱せらるゝ所の人々が、造物主あることを堅く信じたのみならず之を信することの、人間にも社會にも必要なることを曰れた、即ちソクラテスは其弟子に神の唯一なること、及び其萬物を主宰することを教べ、弟子のプラトンも之を信するのみならず其必要を説いて、宗教を亡ぼさんとするは人間社會の基礎を亡ぼさんとするに同じとまで極言しました、其他ピタゴラは凡て人の守るべき義務の中最も必要なるは宗教を奉ずること

第五 何故人間一般に神の思想あるか

第五 何故人間に無限の思想あるか 三十八

にして之無んば決して正直なる能はずと曰ひ、プルタルクは神を信じ之に従ふは即ち人性に従ふものなりと曰ひ、又空中に樓閣を築くは宗教なくして國を立てるよりも容易しと曰ひ、シセロは義と善の根源は神を信じることのみ故に宗教は國家の生命の爲めに肝要なり、宗教なくんば國家は死すべし、如何となれば神を畏敬心なき民に忠義、愛國、一致及び法律の基礎なる義等決してあるべき筈なければなりと曰はれました、此故に歴史を調べたならば如何程往昔でも、如何程野蠻な國でも、神を信じない民は一ヶ所もない、尤も神の性質に就ては大に誤りたることがあつたには疑ひありませぬ、神でないものを神として拜むた事は度々ある、然しながら其神は世界を主宰るとか、人間を支配するとかいふことを信じ、又人は其神に對して義務があるといふことも信じ、全く神なしと信じたる民は開闢以來何時のとき、何處の國でも一つもない、ソクラテスが世界萬民の守る規則の中最も始めに立てられたるものは神を拜むべしといふことなりと曰れた通りである、サテ斯様に古も今も文明國も野蠻國も皆一様に神を信するを見れば、之は人性の自然から出ることとて、眞理に違ひないアリス

トットが人の本性は眞理を覺るにあり、故に世界萬民の始終眞理とする所は如何にも眞理なるべしと曰ふた通りである、又シセロが凡そ人性一般の認めたる判断は眞理たること疑ひなしと曰ふた通りである、之に依て神を信するの人は人性に従ふ行ひで眞理である、却て神を信せぬ無宗教者は人性に背く行ひで不眞理ではありませんか。

第六 何故人間に無限の思想あるか

造物主の存在に就きましては、以上の證據で最早明にして疑を容れる所はあらずいかと思ひまするが、世には一種の理窟家なるものがふりまして、兎角何事に就ても理窟張て矢を問敷論じます、依て今茲に哲學上の證據を擧げて少しく論じませう、苟しくも道良心を有つて居る人と眞理を愛するの念があるならば是非とも承知しなければなりませぬ、而して此哲學上の證據は、有名なる碩學聖アンセルム、ライブニツ、及デスカルト、の三氏が論じたもので、其論法に二様あります、孰れも明瞭に且つ正確でふりまするけれども、未だ哲學(形而上學)の研究をしたことの無い者には、第一

の論法は少しく了解かぬるやも知れぬが、第二の論法は甚だ明かであらふと思ひます。

第一 吾人には無限といふ思想がある、此無限といふことは言葉の上から考へれば凡ての界限を打消すことである、然れども吾儕は斯く凡ての界限を打消したる後には潜心熟慮しても無限といふことは矢張依然として、同一に實物實際の最も大なるもの即ち絶対物として吾人の脳中に存在して居る、故に此思想は積極的である。然して此思想は、吾人之を先天的に具へて居る、故に別段之を考へざるも、別段之を知らふと思はなくても、其思想は明かに吾人の脳の中に在る、即ち此思想は凡ての他の有限物の思想に先たつて我々人生に賦與られたる所のものである、假設は無限なる思想は一枚の大なる畫圖の如きもので、凡て他の有限なる思想は其畫圖中の彼方此方に散有るやうなもので、皆無限なる思想の中に含まれて居るのである、此故に無限なる思想を先天に有たないならば、他の有限物の思想は得て起すことが出来ないといふは甚だ明かである、一例を擧ぐれば今吾人が不健全なる思想を起すのは健全といふ

思想が先きにあるからである、不完全といふ思想を起すのは完全といふ思想が先にあるからである。

此に於て當に考へべき問題は、吾人は何に因て此無限なる思想を有つて居るかといふことである、先づ「我」自身は如何なるものなるかといふに、其肉體其靈魂其能力皆悉く有限物である、然らば「我」なるもの外部にある凡てのものは如何といふに、矢張是れまた同じく有限物斗りである、如何に廣く如何に大なるものと云ふても皆な悉く實際といふ狭い文字の中に包まれて仕舞、尤も吾人は想像の奔るに任せて際限を窮りなく打消しつゝ遡ることが出来るには相違ないけれども、無限と有限とは何うしても天地の隔懸がある、サテ如斯く吾人が仰で天を觀、俯して地を察すると、皆是有限物であるならば、此有限なる萬物は吾々の腦裡の無限の思想を起さしむる原因ではない、是に於てが無限なる思想は無限なる御者が必ず有らせられて、其御者が吾人人間に賦與られたる所と云はなければならぬ、其無限なる御者は造物主或は天主と云ふ、故に曰く天主は存在すと云ふことである。

第二 吾人の有る凡ての思想は皆眞實にして虚偽はない、言葉を換れば何處にか其思想に該當ものが實際に存在するといふことである、先づ思想とは如何なるものかと云ふに、此語は希臘語にて「エイドー」と云ひ日本語に譯すれば「観る」といふ意味である、即ち吾人の脳中に於ける事實の顯現といふことである、故に實際に存在せぬ事實を腦中に顯現こと、即ち世に全く無きものゝ思想を有つことの出来ないといふは申迄もない、難者或は時あつて人間が實際にあらざるもの、實際と合はぬことゝ思想を有つことがあるから、世に虚偽の思想は全く無いとは云へぬと論するやも知れぬ、然れども是等は畢竟思想と判断とを取違へたのである、即ち虚偽の思想といふことではなく判断の誤謬であるといふことを知らなければならぬ、例へば吾人が事物の真相を知らぬときは、其事物の思想は實際に該當して居らぬ、即ち銅を見て黄金なりと思ふの類である(一)又吾人の有つ所の或思想を毫も之に該當しない事物に結び附る、此時事物と思想とは一致せぬ、即ち鐵の思想を銀に當符やうとするの類である(二)又吾人が有つ所の種々の思想を結合して實際に無き所の或怪物を案出す、即ち人の首の思想、馬

の軀の思想、蛇の尾の思想を同じ一つの動物の上に結合して、鶴の如きものを想像するの類である(三)而して是等三つの事は思想の虚偽でなく判断の誤謬であるといふことは明かである、即ち思想に虚偽はないが、思想を結合す事に就て誤つたのである、故に個々別々に調べたならば、金の思想、黄金の思想、鐵の思想、及び人馬蛇の思想等は、皆眞實にして實際に該當しないものは一つもない、果して然らば無限といふ思想も虚偽でない、即ち此思想は有限物の顯現でもない、虚無の顯現でもなくして、此思想に該當する所の無限物が何處にか實際に存在し、其ものゝ吾儕腦中の顯現と曰はねばならぬ。

尙又茲に一步を譲りて、吾人は實際にないものゝ思想を有つことが出来るとして論じても、吾人に無限なる思想が有るからは、無限なる物の存在を拒否することは決して出来ない、如何となれば、無限といふことは絶対といふこと、即ち圓滿完了何一つ欠点ないといふことである、故に無限なる思想の中には、無論存在といふことも含むで居る、言換れば吾人に無限の思想が有るといふのは、既に其存在することを同時に

第七 造物主は如何なるものか
肯定して居るのである、若し實際の存在を承知せねば最早無限の思想と曰れぬ、されば思想の獨立即ち實際に無いもの、思想が有るといふことが、假りに出來得るとするも、ソハ有限物に對してのみ云ふことを得べきことで、無限物に對して曰ふのは自家撞着である。
是に於て結論す、吾人に無限の思想あるは無限物の實在するの證にして、其無限物は吾人稱して造物主或は天主といふ故に曰く天主は存在するといふ。

第七 造物主は如何なるものか

造物主の在らせられるといふことは、以上の證據だけで最早お疑ひはあるまいかと思ひまするが、眞の道を知るには唯神様のあることを知た斗りでは尙不足である其上に神の性質即ち神様は如何なるものなるやといふ事を知るのが最も必要である、昔より多くの國々が、神の性質に就ては頓だ間違た考へを致しました、或國には神は有形物と思ひ、或國には人間に似たるものと信じ、又甚しきは物の種類を誤つて禽獸まで

も神と信じて拜むた國もある、今を去る凡そ二千年前、歐羅巴中最も開化せる國、西洋各國を攻め取る程の勢力あつた國、即ち羅馬に於ては、人間の私慾を神とし畏れ敬ふて拜みました、即ち傲慢の神をジュピターといひ、邪淫の神をヴェニウスといひ、飲酒の神をバックスといひ、偷盜の神をメルキュルといひまして、是等は各々厚く信仰された神々である、又埃及といふて、昔はなかく開けた國があるが、其民は世界の建築物の中最も珍らしいものを建てました、其建築物はピラミッドと云ふて、今にも沙漠の中に遺つて居る高い塔で云ふて、此十九世紀に當て、蒸氣機關などの良い機械を發明したと云ふても、彼の梯な塔は建てられぬと工學者が感心する位である、試みに其塔一基を毀して、高サ一間巾三尺の石垣としたならば、日本國を其石垣で取圍ことが出來ます、如斯感心なる建築をするはと開けた所の民が拜むた神は、何んなものであるかといふに、牛及イビスと云ふて鶴に似た鳥でありました、殊にイビスは最も尊い神で、例ひ過失でも此鳥を殺したものは直ぐに斷罪に處するといふ法律までありました、其他印度といふ佛敎の起つた國でも、牛を佛と致しました、人間

第七 遺物主は如何なるものか

四十六

よりは貴いものと致し、牛の糞までも極めて有難と信じ、毎朝佛を拜む前に先づ其臭き糞を以て額を塗ります、ソウして外へ出るときも之を洗はず其儘歩く、私は前後三回印度に行きました、其の度毎に斯様に顔が牛の糞だらけの印度人に何人も出遇ひました、又シヤムといふ國では白象を神として拜みます、日本國に於ても矢張同じ様ではありませんか、獸を貴むたことはありませんか、狐を稻荷と崇めたことはありませんか、之は私よりも諸君が能く御存でムりませう、又日本國に於ては、人と神の差別がなく、人間が死すれば神や仏に成ると信じた人も多くあります、日本國人が神の性質に付て斯様に間違た信仰を持ちましても耻ヶ敷ことではありませぬ。

右に述ぶる如く日本よりもズツト開化した國々ですらも、彼のやうに間違た考へを致した、眞の神は如何なるかといふ其本性を忘れたならば、神に就て種々の愚説を立てるは當然である、不知不識出来たのである、死人を神佛として拜むといふは、敬と拜の差別を忘れたから生じた間違で、即ち敬とはウヤマヒといふ事、人が人に對して當然爲すべき禮儀である、拜とはオガムといふ事神にのみ對して爲すべき務である、故

に父母長上君主或は古の明王若くは先哲などに對して、敬ひをするは素より良いことであるが、拜むではならぬ、然るに日本人は之を取違へて、先祖の恩誼を考へて之を敬ふといふことから、遂に過ぎて拜むといふやうになりましたのである、サテ斯の如く神に付いて何か一つ誤謬が生じたならば際限なく種々様々の誤謬が起つてまいます、故に諸君の如く御一体なる遺物主を未だ信仰せざる人々の爲めには、眞の神の性質を知ることとは最も肝要なことである。

先づ神とは如何なるものであるかと云ふに、吾儕人間のやうな卑しく劣りたるものが神のやうな貴く優れたものゝ性質を明かに知られる筈はない、又吾儕は己れの性質すらも明かに知ることが出来ないに、况して神の性質を明かに知ることが何うして出来ませうか、殊に神は最も優ぐれたる、最も意味深き御者にして、如何なる辯者、如何なる學者といふても、之を説明するためには今日使用だけの言辭では甚だ不足で困るでムりませう、然しながら其幾分かを説明することは出来ないことではありませぬ、哲學を以て見ると、神とは一言にして絶對或は無邊といふ、何故絶對或は無邊なるやとい

第七 造物主は如何なるものか 四十八

ふに、神は在りとあらゆる萬物の本原だからである、萬物の本原は何故又無邊でなければならぬかといふに、萬物の本原は是非とも原因なき原因でなければならぬ、即ち始めなく造られざるもの、自らの力で生きるものでなければならぬからである、斯の如く始めなくして自然に在らせられたといふは、絶対或は無邊といふに同じである、ソウして無邊ならば無差別なるに依て、或る一點が無邊ならば全体も矢張無邊でなければならぬ、故に萬物の本原なるものは始めといふ一點に付き無邊であるから、其他の所即ち終りも智慧も能力も善徳も皆な悉く無邊にして限りがないと云はなければならぬ、之に依て眞の神なる造物主は至智至能至善である、是は造物主の性質を哲學上から解釋したので、餘り意味深く分り兼ねるやも知らぬか、然し此他にも多少造物主の性質を知り得べき道がある、即ち造物主と被造物とを比較て考へるのである、凡そ吾儕の眼に觸れる萬物は悉く有形であるが、神は全然之に反し無形である、無形ですから縦横高低もなく、色も香もなく上下左右の差別もない、人が眼を以て視、手を以て觸はることも出来ませぬ、ソ云ふたならば神は力も働さず無いと考へかとも知

れぬが、決してソでないといふことは、人間の靈魂が無形だけれども中々力のあるを以ても知られる、無形で眼に視へぬから力がないとは云へぬ、若無形でないならば神ではない、何故といふに人の身體は靈魂よりも劣る如く、凡て有形物は無形物よりも劣るものである、神が有形ならば何うしても限りあるものである、此故に有形とは神の性質に反することである、又萬物は變り易いもので、即ち始めありて成長し後には老衰し、遂には其力其働全くなくなる、天文學に依れば、月は今死んだ球といふ、其は何ういふ譯かといふに、彼の月も始めは今の太陽の如く火の球であつたが漸々冷え固まつて遂に其力を失ひ、最早今日では熱も空氣も水も生活物も何も無いに依て、全く枯れ果たる球である、是れ死んだ球と名づくる所以である、吾々の載て居る此地球も矢張其如く、餘程老つた球になりました、其證據は澤山あります、只今掘出す所の石炭といふものは、昔の草木が炭に化したので、此等の草木は何萬年前には五六十間も高い樹、或は草であつたのです、又今日石岩などの上に生へる小さな苔といふ草も、昔には十二三間も丈けが延びたのです、之に依て草木は昔よりも餘程衰

第七 造物主は如何なるものか
 五十一

へて来たといふことは甚だ明かである、禽獸人間に至るまで皆な其通りであることは
 往昔を調べずとも僅か二三百年前からのことに付て考へても分る、二三百前に我佛
 國の華士族が用ひたる具足は、今の人には着ることが出来ない、又其具足を穿けるに
 一人の力では六ヶ敷、力斗りでなく身の丈も其通り、漸々低くなります、故に西洋諸
 國に於て徴兵に合格すべき身長寸尺が追々變つてまゐります、日本に於ても同じ
 やうな事があるは、諸君の御實驗なさる所でありませう、地球上にあるものは総て皆
 其通り、漸々衰弱て来る、之に依て見ると此地球も月の如く終りに向て進んで居るの
 で、何時か枯れ果て、死んだ球になるときがあるのである、眞の神なる造物主は之に
 反して、始まることもなく、成長することもなく、老衰することも、無くなる、終る
 といふこともありません、斯様な御者は實に貴いものではありませぬか、神道や佛教
 で教へる如く人間の如き卑いものが神や佛に成るといふ説は、神の性質を辨へざる人
 の説で、學問や道理を知らないもの、想像から出た取るに足らぬ話と云はなければな
 らぬ、以上申述ぶるが如く、造物主は萬物の本原にして無邊絶對ならば、必ず御一體

でなければならぬ、若し神が二つ以上あれば必ず差別がある、差別があるのは何方に
 か無い所があるので、即ち缺點である、缺點があれば無邊絶對でない、故に眞の神で
 ない、尙ほ分り易く例へれば、一といふは數の本原である、即ち萬は千より來り千は
 百より來り百は十より來り十は一より來つたので、最早一の前に數はない、一が數の
 始めにして百千萬の本原である、造物主も如斯萬物の本原なるが故に二つ以上ある
 筈がない、一月を齊へる主、一國を治むる王が一人なるが如く、造物主は御一體であ
 るといふことは甚だ明かである、此御一體なる造物主が眞の神様で、前にも申す如く
 漢語に天主或は上帝天帝など申すのである、造物主の話始めて聴く諸君は、或は他
 國の神のやうに思ひなされるかも知らぬが、昔より造物主を知らない國は一國もない、
 支那の孔子も罪を天に獲れば勝る所なしと、子思も天命之を性といふと曰ふた、此天
 といふのは即ち天主のことで、萬物が此天に造られたといふことを信じたことが明か
 である、又日本國に於ても、同人の死するを天命といひ、作の善惡を天性といひ、悪人
 の不幸を指て天罰といふ、此天命天罰などの、天といふのは、即ち天主のことで、矢

第八 造物主の全智全能なること
五十二
張生れながら造物主を知て居るといふ證據である、故に世界萬民の拜まなければならぬ眞の神様は造物主感は天主といふ御一体なる御者である、故に天主公教は一國の道ではない、世界萬物をお造りなされた造物主の道であるから世界萬民の奉ずべき眞の道でふりまする。

第八 造物主の全智全能なること

造物主の御一体にして無邊だといふことは以上申上た通り其だ明かである、ソウして無邊なれば其能力は全能にして能はざる所なく、其智慧は全智にして知らざる所なく其善徳は全善にして、微少も不義不徳がないと云ふことも理論上明かである、否な理論上斗りてなく實際にソウである、支那の程伊川といふ先人が百物を見て化工の神を知ると曰ふた通り、此天地萬物を研究すればするに従て益々造物主の全智全能に驚きます、彼の世界を照す太陽といふものは、火で燃ゆる球にして、其大さ凡そ地球の百五十萬倍である、ソコメ天文學上疑ないことは、是程大なる太陽も毎夜煌々見ゆ

る無数の星の中の一つで、其中にて最も小さいものである、然らば其太陽より大なる星は其數何の位あるかといふに、肉眼を以て見れば凡そ六千見ゆる、又た望遠鏡を以て見れば十五萬見ゆる、又天文鏡といふ天体を窺ふ所の長さ三四間もある鏡を以て見ますると一億見ゆる、然るに近年に至ては星を見る爲に極く良い工夫を考へた、即ち天文鏡を以て蒼空を寫眞に取るのです、此寫眞を以て顯微鏡を以て調べると、見ゆる星は二億五千萬だといふ、實に驚くべきことではありませぬか、之に依て見ると機械が完全なるに従つて星の見ゆる數が従つて殖わて來て際限がないと、思はるゝ程である、シテ見ると未だ人間に見へない星が何百億あるかも知れぬ、此澤山の星々は先きに云ふた如く皆な太陽と同じ火で燃わて居る大なる球である、ソウして又星の距離は何の位であるかと之を計算して見ると、餘りに遠すぎて其數の名稱がなくて逆も云ひ難はせぬ、依て斯いふ遠い距離を測るには光の速力を以て致します、太陽から地球までの距離は凡そ三千八百萬里ある、是を試みに一時間に十二里半づゝ進む汽車に乗て行くとするれば三百四十年かゝる、若し人間が徒歩で行くとすれば晝夜兼行で一千年餘

かゝらなければ太陽まで就くことが出来ない、是程遠い距離を光線は何の位に来るかといふに、光線の速力は一秒に凡そ七萬七千里斗り進むから太陽から地球まで八分餘でムります、斯程に早い光線が一番近い星から此地球まで少くも三年半かゝる、故に極く遠い星なれば二千年もかゝらなければ此地球まで届かぬ、ソウして見ると此地球に於て今日始めて見ゆる星なれば、其星は十九世紀中に出来たのではなく、今を去る二千年の昔に出来て漸く其光線が今日に至て此地球まで届いたのである、是は實に驚いたことではありませぬか、斯様に想像も及ばぬ程な遠い所に萬物をお造りなさつた造物主は實に全能ではあるまいか、又た斯様に學問が進んで造物主の貴とさ所感服すべき所を益々發見す時勢に當ては、佛教神道などの神佛の説は誠に取るにも足らぬ愚説ではあるまいか、次ぎに造物主の御智慧は如何でせうか、是も亦た此世界にある所の人造物と天造物とを比べて見れば其全智なることは甚だ明かである、時計といふものは西洋紀元千三百七十年に當り、佛國パリスに於て獨逸人ドヴィクといふ人が始めて精密に仕上たもので、色々車齒輪を構造て出来て居り、スルメ鋼を巻

て其彈力の爲りに大小の車が運轉して時刻を報せる、其細工の巧なることはなかく感心する程である、なれども之を天造物に比べて見たならば其違ひは實に天地は世である、先づ人間自身の五体の構造や働きを生理學解剖學を以て調べて御覽なさい、指一本でも其構造其働き驚くほどである、其他手足から耳眼口は勿論内臓の工合まで調べたならば、其構造の細密なる其機働の巧妙なる逆も彼の時計などの如き人造物と較べも及ばぬ違ひで、如何に名人なる細工人といふても毛筋一本作ることは出来ませぬ、造物主の全智全能なる御作は之を調べれば調ぶるほど益々感心の外はない、私が弱冠の時一日佛國パリに開かれたる博覽會を見物致した、其中に生人形を陳列した所を看るに、學校に於て教師が生徒に教授する所の様子がなかく好く出来て居りますから、其前に進んで参りますと、或老人が杖を突て矢張之を見物して居りました、私は其老人の前を通り過ぎんとして會釋して御免なさいと言葉を掛けると、案内者が大に私を笑ひました、私は何故笑ふかと訝つて案内者に尋ねますと、案内者が對へて其老人も矢張生人形であるといひました、私は驚いて熱々看するに成程生人

第八 造物主の全智全能なること 五十六

形に相違ない、斯迄人目を欺く程巧みに出来た生人形は實に名人の作で云ります、然しながら出世には是よりも何十倍勝れたる眞の人間が造られてある、人々は生人形ですら其細工人の名を聴き之を讃め敬ひまするに、何うして萬物の長たる人間をお造りなされた全智全能に在ます造物主に對して之を讃め敬ふの心がありませんか、其他日月星辰より禽獸蟲魚に至るまで、皆造物主の御徳を顯はさないものは一つもない吾儕の毎日仰ぐ朝は東より出で夕は西に入る彼の太陽が、地球を離るゝことは前に述る如く凡そ三千八百萬里であるが、是は此地球をして熱からず寒からず丁度温和ならしむるに適當の距離である、若し是よりも近ければ太陽の熱は甚しくて生活物が生息に適せぬ、モット遠ければ寒氣が甚しくて草木の成長までも出来ない、其れに何うして太陽は斯く丁度よい距離に在るであらうか、全智なる造主でなければソノ計算は逆も叶はぬ、斯の如くすべて萬物が悉く良い工合に造られ、都合よく置かれてゐるのは、造物主の全智全能を顯はして餘りあると云ふべきである、聖ポーロと云ふ高名なる學者が、智慧を具へたる人間は天地萬物を見て造物主のゐることを知る而已ならず又其限りなき能力及び貴むべき所以を明かに知るべし、故に造物主を知て之を拜せざるに於ては決して言譯なき人なり、と曰ふた通りで造物主と人間の關係を構はな

いものは何うしても心の安全を得ることは出来ませぬ。

第九 造物主の全善なること

造物主の全善とは如何なることなるやといふに、眞の神なる造物主は完全なる善徳を具へ給ふといふことである、詳しく言せば不義不道理など少しも無く其諸々の善徳々の徳凡て限りなく具はり給ふといふ意味である、何故又造物主は斯く全善に在ますかといふに、造物主の性質上是非ともソツで無ればならぬからである、前にも云ふ如く造物主は無邊である、無邊ならば決して缺點がない、缺點がなければ何うでも其具へ給ふ御徳は悉く完全であると云はなければならぬ、此結論は眞理にして疑ひありませぬ、然し乍ら此全善なる御徳は世界萬物を見て全能全智の御徳を知るが如く明かに分らない、故に智慧淺くして考へ乏しき人は現世の状態を視て神の全善なることを

第九 造物主の全善なること
五十八

疑ふて種々に難問を試みるものがあります、一例を挙げて申せば、若し造物主が全善に在らば何故人間に病難苦死を興へるか、或は何故人に貧富の別を立て、甲は金満家とし乙は貧窮者とするか、是を以て見ると造物主は全善でなく却て残酷の必を持ち、愛憎の念あるものと云はなければならぬと、成程一寸御尤の様なるが、然し道理を以て考へたならば、決してソウでないといふことが分る、世に貧窮して難澁するは、放蕩の結果か博奕に耽つた成れの果で、多くは自ら招いたのである、されば是を以て直ちに造物主の全善を非難わけはない、且又一步を進めて考ふれば、世界は凡て有形物である有形故に限りがある、限りあるものなれば何うとも缺點がなければならぬ、例へて申せば世に毒藥がある其毒は人の生命を害ふといふ缺點がある、故に其毒藥の爲には幾多の人を殺した、斯様な毒藥を造り給ふた神は人間を害するものだといふたならば如何でせう、道理の分つた人ならばソンの愚説は取るに足らぬとして齒牙に掛けないでムりませう、何故なれば疾病を治癒に効能の多い薬は毒藥である、若し世に毒藥がなければ多くの疾病は殆んど治癒ことが出来ないと云ふてもよい位だからであ

る、されば毒藥をお造りなされたのは却て造物主の難有思召といはなければならぬ、假しや其毒藥の爲に死んだものが有るとしても、其は使用方を誤つたからで自ら招いた禍ひ自業自得と申すのである、又現世には暴風が吹いて家を倒し、大濤が起つて船を覆へし、爲に多くの人々を害することが時々ある、然しながら暴風が吹いて來なければ空氣は何時も同じ場所に滞つて居るゆゑ、次第に腐敗して終に呼吸に適せぬのみならず諸種の傳染病の微菌が非常に殖へて、是が爲に人畜に酷い害を懸ける、けれども幸ひに暴風大雨が空氣の清潔法となつて、是等の害を未然に防ぎ、概ね皆斯の如く世界の恐しき現象も、害あれば亦た益もある、一得一失といふは有形物に免がれざる通弊である、然るに害のみを舉げて論ずる人は、皆な眼の着け所が偏つて居るので、物事の一端を擧げて全体を評する盲論である、貧富貴賤の差別があるも矢張同じで、現世に是非なくて叶はぬものだ、若し世人が残らず位高く財産家になるならば、離れが頼に汗して田地を耕しませうか、百姓は忽ち其骨折業を停めて逸足早く田舎を逃げ出し、田地は爲めに荒れ果て米麥は穫られず即座に饑饉が來るであらう、又

た誰れが熱さ寒さの厭なく獲し漁るものあらう、貧乏人がなければ土用中に鍛冶屋を
 したり寒中に洗濯屋をするものはないといふ道理である、僭斯様に考へて見れば、世
 が隆になる爲には貴賤の差貧富の別もなければならぬことである、若し民に貧富貴賤
 の別がなければ忽ち其國は衰微する、故に造物主は國が衰微して亡びぬ爲に貴賤貧富
 の差別を以て冥々の裡に御守護なさると云ふべきである、尙此上人間が難儀を受ける
 譯を詳かに知るは、道理斗りて到底出来ぬ、之を明かに悟りたいならば人間に原罪が
 あるといふ事を知らなければならぬ(原罪の章(を見よ))造物主の至善に就て尙ほ一つの人性に關
 係したる難問がある、是は無宗教者より屢々聴く所である、即ち造物主が至善ならば
 何故人間が罪を犯さざるやう悪を爲ぬやうに造らないか、悪を爲すを知りつゝ人間を
 造りしとは何如にも不都合な話じやないかと云ふのです、成程物の性質も知らない人
 は左様な考へを起しさうな事じや、なれども悪を爲さぬ人間を造るといふことは自由
 なき人間を造るといふに同じである、人間の如き有限なるもの、爲には自由とは善惡
 を撰むの能力と云はなければならぬ、善或は惡を已が欲する儘に爲すことが出来る

第九 造物主の至善なること

いふ能力がなければ自由の權が無いと同じである、人性には智慧と自由の二つの徳が
 具はつて居るから他の動物よりも貴い、若し二つの中其一つを缺いたならば人間でな
 い、又人間にして自由が無いならば只極つた道に束縛して従ふのであるから、其働さは
 器械的で、彼の時計蒸氣船などで受た力を以て定つた働きをするのと少しも撰む所が
 ない、禽獸も矢張其通りで、彼等にも自由の能力がない、故に各々具つたる性即ち稟
 賦能力に相應なる働きの外何にも出来ない、犬は犬馬は馬各々其性の奴隷となつて、
 眞の考へもなく眞の自由もなくして働くのである、手近く申さば禽獸は完全なる器械
 のやうなものです、如何程完全でも器械だから、之を賞罰する爲めに裁判所を建てや
 うと思ふほどの狂妄者はない、人は萬物の長と云ふのは此自由といふ貴き徳があるか
 らである、自由の權利があるから無邊なる造物主の御目から見ても人間は貴いのであ
 る、又人間には自由の權があつて、善を行ふも惡を爲すも己が心の儘に出来る、即ち
 貴き働さ賤き働さは各自の自由であるから禽獸と違つて其行爲に責任がある、是不
 滅なる靈魂を神より賦與られた所以であります(靈魂の章(を見よ))僭斯く論じ来れば、右の如き

第九 造物主の至善なること

第六十二
第十 造物主の攝理
難問をする人は人性の如何なるものかといふこと、及び人間の他動物に優れて高尚なる所以を知らずして云ふのである、換言れば人間に生れたのは残念だ、禽獸に生れたならば幸福だらうと云ふと同じである、ソナナ理窟張た疑ひを起すよりも、智慧自由の如き高尚なる能力を與へ給ふ造物主の有難い鴻恩を考へて、至善なる造物主の御心に適ふやうに、一生涯行いを正しくして、心を眞直にして、善行を積むやうに力を盡すがよいではありませんか。

第十 造物主の攝理

毎々申し上る通り、萬物の原因なる天主、即ち造物主は御一体に在して二つあること出来ぬといふは明かです、造物主を除く外萬物は人間を始め日月星に至るまで総て皆な始めあるもので被造物であります、シテ見ますると吾人の拜まねばならぬ眞の神は御一体なる造物主のみである、然るに世には御一体なる造物主の存在を信するも、造物主が吾人々類に下し給ふ所の御恵の深いといふことに付ては大に疑ひを懐く

ものが澤山ある、左様な人は常に云ふ、造物主は人間をお造りなされたに疑ひない、斯然人間は神に比ぶれば其劣ること如何程なるか分らぬ、故に無邊なる造物主が人間の如き小さく卑しきものに對して御心配なさる譯はない、造物主は萬物を造つた後は是等卑しいものは構はずして捨て置くに相違ないと、斯やうな考へを持つて居るから造物主の深き恩を辨へず、又之に奉事ことも無用だとするのである、是は前に世界萬物の秩序あることを陳べました所をお讀みなされたならば、其誤りなることがお分りになるでありませうが、人々の多く疑ふ所でありますから、更に委しくお話しいたしませう、先づ世の有様を熟々お考へなされたならば、造物主は世界萬物を構はずして捨て置くなといふことは決してない、却て日々吾人にお與へ下さる御恵の厚く深きことは量ることが出来なほことで、逆も母が子を愛する深き恵みも遠く及ばぬといふは明らかに知られます、母が子を育てるには、先づ之を養ひ之に難儀不自由をさせないやうに心配いたします、造物主が世界を見ることは母が子に於けるよりも尙御心配なされ、世界の混雜せぬやう人間に難儀ないやう御守護なされて居るのであります、

御覽なさい現世に於ては人間を除く外智慧のあるものは一つもない、人間は斯く萬物に超へて智慧あるものといふても、若し優れた人があつて法律といふものを立てなかつたならば、國を治めることが出来ない、社會を結んで往くことが出来ませぬ、又雷に法律を立てた斗りでは未だ足りない人々が之に背かぬ爲に、警察とか裁判とかいふものを立て、取締るところの法律の守護者即ち王がなければならぬ、サテ智慧を具へたる人間さへも、斯く守護する國王がなければ、其法律に違はぬ、然らば智慧なき畜類などに於ては始終守護なさる神がなければ、何うして其性に關する規則に違ふことが出来ませうか、御存の通り、動物の規則といふものは禽獸其類に由て各々違ふ、今鳥が巢を營むを見るに燕は泥を以て巢を造り雀は草を以て造る、又鳥、鷹の如きは木の枝を以て造る、是は昔より今に至るまで全く同じ規則に従つて同じ造り方である又巢の大小は其卵を孵す多少に依て違ひ、其子の爲に都合よく巧みに造り、開闢以來巢の造り方を間違ふたものは一つもない、之を以て視ると智慧なき鳥獸は智慧ある人間よりも定まつた規則を能く守つて居る、智慧なき彼等が何うして種類に由て異りた

る規則を背かぬかといふに、丁度母親が稚兒の手を引いて躰かぬやう心配するが如く造物主が始終禽獸を導いて心配なさるからである、さもなければ世界が混雜にならぬ譯は少しも分りませぬ、尙諸君がお疑ひならば、獸類の繁殖に就てお考へなさい彼の猫、狗、兎の如き壽命の短きものは、一度に五六匹の子を産み、牛、馬の如き長命のものは、一度に僅か一匹である、是短命の獸類が子を産むこと少ければ、其種類は忽ち絶へるからである、總て短命なるほど子を産む度數多く、又一度に數多く孕むといふやうに出来て居るのは、實に感服すべき造物主の攝理ではありませぬか、又人類の絶へることのない爲に、其子を産むこと殆んど男女同數ならしむるのは各國の統計に依つて明かである、是人類が限りなく世界に繼續するやう造物主が攝理なさるであるといふことは明かではありませぬか、總ての禽獸虫魚皆な是に同じである、之を以て考へて見ますと、世界萬物は皆悉く人間を助けんが爲に造り、又混雜せぬやう始めより極つた規則を以て支配なされて居るに相違ない、故に若しも世界に人間がな

譯もムリ文せぬ、之に由て造物主が世界萬物を造つた後は之を構はずに捨て置くといふやうな説は、人間の御父なる造物主の下し賜はる深き御恵を輕んずる説で、恩知らずと申さんければならぬ、諸君よ吾人が日夜天より受ける所の恩は如何斗りでありませうか、吾人が世に壽命を繼いで居るのは全く天恩に依るのである、吾人が稚きとき母の乳房に縋つて飢を凌ぎ、長じては穀類肉類を以て身體を養ひ、家財道具を作るには金石草木あり、薪炭ありて火を焚き、綿布毛布ありて、寒を凌ぎ、而して是等人間の必要の品がひととして缺けることなきは、是皆悉く天より下す恩ではありませんか造物主の愛は其攝理に明かに現はれて居るではありませぬか、斯の如く日々受る所の限りなき鴻恩の萬分一をも、多くの人は考へず思ひ出さずして居る、さりながら能くお考へなさい、今諸君が無病息災であるが、若し不幸にして大病に罹り、如何に心配しても益々危く、最早手を拱して死を待つの外なきの時に當り、名醫あつて其病を癒して呉たならば如何、眞に其歸死回生の恩を有難く思ふでムりませう、然しながら諸君よ、病を癒した醫師の恩よりも、無病息災ならしむる様、終始守り下さる御方が

有ならば、尙有難いことではありませんか、其お方が即ち人間の父なる造物主である然るに天主公教を信仰せぬものは、現世の難儀苦勞を見て、造物主は幸福も與へるが亦た禍災をも與へるものだといふて、其恩の高大なることを少しも有難く思はぬ、成程現世には不幸なものが多く、難儀斗りのやうである、けれども難儀不幸は皆な人が自ら招くのであるといふことは、前きに造物主の全善なることを説くところに論じました、見やうが違ひますから重ねて陳べます、先づ難儀には二種あつて、一は智慧の誤りより出で、一は情の誤りより出るのです、例へば火といふものは人間に一日も缺くべからざる必要のもので、之無くんば吾人一日も生活することが出来ない、然れども誤つて火傷をし、家を焼くこともありません、馬は人を乗せて走り、其便利なることは御存の所だ、けれども誤つて落ちれば、命を失ふこともある、手斧は大工の爲に便利である、けれども誤つて足截る、総て皆な益あれば害もある、然れども思はなければならぬ、其害の多くは吾々の誤りより出るもので、畢竟自ら招くのであるといふことを、次は情の誤りより出るもの、即ち情が振れた爲に、罪を犯し、其爲

に受くるの難儀、是は原罪を論ずる章に於て委しく論じますから、暫らく省いて、只哲學者ド、メストール氏の知言を、聖彼得堡の夕話と題する著書中より引いて、此論の局を結びませう、曰く真理と世界の状態、及び各國の歴史等を研究せるもの、爲に定理原則とすべき程明かなる規則一つあり、即ち凡ての艱難辛苦は、天罰にして其原因を究むれば、如何しても人間の犯したる罪に歸せねばならぬ、是は一個人の受るも國民の受るも皆な然り、而して其原因に二つある、即ち已れ自ら犯すの罪、及び其祖先の犯したる罪是なり、されば艱難は造物主より出るに非ずして、其義より出るものなり、故に世に艱難あるを見て造物主を疑ふは、恰も造物主の眞義を知らずといふに同じ、斯る批難をなすものは、眞理を解せざるものなりと、實に其言の通りである諸君よ何うか後に論ずる所の原罪及び其傳來といふことを見て、ド、メストール氏の此言の偽りならざることを知り、萬善の源なる造物主の種々の深き恩を人間に下し、吾人が依て以て不自由なく世に生活せらるゝやう攝理し給ふと信じ、其恩の山よりも高く海よりも深きことを考へ、一生涯其恩を謝し、其命を守り、責めては其恩の萬分

一を報ひんと冀ふのは、眞理にして人間の義務なることを御承知なさい。

第十一 造物主と人間の關係

是迄申しけたる所を簡約て云へば、世には萬物を造りなされた、造物主が必ず在らせられる、其造物主は萬物の本源、森羅萬象の原因であるから、無邊なる御者である、無邊だから、無形にして御一体に在らし、始もなく、終りもなく、全智、全能、全善の徳を具へ給ふ御者だといふのである、又造物主は世界萬物とは全く別にして、自らを在らせられる、一つの御者だといふことを知らなければならぬ、例へて申せば、一個の人は他の人類とは、別にして活ける一つのものなるが如くである、故に天主教の經典、舊新兩約聖書に造物主を稱して活ける神と度々記してあります、多くの人が思ふやうに、眠つて居るものではない、盲者聾者の如きものではない、世界萬物に對して何の心配もしないやうなものではない、ソナ大なる間違た考をする人は、後には飛だ目に遇はねばならぬ、無邊なる造物主は、活ける一つの御者にして、世界萬物を

第七十一 造物主と人間の關係

主宰し、人の行を視、人の言を聞き、人の心の中までも知て居られる、故に其無邊なる義を以て人の思言行に於て爲したる善惡に、全く權衡たる賞罰を、與へねばならぬといふは眞理でまゝです、造物主は活ける一つの御者であるといふことを考へないから、之を恐れぬ無宗教者が多い、若し造物主は活ける神だといふ事を深く考へたならば、何うしても之に對して心配せねばならぬ、造物主が萬物をお造りなされたのは、止むことを得ず造つたといふ譯ではない、無邊なる造物主は、無限の自由權を具へ給ふ、故に萬物を造ると造らざるとは其權内にあります、人間が造られたのは、造物主の自由權に依て與へられたる恩である、人が生れて現世に來ること、死して現世を去ることは、皆な造物主のお定めなされたところで、生死共に偶然なることは決してありませぬ、されば何う考へても人は造物主に對して全く獨立なること、毫も關係を持たぬといふことは出來ないことである、即ち造物主は人間の本であるから本末の關係がある、人間の眞の主であるから主従の關係がある、人間の眞の親であるから親子の關係がある、尙又哲學上より研究したならば、是等の關係よりも一層其關係

係がある、即ち造物主は無邊であるから、自らの力を以て自然に在せられる、故に其存在は絶對である、天地萬物は本虛無より造り出されたので、始めもあり限りもある故に其存在は待對である、之に依て萬物の存在する状態は、之を虚無と極めねばならぬ、自己の力を以て存在するでなく、他の力に依て存在するものは、其働も自己の力ではない、其活きて居るも自己の力ではない、斯の如く虚無の状態なる萬物は、其存在する爲に、其活きて居る爲に、絶へず造物主の御力を受けねばならぬ、若し暫時の間も其御力を受けなかつたならば、たちどころに消滅してしまはなければなりません、假設は今私の手に依て支へられたる石が、其手を引たならば直ぐに地に落つるが如く、世界萬物も造物主の御力が離れたならば、即ちに消滅することは、恰も影の形に添ふが如くでまゝです、而して其消滅するとは運轉が止まる、働きがなくなるといふやうなことではない、之を人間にして云へば、死ぬるといふことのみならず、其肉體も其靈魂も全く消へて仕舞ふのである、簡短に云へば、虚無より萬物を引出したる力が止まるならば、復び虚無に歸らなければならぬといふ道理である、此故に哲

第十一 造物主と人間の關係

學には物の存在するは、絶へず造物主に造らるゝに同じと云ふのである、人間が現世に生れて生きて居るのは、絶へず造物主の御心配を蒙りて居るからである、斯の如く深き御恩ある造物主に對しては、其關係の重い事は例へるにものがない、此故に設ひ無神論者でも、何にか考へるとき、何にか研究するとき、否でも應でも造物主に當らなければならぬ、夫れ眞理とは何か、造物主の全智より出る所の理である、人の想像から出るものでない、道の本原天より出づとは、昔の支那人も云ふた、其故にこそ眞理は時に由て變り、處に因て異なるものでない、萬國萬代、一定不變の法則とは何か、造物主の義より出る所の善惡の差別である、故に法則は造物主のお定めなさつた性法に適ふに従つて益々完全になるのであります、其他天文学、理化学、動植物學、地質學などの諸學問は何か、是又造物主の造り給ふた有形物の力、働きを研究するといふことである、故に學問上種々の發明があると云ふも、其は眞の發明ではない、只造物主の立てられた規則の幾分を覺るといふ丈に過ぎない、斯の如く世界萬物凡て造物主に關係せぬものは一つもない、古語に諸法は神より出づとある通りである、然し

ながら吾儕人間は自由の權を具へて居りますから、關係は嚴肅と極つて之を絶つことが出来ないといふても、人間の方から、其關係を保ち、或は捨てることが出来る、例へば不孝なる子は親子の關係を捨てたのである、然し親の方から云へば、關係の有様が變るのみで決して切れない、即ち孝行の子なれば親の方からは愛といふ關係じや、けれども不孝の子なれば怒りといふ關係に變つたといふ違ひ斗りで、其關係は始終繋がれて居る、是と同じく人間も神に對しては忠義と孝行の關係がある、なれども人間は之を棄てる事が出来る、然し神は無上の主人であるから、人間に對して無上の支配權がある、其支配權を脱れることが出来ないことは、恰も人民が政府の定めたる法律に背くことは出来るも、其制裁即ち所刑を脱るゝことが出来ないと同じである、否な人民が法律に背いても、工夫を以て或は其所刑を逃るゝものは折節あります、けれども造物主は無邊にして全能に在すから如何に工夫を凝らしても、其無上の支配權を免るゝことは人間の力に及びませぬ、何うでも神の支配の下に行つて其相當の罰を受けねばなりません、是れ宗教の必要なる所以で、是非又人間は眞の宗教を求めて、

第十二 神に就て諸種の謬説
其關係を正當に保たなければならぬといふ次第で云ります。

第十一 神に就て種々の謬説

古來世界萬國に行はれました所の神に就ての、諸種の謬説は其數澤山ありますが、要するに左の五つに過ぎませぬ、依つて茲に一言其非を辯じて、以つて結論に換へませう。

第一は、無神論です、即ち世に神ありて世界萬物を創造、之を主宰する等のことは妄想であるといふ説である、此説は別に論ずるまでもなく、前に述べたる有神論を看ば其非なることは明かです。

第二は、物質論或は唯物論といふ、即ち有形なる世界萬物は、神の力に依て造られたるものでなく、自然に存在し、始めも、終もないといふ説である、此説に従へば有形物は、無邊なるものと云はなければならぬ、始めもなく、終りもなければ、時間に付て無邊である、無邊とは無差別なるが故に、時間といふ一點に付て無邊ならば、其他

全体も無邊ならねばならぬ、即ち其容積、其力量共に限りがないものでなければならぬ、又之に變化、破壊、缺點など決してある筈がない、然れども有形なる萬物は如何に大きくても、實際に限りがないと云はれぬ、其他變化も、破壊も、缺點も皆なある(前章遺物主の性質を論ずる所に明か)されば物質論は、凡そ物質は無邊なるを得ず、といふ哲學の定論に背くこと明かである(一)、哲學者ボスウが凡る自ら動くこと能はざるものが、如何にして自ら存在することを得るやと曰ひし如く、自己の力を以て動くこと出来ない物質が(情性を論ず)如何様にして自ら存在することが出来ませうか(二)、物質の性は死物である、故に化合力、引力ありと雖も生命なし、此生命なき物質が如何様にして生命あるに至りしか、物質の有て居る化合力とは、原子の相集り、或は相離るゝ力である、引力とは物の相引く力である、されば生命は化合力、引力より出づる現象とは云へない世に生命あるは必ず他に其原因がなければならぬ、物質論者又曰ふ、物質には化合力、引力の外ないに相違なし、然れども其化合力、引力の働きに因て、物質が様々の形状を組織した、其結果生命を生じたのであると、今假りに物質論者の云ふ如く、有機体

組織を物質にある化合力、引力が然らしむるとしても、ソハ形状の變化にして、性質の變化ではない、されば物質に以前有たない力、即ち生命の生ずる所以はない、況して無機體なる物質が、其固有る力のみで、自ら有機體の組織をなしたる實例一つもなきに於てをや(三)有形物にあるところの力は、無形なる働きを爲すことが出来ないといふは眞理である、然るに人類の如く高等なる活物は、嘗て物質に有たない所の無形の働きを爲す、例へば思想、判断、愛憎、嫉妬、傲慢などの如し、されば是等の働きは何より来るか、之に依て世界萬物は物質斗りでない、物質の外是非無形なるものが必要ならぬといふは眞理である(四)。

第三は、多神教です、是は神が二つ以上あると信するのであるが、其誤りなることは前章造物主の性質を論ずる所を看ば自ら明かであらませう。

第四は、萬有神論です、是は世界萬物は皆な神の部分であるといふの説である、此説の誤謬なることは性質の全く相反するものは、決して同一なること能はずといふ定論を以て見れば甚だ明かである、例へば死物と活物とは全然反對の性質じやから、石

と人間と同一といふことは出来ない、其他有形と無形、有始と無始、有限と無限など其性全く反對なるもので同一のものでない、ソコテ神の性は無邊にして其存在は絶対である、萬物の性は有限にして其存在は待對であるといふ事は、第十一造物主と人間の關係の章に述べたる通りで、神は萬物と全く相反する性質のものであれば、決して同一とすることが出来ないといふは甚だ視易い道理である、然るに佛教や神道で人間が死ねば佛や神になるといふのは、此視易い道理すら分らない愚説ではありませぬか。

第五は、無宗教者です、是は造物主のあることを信しても之に對する義務を盡すこと即ち宗教を奉ずる必要はないといふのである、此説の誤りも亦造物主と人間の關係の章を見れば明かである。

以上五つの説の誤謬なることは、無智無學のものといふても明らかに分ることである、然るに斯る誤謬の道に入るといふは、態々眞の神を棄てるので、造物主に對して不忠不孝此上ないことである、死後の救かりは決して得られませぬ、聖書に曰く、死後の

第十二 神に就て諸種の顯現
七十八
救かり即ち幸不幸は人々の手許にありと、人間の壽命は草の葉に凝る露の如く、今にも風の爲めに零るかも知れぬ、されば最終の幸不幸が定まるのも今の間である、何うか諸君今世にも來世にも造物主に愛される様に、片時も早く御心配なされんことを希望致します。

第二篇 人間の事

緒言

今を去る凡そ二千年前高名なる學者ブルタルクが著した書籍に、世界萬國を巡歴ば學問も法律も殿堂も學校も演劇も無い國を見出し得るやも知れぬ、然れども神も社も祈禱も祭典も無い即ち宗教の無い國は決して見出し得られない、之に依て見ると宗教を信ずるのは人性である、と記してありますが、實に其通り、人間が神を信じて、之を拜み、之に従ひ、之に祈り願ふなどの事は、其生來から出ることでもります、ソウして哲學者は人間の定義を極めたいと思ひまして、人類は智慧のある動物と云ひました成程此定義は眞である、けれども理窟を好く人ならば直ぐに其間に啄を容れて、禽獸には眞の智慧がないことは素より明かであるが智慧らしい働きが少しく見えるでは

ないかと云ふて非難することが出来る、故に哲學者は是よりも一層明確な定義を極めたいと思ふて、人間と禽獸との最も大なる差別を探りまして、人類は宗教を信する動物なりと云ふ定義を再び極めました、是れ前に述べたる如く人間が神を信じ拜むは其生來であるが、畜類は如何に高等なる者でも如何に賢い者でも神を信じ拜む者は決してない、シテ見ますると人間と畜類と最も異なる點は此神を信すると信せざるに有からである、ソコで此定義を標準と致しますると全く無宗教なる人は如何である、矢張り人間と曰はれませうか、其容貌や智慧や自由は人間に相違ない、なれども其生來に背く心情に於ては如何、人間と云はれませうか、斯の如く人性に従つて考へ來れば、眞の人間といふ價値の爲めには是非とも宗教は必要である、此に於てか吾儕は又た其宗教といふものは如何なるものかと云ふことを、知らねばならぬ必要が生じます、宗教とは拉丁語にレリシオと云ふ、レリシオとは繋ぐと云ふ意にして、造物主と人間を繋ぐ道といふ事である、即ち造物主と人間との間には、色々の關係を教へる道でこれが眞の宗教である、故に宗教を知てこれを信するには先づ造物主と人間の事を研究せねばならぬ、此二つの者を研究せねばならぬ其間の關係を知ることが出来ぬといふのは申すまでもない事である、故に以上に於て造物主の事を委敷説きました、依て是より人間の事を次第を追ひ申し述べる積りでムります。

第一 人間は肉軀の外別に靈魂を具へ居るや

人間の性質に就きましましては、其意味餘りに幽玄微妙して悉く説明することは出来ませぬ、其議論は際限なく殆んど止まる所を知らぬといふ位である、故に今日に至るまで何とも決定せざる所もあります、一例を擧ぐれば無形の靈魂と有形の肉軀とが如何様にして一個の人間となる程に密接一致することが出来得るやと云ふことは逆も説明し能はぬ様の類であります、蓋し斯の如き事は今日以後とても人智に及ばぬことだから、恐らく説明しの期がなからうと思ひます、然れども既に明かに分つたる所も澤山ムります、今茲には其分つたる所を陳べませうが、其には先づ人間と云ふことに就て誤つた議論を研究するのが最も捷徑でムります、往昔より今日に至るまで

第一 人間は肉軀の外別に靈魂を具へ居るや
八十二
想像に依て立てたる誤謬の議論は種々ありまするが之を概括れば左の四つに過ぎませぬ、即ち、

第一 は人間と云ふものは決して存在しないと云ふ説。

第二 は人間は存在するけれども肉軀の外別に別に靈魂が有ると云ふことはないと云ふ説。

ふ説。

第三 は靈魂が肉軀の外に存在するけれども死するときには消滅すると云ふ説。

第四 は輪回説即ち死後生れ替ると云ふ説である。

此四つの説を調べたならば人間の性質が幾分か分るでふりませう。

第一 人間は存在せぬといふ説を立てたる者は耶蘇基督降世前凡そ五百年に當りて哲學者バルメニードと云ふ人である、該人の考には凡そ不完全即ち缺點といふ事は有り得べき事でない、世界萬物及び吾儕人間は缺點あるものである、故に實際に在るものでない、只存在すると云ふ假狀だけである、即ち人間の生きて居るも居ららしむと云ふまでのもので想像である夢の如きものだと云ふのです、斯様な説の謬妄なる事は今

更改ためて茲に論ずるまでとはふりませぬが、唯高名なる學者と云ふても、人智は淺きもの、弱きもの、馬鹿らしい考へを起すものであると云ふ事を御合點なさる爲めに一言申述べ置くのであります。

先づバルメニードの立てました議論の前提なる、缺點と云ふことは在り得べきことではないと云ふ規則は、何の證據もなくしてバルメニード其人が自分勝手に定めた規則である左れば此規則を前提として歸結した議論は決して首肯することの出来ないことではあるまいか、且又人間の生きて居るといふは想像だ夢だと云ひますが、想像する智慧がなければ想像は出来ない、夢みるものがなければ夢は無、假りに萬物が想像としても之を想像する智慧だけは生きて在ると云ふは甚だ明かである、又萬物が夢としても夢みる所のものは活て在ること疑ひない、之に依て見ると右の如き論は自分の及物を以て自身を殺す愚論である、バルメニードは自分の論の眞意さへも考へなかつたのである。

第二 人間は在るけれども肉軀の外別に靈魂はないといふのは、物質論者唯物論者が

第一 人間は肉軀の外別に靈魂を具へ居るや

第一 人間は肉體の外別に靈魂を具へ居るや

八十四

靈魂に就て立てる説である、然しながら人間は肉體の外別に靈魂を具へて居ると云ふことは如何にも明瞭にして一點の疑ひを容れる餘地なき證據が二つあります、先づ哲學上から論じますれば、總て働かざるものは物の性質に適合せざらぬといふは確かな定論である、之に依て物の性質に適合ぬ即ち其本性に勝るほどの働きは決して出来せぬ、然るに人間を看まると全く無形なる働きが種々あります、例へば思想判断などは此類である、是等の働きは決して有形より出づる筈はない、何となれば有形なる物質は前に論せし如く皆惰性を有つて居るものだから無形物よりも劣るものである、されば有形なる肉體にて決して無形なる働きは出来ない、是非とも肉體の外別に無形なるものが在て其物が無形の働きをするのである、吾儕之を稱して靈魂といふ、(其一) 尤もに極めて分り易い證據がある、即ち吾儕人間は無形なる靈魂を具へて居るといふは甚だ明かですから人々皆自ら悟つて居る、之を疑ふものは滅多にない、今世界各國の言語を御覽なさい、何れの國でも私と云ふ語は毎に靈魂を指して云ひまする人々皆な自己の身に就て話すとときは私と云はずして私の身といふは諸君の平常お聴きなされる所でムりませう、之を以て見ますると私と云ふものは肉體の外に在るに相違ムりませぬ、極く分り易い例を擧げませうに私は今日此本を讀むだといふ話の意味は何であるかと云へば私の體が此本を讀むだといふことではない、私即ち靈魂が肉眼を以て讀むだといふ事である、大學といふ本に、心焉に在らざれば視れども見えず聴けども聞えず食へども其味を知らずと書いてあります通り、靈魂に注意なくして讀むだならば肉眼は讀むでも其意味も分らず又た記憶でも居らず宛も讀まぬ前に同じである、其他五官を以て感ずることは皆な其通りである、此故に靈魂といふものは人の内に最も貴きものにして人間の主要である、體軀は只其靈魂の容器靈魂の使用器械であります、吾儕は靈魂を具へて居るから人間である、靈魂がなければ人間でない、されば人と云ふ語は靈魂の在るものといふ意味で靈魂なき人と云ふのは意味のない語である(其二) 以上陳ぶるが如く吾儕人間は無形の靈魂を具へて居ることは甚だ明かである形がないから眼に視ぬない、視ぬないといふても人々各々一つの靈魂を具へて居ることとは決して疑ひありません。

第一 人間は肉體の外別に靈魂を具へ居るや

八十五

第二 靈魂は如何なるものなりや并に其本原

吾儕人間が各自具ふる所の靈魂といふものは如何なるものなるか、其何れより來りしか、何れに往くかと云ふ問題は極めて鄭重、極めて大切なることはありませぬ、之が分りませぬならば吾儕は現在のこととは格別未來のことに就て何うしても安心が出来ない、昔し希臘羅馬の學者等は是等の問題の肝要なることを知て平生民間に行はるゝ諺になる程まで人々に知られたる名高い格言を書いた、即ち己れを知れよと云ふことである、此格言の意は人間は他の物を知ることよりも先づ己れのことを知るが大切である、若し己れを知らざれば萬物の學問を研究致しても畢竟跛足の學者だといふのである、何うか諸君は斯様な跛足の學者にならぬやうに、先づ己れに就て研究するやうに願ひたい、ソコデ己れ即ち人間は何様のものでムりませう、廣く考へますると哲學に云ふ通り人間は一個の小天地である、宇宙に造られたる有るとあらゆる萬物の性と又徳と力とを総て含んで居りまする、萬物の粹を一身に蒐めたものか人間と云ふても

敢て過言であるまいと思ふ、之を以て萬物の長といふのは最も適當な語でムりまする然らば如何様に萬物の性及び其徳と力とを含んで居るかと云ふに、先づ人間は其肉體を以て物質の性を具へて居る、故に物質界の中である、又草木の如く生きて居り禽獸の如く働くされば草木禽獸にある力は悉く具へて居る、尙又其上に禽獸に出來ない働き、持たない力を具へて居りまする、約めて云へば人間には三つの生命がある、一つは草木の如き生命、二つは禽獸の如き生命、三つは智慧の生命である、斯く申しますると少し分り兼ねるやも知れませぬから、私は支那の學者が用ひ始めた語を借りて申ませう、是は大に分り易いのみならず説明に餘程便利でムりまする、支那の學者は魂を三等に區別致し、草木の如く單に成長せしむる魂を生魂と名づけ、禽獸の如く成長せしむるのみならず感覺し記憶するの魂を覺魂と名づけ、人間の魂を靈魂と名づけました、然し草木と禽獸に就て魂の字を用ひまするは聊か穩當でムりませぬが分り易い爲に暫く之を用ひるのである、ソコデ人間の魂が有つところの力は生魂と覺魂とが有つ力は勿論其上に又智慧と自由の力を具へて居る、故に靈魂とは何かと云へば肉體

を活し又之を成長させる力及び感覺記憶と智慧自由の力を併せ具へる所の活ける無形の體でムリまする、詳しく言へば人間の凡ての働きの本原は靈魂である、彼の草木が活き且つ成長する働きの原が靈魂なるが如く人間の肉體が活き且つ成長するの働きの原に附である力だけれども、其働きの本原は靈魂である、又彼の禽獸が活き且つ成長する働きの原が感覺し記憶する力の原が靈魂なるが如く人間の感覺と記憶の本原は靈魂である、其他又智慧と自由の力があるのである、眞實に云へば靈魂其物の本性に因て具はる力は智慧と自由の二つのみでありませ、けれども肉體と靈魂が合して一個の人間となりし其間は靈魂と覺魂の力を併せ具へて居るのです、即ち智慧と自由は靈魂の本有(エッセンス)にして靈魂と覺魂の力は偶有(アクシデンタル)である、以上述べたる所は最も完全なる哲學上の議論で、此議論よりして一つの重い結論を生じます、即ち靈魂及び覺魂は物質の性に附いて在る力である、故に靈魂は唯草木を活かし且つ成長させる爲のみに在るもの、覺魂は活かし成長させる及び感覺し記憶して以て或は飛び或は歩み或は食を求むるなど種々な働きの出来る爲のみにあるものである、分り

易く例ふれば巻鋼が時計の針を回す爲め斗りに着けたるものなるが如く、靈魂と覺魂は草木禽獸を活動たればかりに具はつたる魂である、故に草木が枯ると同時に靈魂は消ゆる、禽獸も死ぬると同時に覺魂も滅して仕舞ふ、何故なれば物質なる器械のみの爲めに出来た力であるから其器械がなくなると共に無くなるといふは當然である、物質なる器械が目的で出来たのだから、其目的物がなくなれば決して残る筈がない、然るに人間の靈魂にある智慧と自由なる本有の力は物質に着てある力でなく、又物質の爲めに出来た力でもない、無形なる一つの體に着てある力である、故に靈魂及び覺魂とは全く反對である、靈魂が肉體の爲に存するのでなく却て肉體が靈魂の爲に存するのである、されば肉體は靈魂の容器其用ふる道具に過ぎない、靈魂が主人で肉體は家僕であります、換言すれば草木禽獸は靈魂と覺魂を具ふる物質なれども人間は之に反して物質なる肉體を具ふる靈魂でムリます、之を以て靈魂と覺魂とは其性質が全然違ふて居るもので、是が禽獸と人間の最も大なる差別であります、此事は吾等人間に取りますして實に肝要なることで、宗教家、無宗教家の分るゝのは全く此靈魂の働き方にある

るのであります。現今ルツマンの説は心酔たる物質論者は曰く、靈魂と靈魂とは其性質決して異なる物でない、只異なる點は階級だけである、即ち禽獸の魂は人間の靈魂と同じ力同じ智慧と自由をも具へて居るが、只厚い薄いの違ひあるだけである。と斯様に申しまする、シテ見ると人間は完全なる畜類といふのである、之は十九世紀に至て始めて建てた議論で昔より何千年の間にはソクラテス、アリストット、プラトン、シセロンなどの如き多数の哲學者もありましたが、斯の如き愚論を發明するは之の賢者で無かつたと見えまする、然しながら斯の如き説は正直の心を以て考へる人にはお話しまでにもならない、何となれば智慧と云ふものは單に思想を起すの力でない、思想を以て彼是考慮ると云ふことで、種々の思想を較べ其結果を取りて結論する、即ち判断するといふことが智慧である、就中智慧の最も勝れたる力は概念であります、即ち種々の思想より一般に通ずる個所を抽象して一つの思想を起すと云ふ力である、而して思想といふものは感覺から出るものが多い、例へば物質の形色運動熱寒などの思想は感覺より出でたるものである、斯の如き下等な思想は智慧がなくても暖

味ながらも出される、故に禽獸でも是等の思想は微かに起すに相違ない、けれども靈魂には感覺と記憶との二つの力斗りだから禽獸の起す思想は感覺的の思想(所謂知覺)で、彼等は寒いといふ感覺と、寒さといふ思想とを分けることは出来ぬ、是れ感覺と思想と一所に密着してあるからである、されば獸類の一番優れたるものが寒いといふ感覺的思想を如何程に強く起したときでも、寒さといふ概念は決して起すことは出来ぬ、何故なれば寒さといふ思想は寒いといふ感覺に着いて居るものではないからである、寒いと寒さとは種類の全く違ふ思想である、禽獸の如き智慧のないものには寒さといふ様な完全な思想を起す方がない、故に禽獸には全く思想明らかなる思想がない、近く曰はば真正の思想と云ふものがない思想がないから禽獸は言語を用ひぬ、夫れ言語とは何であるか思想の表號である、只痛む喜ぶ怒る懼れるなどの如き感覺的思想を表はす爲めには彼等の叫聲だけで充分足りて居りまする、人間も禽獸の如く感覺を具へて居りますが、其感覺より出る思想でも之を以て考へるといふ特別な働きが出来ません、即ち感覺と思想を分け又之を考へ其理由其状態其規則などを研究したり、又之

に依て最も優れたる所の概念といふ思想を起すことが出来る。斯く概念を起すことが出来るから議論を起すこと、或は結論を起すこと、出来るのである。人間は如何程愚かなものといつても、寒さ、暑さ、大さ、小さ、及び美善悪などの概念を自然に起すものはない。けれども禽獣に至っては如何程賢いものといふても決してこの概念を起すことがない。彼等は感覺する力ばかりで感覺したことを比喩考へる力はない。之が靈魂と靈魂の一番大なる差別である。是只階級の差別といふのみならず性質の差別である。人間の靈魂と云ふものは全く禽獣の靈魂に存たぬ力を具へて居るのである。されば眞實に云へば草木と禽獣は性が違ふ。禽獣と人間も矢張り其通り性が違ひます。然るに前に述べる如く、活ざる成長する力のみの草木と、活ざる成長する及び感覺する記憶する力のみの禽獣も、又た活ざる成長する感覺する記憶するの外智慧と自由の徳を具へて居る人間と其間只階級の違ひだけで性質は同じだといふたならば、論理上草木も禽獣も人間も同じものといはなければならぬ。サル、ウイン、説に従へばなんと愚かな結論に達するではあるまいか。靈魂上の議論は人間に取りまして甚だ肝要でムリますから餘

第一 靈魂は如何なるものなりや、或は其本原

九十三

り長くなりまするが智慧の事に就て尙少しく申上ねばなりません。先づ智慧の明かなる徴表は進歩と云ふことで、是は智慧の性である。故に若し進歩といふことがないならば智慧が無いのである。そこで世界萬民を見渡しまするに最も吾等の眼に着く所は進歩といふことで、如何程進みましても是で足りるともない。進めば進めばほどモツと進みたいと云ふのが人間の性である。人が生れた時には何も知らず何も分らない。けれども追々成長するに従ひて智慧が進む。人間には際限なく進むといふ力を具へて居るから學問や器械の發明は勿論衣服、飲食、住居までも益々進んで開化するのである。禽獣は之に反して其生るゝや否や知るべきことは自然に知り、曉るべきことは自然に曉るものである。例へば彼の小蜘蛛を御覽なさい。矢張り蜘蛛と同じ様に巧みに網を張る。彼等は皆習はずして是に至るので漸々上手になるといふことはない。其他蜂でも或は鳥でも皆ソウです。生れると同時に其働もチャンと極つて居るのです。御存の通り鳥の巢といふものは其類に依て形が違ひますが昔しより其形甲類と乙類とが彼是曖昧したといふ様なことは決して無い。鳥が自分の巢の構造を廢りて鷹の巢の擬

第二 靈魂は如何なるものなりや、或は其本原

九十三

第二 靈魂は如何なるものなりや並に其本原

九十四

似したことはない、擬似しやうといふ思ひまでも決してない、何時も其性で極た形に巢を造りまする、之は何の考へもなくして何うでも其性に從つて働かねばならぬといふ證據である、禽獸は総て其通りで開闢より今日まで何んなツマラヌ器械でも造つた例しは一度もありませぬ、火を焚くことの冬に如何程便利なるかを思ひ附かぬ、手近く申さば禽獸は其性の奴隷である、性で極つて居る働きの外は何も出来ない狐は穴を掘て棲むのが其性であるけれども狗猫は穴を掘らない、荷を負ひ車を挽き田畑を耕すは牛馬の性に適合仕事であるから出来易い、獅虎は牛馬より強いといふても其性に不適合からソナナ仕事は決して出来ない、人間は至る之と違ふて何んな仕事も出来何んな擬似も出来る、是れ習ひ覺えて幾位でも進むことの出来ぬものだからである、以上申し上た色々な話をお聴きになつても靈魂と靈魂と同性のものとお考へなばりませうか、只厚い薄い強い弱い下手上手といふ差別斗りだと云はれませうか、若しソウいふものがあれば黒と白と同じ色だと云ふ狂氣者に同じではありませぬか、左様な事をいふものは故意に論理を度外視する人だからソナナ人に対して論ずるのは金佛に向つて論ず

るのと同じで無駄骨折である。

以上論ずる所に依て智慧のある靈魂を具へて居るものは人間だけであるといふことは明かでありませぬが、靈魂には智慧の外靈魂に有たない尙一つの自由といふ力を具へて居りまする、此自由に就ては議論は随分意味が深いから委敷論じまするには一席のお話して盡すことは到底出来ない故、哲學的の奥深いことは措きまして其概略を申し上ませう、先づ自由と云ふことは其意味を推擡めていへば各々心の思ふ儘に爲る、即ち意にも智慧にも或は行爲にも總て吾勝手にするといふことである、ソコテ人間は眞實の自由権を具へて居るから、肉體を以て彼の行業を爲るとか爲ぬとか、或は智慧を以て此事を研究するとか研究せぬとか云ふことが勝手に出来る、シテ見ますると眞正の自由なるが爲めには少くも二つの思想を比べて考へ其中の望む方を選びたいふことではなければならぬ、故に禽獸には眞正の自由が無い、何故なれば前に述べたる如く禽獸は眞の思想を起す力がなく又二つ以上の思想を比べて考へる力がないからで云ふます、尤も禽獸にも自由の働きは現ぬるけれども是は眞正の自由ではない、禽獸の思想

第二 靈魂は如何なるものなりや並に其本原

九十五

が感覺的思想なるが如く其自由も感覺的自由(所謂感能)である、微かにある思想に伴ふ微かなる自由を以て働作ので其働作の範圍も極めて狭いのです、前に云ふ通り禽獸は各々其性の奴隸で与ります、蜘蛛は其性に定められたる巢の外に特別のものを懸るの自由がない、鳥は已れの類の巢を棲りて他の類の巢を營むの自由がない、狐は穴を掘らずして狗の如く棲むの自由がない、されば時として自由の様なる働作があると云ふも其性に引れて働くのである、例へば今狗が左に行かずして右に行くといふのは人間の如く其利害得失や理不理を比較商量してするのでなく唯其時其時の感覺に因て働くものであることは論ずるまでもなく人々自然に分つて居ることで、彼等には眞正の自由がなく善惡を分別することまでも少しもないと承知して居るから禽獸を糺す爲めの裁判所を建てた國が何處にもないのである、只猛獸の様に人間を害するものは別に裁判も何もなくて之を殺します、是は其外に道がないからであります、右申し述べた所を以て見ますると人間は禽獸と同じ性で只完全なる畜類だと云ふのは大いに論理に戻り萬物の長たる人間を潰すの詭で造物主に悪口するものと云はなければならぬ、

聖書開闢の事を記したる所に人間は神に象りて造られたものと書て与りますが、是は即ち造物主は御自分に似たる靈魂を人間にお與へ下されたといふことで、其靈魂が造物主の如く無形なる体で、又造物主の如く智慧を具へて居り造物主の如く不滅にして終りなく生きて居ると云ふことである、故に天主教に於ては人間は世界の中に一番貴いものと教わる、造物主は無邊絶對にして此上ない御者、人間は極く小さく極く弱きものといふても天主教に於ては人間を造物主の子の如きものと教へた、故に信者が造物主に對して祈禱ときには天に在す吾等の父といふ言葉を用ひます、是は造物主の命令で与ります、斯の如き貴き人間を高等の畜類だなどといふのは實に甚だしい惡口ではありませぬか、何してコンナ議論を立てた學者があるかといへば其理由は只々人間が完全な畜類で其性が同じものならば造物主に従ひ又た之を拜むといふ關係がなくなる、人間は造物主の支配を受けることもなく又其命令を守り其道を踏む義務もなく全く獨立にして氣儘勝手になると云ふこと計りでダルウイン説物質論などを唱へ出したのである、又其説を賛成あるものが多いので与ります、若しもダルウイン説物質

第二 靈魂は如何なるものなりや並に其本原

論などが宗教に關係のないものならば決して之を考へ出す人もなく又之を賛成する人もありません、否却て是等の説は右哲學上の種々の證據に依て議論にも眞理にも實際にも合はぬ馬鹿らしい論だと云ふでありませう、斯様な不道理な説人間の顔へ泥を塗る論が人々に歓迎されるは世に世は滄季になりました亂倫てしまいましたのです、ナント賢に悲むべき次第ではありませんか。

上來申陳べた所を搔擗んで再び茲に申すれば、人間とは何か有形なる肉軀と無形なる靈魂とを具へたるものである、然らば其靈魂は何んなものであるか、肉軀を活し成長させる力及び感覺記憶するの力其上又智慧と自由の力を具へたる無形の體である、肉軀が有形體なる如く靈魂は無形の體である、無形の體だけども體であるから力が即ち靈魂と云ふこととなく靈魂と云ふ體が力を有つのである、是は甚だ明かなことである何故なれば力と云ふものは體がなければ働くことは出来ぬ、今有形的の力を例へにして日は歩むと云ふ力は歩むもの即ち足がなければ、其働きを顯はすことが出来ぬ、音響といふものも空氣の波動がなければ決して其働きが分らない、火といふ

力も燃る物體がなければ矢張其働きがな、故に凡て有形的の力が働くには有形物に著いて居らなければならぬ、若しソウデなければ歩む、音響、火などは唯其思想がある斗りで實際にあるものでない、無形なる力も矢張同じで其働く爲には是非とも無形なる體に著いて居らなければならぬ、智慧と云ふ能力も智慧を以て働く無形の體がなければ唯思想にして何にもない、自由と云ふ能力も自由に働く體がなければ唯自由と云ふ思想斗りである、若し智慧と自由の二つの能力が無形の體に著いて居るでなければ恰も空中に建てたる樓閣の如きものと云はなければならぬ、是を以て物質論者は智慧も自由も腦髓に具へたる力だと云ふ、なれども此説は眞理に背く、何故といへば智慧と自由は無形なる能力で腦髓は有形なる器械である、ソウして凡て性質に優れる力を有つことは決して出来ぬといふは哲學上の定論である、例へば金石の性は草木の性に劣るから如何程完全でも生きる力成長する力は有たれぬ、草木の禽獸に於けるも是に同じで草木が決して禽獸の如く感覺し記憶するの力を有つことが出来ぬ、これは甚はだ明らかである、ソコデ有形物が無形物よりも劣るといふも亦明らかである、然

第二 靈魂は如何なるものなりや並に其本原

第二 靈魂は如何なるものなりや並に其本原

らば則ち有形なる脳髓が無形的の智慧と自由なる能力を有つことの出来ないといふも矢張明らかではありませんか、此故に何う考へても人間には有形なる肉體の外別に無形なる靈體があると肯定せねばなりません、吾人之を稱して靈魂と云ふのである、然らば其靈體といふのは、其本原何れにあるが何處より來たものであらうか是亦一つの研究すべき問題である、御存じの通り人間の肉體や靈魂には始めあることは素より疑ひない、始めがあれれば他の物に造られたといふことも矢張疑ひない、然らば誰れに造られたか、其父母であらうか、否々決して父母とは云へぬ、父母は其子の肉體までも造ることは出来ない、何故なれば世間に子の生るゝことを望む親に何しても産れないことが往々ある、又子の少ない様に望むものがあつても却つて澤山産れると云ふこともある、或は男の子を望むで却つて女の子を産む、シテ見ますると子を産むことは親の自由でない、父母の力に及ばぬことである、故に子の靈魂前に申す如く非常に勝れたる智慧自由の力を具へたる靈魂を造るは父母の力に及ばぬことだと云ふことは明らかではありませんか。

尤も子の肉體は親の分身といふても曰はれる、然れども靈魂は無形なる躰である、故に親の靈魂の分れとは云へぬ、何故なれば分れると云ふことは有形物に云ふべくして無形物に云ふことの出来ないことだからである、然らば何れより來りしか即ち天地萬物をお創造なされた絶對なる造物主から出るに相違ない、即ち造物主は人間が生るる毎に一つの靈魂をお造りなされ之を肉體に合せて一つの人間とするのであります、此外に靈魂の有る所以の理を曉る道はムリませぬ、之を以て見ますると吾儕の具へ居る靈魂の本原は無量無邊なる造物主であつて人間は如何程貴いものであるか分りませぬ。

第三 靈魂は滅すべきものなりや

人間には肉體の外別に靈魂を具へ居ること及び其如何なるものなるかと云ふこと並びに其何れより來りしかと云ふことまで申上りましたから、是より死後靈魂は何うなるかと云ふことに就て申し上りましたやうが、前に擧げ置きました靈魂に就いての第三の誤謬

靈魂はあれども死ぬるときには消える」と云ふ説に就いて先づ一言辯じなければなりません。凡そ事を論じますには先づ證據を擧げると云ふは論理の規則でふります。是は小供までも知て居る視易さことであるから野蠻人が話するときでも必ず此規則に依つて證據を擧げる。例へば後に雨が降るだらうと云ふには何故なれば曇つて来たからとか或は急に蒸熱くなつたからとかいふ證據を擧げます。コンナことまでも證據を擧げれば人が承知しないものを、死して靈魂が消えると云ふ様な肝要な問題を論ずるには猶更確かな證據がなければ決して首肯することは出来ない筈である。然るに私は靈魂が消えるといふ無宗教論者の著した書籍を大抵開べましたけれども、此故に消へると云ふ證據を一つも擧げるでなく唯漫然ソウダと斷言致します。其論ずる處は如何に長いとしても如何に非を飾りましても之を裸体にして旨意のある所を探究ば、要するに唯ソウダと云ふの外何んでも無のです。實に驚くべきことではありませんか、ソウして彼の無宗教者は若しも其論に反對するならば如何にも大學者を氣取て立腹し、靈魂が

消えないといふやうな説は十九世紀の學問に合はぬ陳腐説でいろはのいの字も讀ぬお婆さんの信仰することなどなぞ、叫んで威張てをります。然しながら吾儕人間には真理を曉るの智慧がふります。如何程いばつても如何程非を飾りて甘く論じましても真理に合ふ證據がなければ決して首肯することは出来ない。唯智慧の不足な人の想像と見るの外はふりませぬ。然らば靈魂の消へないと云ふこと即ち死後不滅にして終りなく生きて居るといふには何んな證據があるかと云ふに其は澤山ふります。今之を概括して五つと致し申上ませう。然し之を證據立てる前に豫じめ先づ知り置かねばならぬ論理の規則が一つある。即ち凡そ證據と云ふものは其論ずること或は物と其性質が同じものでなければならぬと云ふことである。例へば禽獸の性を證據として人間性を論ずることは出来ぬ。無形物を論ずるに有形物を證據としてはならぬ。有形は有形を證據とし無形は無形を證據として論じなければならぬ。故に今靈魂の不滅を論ずるにも、死んだ人間の靈魂を擧へてお目に懸けると云ふ様な證據は擧げられない。是は當然のこと。馬鹿々々しいことを云ふ様ですが決してさうでない。世には靈魂は見たことがな

第三 靈魂は滅すべきものなりや

言四

い、消えるか消えぬか分らぬ、死んだ人が端書一枚よこした。驗しは聽かぬ、未來があるかないか分らぬと、斯様は云ふものが澤山あります、私の耳に度々入りました、ソシナことを云ふ珍しい智慧を有つた人は五官で感覺したもの、外は何にも信じますまい、諸君は眞の智慧を具へて居るから靈魂の如き無形物を論ずるには眞理といふ無形なる證據の外ないと云ふ規則を御承知なさるに疑ひありません。

先づ第一は性理上から證據致します。

凡そ世界萬物の中に消滅する、無くなると云ふものは一つもありません、人々の眼になくなる様に視へるのは其實變化と破壊と云ふ現象に外なりません、此事は次ぎに委敷陳へまするが、變化とは集つた原素が一つ一つに分れて再び元の原素に歸ると云ふこと、破壊とは物の形をなす部分が離れ離れになると云ふことである、ソコで靈魂はそんなものかと云ふに無形にして單純のものである、決して物質でない、是は諸君の御存なざる所でムリませう、既に物質でないから原素の集つて出来たものでない、又形がないから部分もない、故に其性質上變化と破壊のないものである、其儘永遠に存

在せねばならぬ、故に靈魂は其性質上不滅のものである、是が靈魂不滅の第一證である。

次ぎは化學上から證據するので、前に陳ると同じでムリするが少しく方面が違ひまするから重複を厭はず申上させう、化學に依て見ますると物は皆無盡性であると云ふ規則は疑ひありません、無盡性とは凡ての物皆盡さる、無くなると云ふことはないものと云ふのである、例へば彼の薪や炭が燃へて仕舞と通常之を無くなつたと申します、けれども化學を以て調べて見ると是は決して無くなつたではなく只形が變つたと云ふことばかりであります、即ち薪や炭は之を分析して見ますると酸素とか水素とか窒素とか炭素とか云ふ原素が化合して出来たものであるから、燃へると云ふ化學的の變化を受けられた爲めに再び元の酸素水素などの原素に復つたものでムリする、決して一厘一毛も此世界からなくなつたものでありません、人間の肉體も矢張同じで分析して見ますると十四種の元素で成りたつたものですから死ねば腐敗と云ふ化學的の變化を受けて元の原素に復り何時までも残つて居るのです、さてソウして見ると茲に論じ

第三 靈魂は滅すべきものなりや

言五

なければならぬことがある、前にも申した通り肉體は有形のもの、靈魂は無形のものであるから肉體は靈魂よりも如何程劣るかも知れぬ、或る學者が云つた通り、世界の中間より貴いものはなく人間の中靈魂より貴いものはありませぬ、人が萬物の長たる所以は靈魂を具へて居るからである、然るに其貴重なる靈魂が消へて無くなり、却て其奴隸なる其器械なる肉體が消滅せしめて何時までも残ると云ふは甚だ不權衡な話してはあるまいか、此故に昔プラトン、シクラテス、アリストット、などの如き哲學者は靈魂の不滅なることを確く信じて疑はなかつたので云ります、是が靈魂不滅の第二證である。

次ぎに道義上の證據を申します、先づ世界萬國を見まするに賢人學者は云ふも更なり如何に無智無學の田夫野人と雖も辨へて居る規則が一つある、即ち善をすれば賞を受け惡をすれば罰を受けねばならぬといふ事で云ります、是は眞理ですから上は天子より下は萬民に至るまで皆信じて疑はない、國に法律を設け裁判所を立てるのは皆之惡事をする罪人を罰する爲である、又諸君が子供をお育てなさるにも矢張此規則に従つ

てなさるで云りませう、之を以つて見れば善は賞すべきもの、惡は罰すべきものと云ふは人々自然に知る規則で誰れにも能く分つて居る道理である、然らば全智に在し人間の中の秘密までも視透し給ふ所の造物主が何うして善人を賞せず惡人を罰せずして捨置きませうかソウ云ふ筈はありません、其だのに今吾儕が此世ばかりを見ますると此分り切つた道理を疑はねばならぬ、神様は此世に於ては善人を賞し惡人を罰することは全くないとは申されませぬ、けれども少しも遺憾なく此規則が行はれて居るとは何うしても云へぬ、例へば顔回と云ふ人は如何、亞聖とも云はるゝはど行ひの善い人であつたけれども孔子が回や展々空しと曰ふたを見れば極く貧乏に暮した、ソウして天死を致しました、盜跖といふものは如何、大盜賊であつたけれども、長壽して幸ひに生涯を送りました、忠臣正成は如何、時運つたなくして空しく淺川に死んだ、不忠もの尊氏は如何、遂々天下を握つて其家まんくと榮えた、斯様な類は世間に度々あることは諸君も御覽なされるところで云りませう、若し此世ばかりを以て考へますると司馬遷と同じく天道は是非乎の疑を發しなければならぬ、けれども善惡賞罰の規

則は偽りてムりませぬ、造物主は全智にして眞理道德の源である、一厘一毛の善悪も必ず是に報ひ給ふ、極く公平な、極く正直な裁判官でムります、故に此世に賞罰がなければ必ず來世になければなりませぬ、さもなければ造物主は無智と云はなければならぬ、之を以て人間が死ましても、其靈魂は滅することなく、生きて居らねばならぬといふ道理ではムらんか、是は甚だ明白の事ですから、無宗教者までも確かに承認して居ることである、佛國に有名なる無宗教者ルーソーといふ學者、民約論といふ社會を亂すほどの過激な論、不道理な説を立てたものでさへも、靈魂の不滅は信じて居りました、其言に曰く靈魂は無形なるが故に性質上不滅でなければならぬ、若し斯の如く死後不滅にして來世あるならば、造物主は眞に義とすることが出来る、若し亦現世斗りにして來世なしといはぶ、造物主は不義としなければならぬ、此故に現世に於て惡人盛んに、善人衰ふるといふを以て、靈魂不滅を證するならば、其他一つの證なきも我は來世を信じて疑はぬ、夫れ現世に於ては萬物悉く秩序を保つ、獨り善惡應報のことのみ不秩序である、されば人間の死は人生の終りにあらずして、却て其不秩序を

萬物と同一の秩序に改むるの道と考へねばならぬ、此語は實に道理ではあるまいか是れ靈魂不滅の第三證である。
 次ぎは一般人間の公認を以て證據するので、先づ諸君御銘々の心情に依て御考へなさい、時としては人間の靈魂は煙の如く消へて仕舞と思ふお方もあるかも知れぬ、けれども昔から今日まで世界中何處の國でも靈魂不滅を信じたかつた國はないといふことは其行爲に顯はれて居ります、日本は勿論支那印度亞非利加に至るまで人間の屍を藪に包んで野山に捨たり海河に流すといふことは決してない、皆な身分相應に丁寧に葬式を致し其墓所を掃除し、石碑を建て花を供たり香を焚たり或は招魂祭とか法事供養の様なことを執り行はぬところはムりませぬ、是は何の爲でありますか、決して生きて居る人の爲でなく死人の爲にするに相違ない、若しも人間が全く滅するものと思ふなればこんな面倒なることをするに及ばぬ、狗や猫の死んだやうに構はないで置く筈である、然るに斯様に大切にするといふものは、人が死んでも後に何か残るものがあること知て居るからである、其残るものが即ち靈魂である、尙分り易い例を申せば人間と

第三 霊魂は滅すべしものなりや
 百十
 云ふものは妙なもので、生きて居る間に親子、兄弟、夫婦はを親しいものはないが、死後は何か心中に懼れの念が起りまして、假令其程に親しいものでも死人の部屋に一人で通夜をすることは、何となく嫌だといふは人情である、然るに生きて居る時には人が怖ぢ恐れる猛獸獅虎の様なものでも、其死骸を見て恐れるものは一人もない、却て飛だ金儲が出来ると喜ぶでムリませう、是果して何の爲であるかといふに、言はず語らずとも其心中に自づと人間の靈魂は、死後何れにか残つて居るといふことを知て居るのでムリませう、サラスの如く何れの國、何れの人でも、其行爲を以て見ますれば、靈魂の不滅を承知して居る、就中日本などに於ては朝夕佛壇の先祖代々の位牌に食物を供へるまでに信仰して居ります、さうして是は人性の自然より出ること、諸君銘々の心に問は、お分りでムリませう、されば人間の靈魂の死後煙りの如く消へるなどいふものは、口と行ひとが表裏で所謂己れを欺く人と申さんければならぬ、故に私はいふ人性に従へば人間は誰れでも靈魂の不滅を信じて居るのでしやうと、凡そ人性一般の認めたる判断は眞理たること疑ひなしと、曰ふた通ふ誠に眞理でムリませう、是が靈魂不滅の第四段である。

次ぎは人間の願望といふことを以て證據するのである、さて人間一般が幸を願ひ快樂を望むといふは必ずなくて叶はぬ人情でムリませう、若し此人情がなければ人間は此世に生れた甲斐がムラぬ、さうして其願望を遂げるのが眞正の幸福と眞正の樂みで人性最終の目的とは即ち是だ、其幸福快樂の願望に又二つあります、一つは靈魂の幸福快樂を望み、一つは肉體の幸福快樂を望むのでムリませう、此等二つの願望は人間に生れ着いて居りますから世界中の人々皆残らず死際までも願ひ望むで片時も忘るゝ暇がない、なれども現世に於ては一つも充分に其願望を遂げ果したものは開闢以來一人もない金儲に就て彼の商人を御覽なさい、如何程利を得ても是で充分とは決して思はぬ千圓を儲れば萬圓を儲たいと望むではありませんか壽命に就ては如何人生七十は古來稀なりといふ、其稀なる年になりますれば八十歳まで生きたいと望む、是が人情だ老人が若し死んでも惜しくないといふは虚言である、不老不死は人間に免れぬといふことを知つて居るから止むを得ず断念するのでムリませう、然らば學問は如何學者が其學ん

だところ研究したところを以て足れりとは決してしない、學べば學ぶほど研究すれば研究するほど愈々益々進みたくなつて際限がない、然らば功名は如何所謂不世出の英雄アレキサンドル、ナポレオン、豊臣秀吉を御覽なさい、西は歐羅巴諸國は勿論東は印度まで征服致しても未だ以て其欲望を満たすに足らずして嗚呼世界は斯程まで狭きかと慨いたではありませぬか、又た身はコルスの一小島から出て佛蘭西全國の皇帝となり歐洲大陸を眼下に睥睨するはどに至りましても未だ彼に満足に興へることは出来なく終にセントヘレナに流竄の不運に一生を終へたのは矢張其欲望限りなきの結果である、又始めは松下嘉平次の下僕となつて草履を取つた其手に日本全國の政權を握り位は人臣の極、關白にまで昇りましても未だ一飽さ足らなくて朝鮮を攻め大明までも屬國と仕やうと致し中途にして死しました、之を以て見ますると彼等をして假し世界中を其手に入れるも決して満足しませぬ、シテ見れば到底現世には満足は得られない満足を得なければ心に快よくないから幸福でもなく快樂でもない、故に現世には眞正の幸福快樂はムりませぬ、諸君がたも各自御自分の心を省みたならば、人間は皆斯様なもので餓へた人が食物を望む如く、渴いたものが水を求むることく、幸福快樂を望むで居ると云ふことがお分りでムりませう、さうして亦死ぬまで望むで居て終に其望みを遂げる時はないといふこともお分りでありませう、此に於て吾儕に分りましたことが二つある、即ち人間と云ふものは眞正の幸福快樂を得るまでは何處までも是を望むで止まないといふ性質だといふこと、現世に於ても其望みを遂げて眞正の幸福快樂は得られないものだといふことである、ところで斯様な性質を人間に興へられたお方は何方ですか、申すまでもない造物主である、造物主が一方には限りなき願望を其性に賦へて置きながら、一方に於ては現世で此願望を満足せないやうになさるといふは自家撞着の仕打で、人間を欺くに同じではあるまいか、然れども前に論じたるごとく造物主は全善に在して、微少も不義不徳は出来ませぬ、毛程も詐り給ふことはない、故に人間は造物主より稟けたる性質に従つて、必ず其願望を達して、眞正の幸福快樂を得る時節がなければなりません、即ち現世に得られないから來世でなければならぬといふは明かではあるまいか、又彼の禽獸を御覽なさい彼等にも矢張り人間の如く相

應の望みはあります、但し彼等の望みは感覺的の望みにして肉體だけの幸ひ樂みを望むに過ぎませぬ、故に人間の願望とは雲泥の差別があります、なれども彼等は其望みを現世に於て充分遂げ盡さ幸ひ樂みを得つゝあります、例へば猫、狗、馬などの家畜は腹一ぱい飼食を興へればそれで満足致して居ります、之を以て見ると禽獸は現世に於て真正の幸ひ樂みを得ることが度々ある、然るに人間は之に反して肉體だけの幸福快樂すらも満足するほど得られない、況んや靈魂の幸福快樂に於ては猶更尠られませぬ、シテ見ると自己の望みを遂げない真正の幸福快樂を得られないものは、世界萬物中只人間斗りごある、之を以て人間が若し現世の外に此願望を達して真正の幸福快樂を得ることが出来ないものならば、萬物の長といふても此點に就ては、禽獸に劣ること萬々と申さなければならぬ、斯様な不道理な規則を以て此世界を支配なさるものなれば神とはいはれませぬ、けれども毎々いふごとく造物主は全智全善なる御者にして正義公道を以て宇宙を主宰する眞の神さまですから、人間の肉體が死にましても其靈魂は天賦の性に從つて、眞正の幸福快樂を得んが爲めに、決して滅する筈がムりませぬ

是が靈魂不滅の第五證である。

第四 靈魂は生れ代るものなるや

前に擧げました靈魂に就て第四の誤謬輪回説を論ずる順序になりましたから是より一言辯じませう、先づ佛教にいふ輪回托生即ち生れ代りといふ説の起りには色々説がムりまして何れが眞なるか分りませぬが、一説にはギリシヤのピタゴラに始まり印度に入りて釋迦の輪回托生の説と成つたと云ひ、又一説には釋迦がバラマ教から採つた説だとも云ひまするが起りは何れに致しまして、鬼に角釋迦の云ふ所に從ひますれば其生れ代る所が六つあります、一に餓鬼、二に畜生、三に地獄、四に修羅、五に人間六に天上と云ひまして是を六道と云ふソコで人間が現世で善をすれば來世には天上界に生れる、惡をするものは來世に畜生道とか餓鬼道とかソレソレ惡業の種類に依て生れ代る道が違ふ、ソウして何時までもぐるぐる六道を回るものであると云ふ説で之を輪回托生と申すのであります、斯やうな説は哲學から見ましても論理から云ひましても

全く道徳に背くもので、コンナ事を云ふものは物の存在性質及び徳、働きなどが少しも分らないからである片を萬物は皆其性質が違ひ其者の形、徳、力、働きなどは其性質に相適つて具つて居る是れ種類がある所以である、ミウして此性質と云ふものは決して變化することはない、只物に依つて破壊することがあるけれども甲の性質が乙の性質に變ずることは決してないと云ふは疑ひなき學問上の定論であります、例へば幾何學に於て四角を變じて圓とすること、圓を變じて三角とすることはいふことは決して出来ぬ、圓でも四角でも皆新に造らなければなりませぬ、又如何なる金石學でも鐵を變じて銀とすることは出来ぬ、又化學に於て酸素を變じて水素とすることは出来ぬ、何でも皆な其通ふ草木が變じて禽獸となり禽獸が變じて人間に化し人間が變じて神に化するなど云ふことは決してありませぬ、故に若しも生れ代るといふことが真ならば靈魂が滅すると同じことです、何せなれば靈魂が禽獸に生れ代るならば既に靈魂の性質を全く失つて新たに靈魂の性質を受けなければならぬからである。

又た釋迦のいふ如く善人は果して天上界に生れ、惡人が畜生道へ落ちて禽獸に生れる

ならば世には善人が少くして惡人が多しから人間の數は漸々減じなければならぬと云ふ道理ではあるまいか、然るに人間の數は昔と今とは大層な違ひである、日本國の神代といふ頃、支那の三皇五帝の代時と今を比ぶれば其殖へたことは非常なものでありませう、日本支那斗りでない世界各國皆其通りである、西洋では年々統計表と云ふ人口を調べものを作りまして人口の殖えること年々何の位だといふことが分る近頃日本にも統計學者が出来まして統計表と云ふものを作るから諸君も御覽で年々何人殖へるか御存じだらうとは思ひまするか或學者の調べを茲に申上ませう、西曆千七百二十年即ち日本の享保六年の頃には日本の人口凡そ二千六百萬であつた、其後一千八百八十年即ち明治十三年には三千六百萬となつた、又一千八百八十五年即ち明治十八年には三千八百萬、一千八百九十四年即ち明治二十七年には四千二百萬であります、ソツすると明治十三年から二十七年まで僅か十四年間に殖へました人口は六百萬である、是れを一ケ年に平均すれば凡そ四十三萬であります、斯様に殖へてまゐりまする之に依て見ると輪回説に云ふごとく善人が天王界に生れ惡人が禽獸に生ると云ふは

妄説である、何故なれば悪人が此世界には多いから人類は最早絶へて禽獸のみの世界となるべき筈であるが、實際には前の統計表にある如く人口は漸々殖えたではありませんか。

サテ斯の如く殖へる所の人間は何れより來るものであらうかと云ふに、其肉體は之を父母より受けるが其靈魂は確かに造物主の御作にして人間が生るゝ毎に一つの靈魂を與へ給ふので靈魂と肉體と相合したものが即ち一つの人間である、斯様に人間と云ふものは其靈魂を天より稟すれば其肉體は父母より受けたものですから肉體は靈魂の容器で丁度彼の金庫へ金銀を入れた様なものです、諸君は金庫を大切に思ひなされるか其中の金銀を大切に思ひなされるかは申すまでもないことである、然らば其大切なる靈魂が終りなく活きると云ふことを知るは必要なことではあるまいか、人間の靈魂は死後何れへ行くべきやといふことは後に委しく論じませうが凡そ世界萬物は其元に復ると云ふは理學の規則である、故に人間の肉體は父母より受けても元土より成立て居りますから土に復り、靈魂は天より稟けたものだから死後天に復らなければならぬ、然

るに此の貴き靈魂が死後禽獸に生れ代るなど云ふは人間を輕蔑し無上至尊の神様を濫す説である、又人間と云ふものは他の世界萬物と違ふて智慧と自由權を具へたる最も優れ最も貴きものである、有名なる哲學者ドメストールが嘗て佛蘭西と伊太利の界にある歐羅巴第一の高山アルプを見て、汝は如何程我より高きや、吾は如何程汝より小なるや、其數知るべからず、然れども汝は已れの如何に吾より高きかを知るの智なく、却て吾は如何に汝より小なりと雖も其小なるを知るの智あり、此故に吾は汝より如何に優れ如何に貴きや是又其量知るべからざるなり、と云はれました、實に其通り人間は貴いものですから天主教に於ては有形なる萬物は人間の爲に造られ又無形なる靈魂を具へたる人間は造物主の爲に造られたるものである、即ち人間は造物主を知り之を尊び拜み又其聖慮に従ひ其命令を守る爲に造られたものであると教へます、諸君は佛教の輪回説の如く人間を卑しむ輕んずる説と、天主教の説く處を比べて見て如何なる御考へをなさりませるか。

第五 靈魂は何れへ行くべきか

靈魂は不滅にして死後終りなく生きて居るものなれども、さりとて又佛説の如く生れ代るものでないこと云ふことも明かである、然らば靈魂は死後何れに行くものでありませうかと云ふに、是れに就て吾儕天主教信徒は教義上の證據に依て堅く信仰致しするが、諸君のやうな天主教を信仰せぬお方の爲には是れは信じがたいで有りませうから矢張前に論じたる如く學理的・道理的のみの研究を以て何れに行くかを論じなければならぬ、因て先づ禽獸の生命から論じて人間の靈魂に説及ぼしませう、蓋し疎より精に立入るものは推理の通則であるからである、借て禽獸が死するときには其支體より生命が脱去つてしまふ故忽ち分解して各々其原素に復ると云ふ事は靈魂不滅の論に於ても既に論じた所でありますが、觀察の點が少し異なります故尙茲に一言致しませう、彼の禽獸の支體と申すものは分析して見れば他の物體と毫も變り有りませぬ故今迄其支體の分子を総合して居つた生命と云ふ方が一たび脱去るや否や直に分解して

酸素の部分は酸素、炭素の部分は炭素と云ふ様に各々其原素に復るか左ならずは又別に化合致して他の新たなる物體を組織するに至るものである、物體と云ふものは如何に無盡性を有つて居ると申しましても別に高尚な目的を有つて居ると云ふ事ではない、禽獸と云ふものも生命がある間は無論物體よりは上流に位するものであるが、其性質の上から考へて見ると死して後には其靈魂が永く生存して居るべき理由のないものである、何となれば彼等の靈魂を有つて居る譯と云ふものは苦痛を避けて日の生命を保つて行く丈のことだからである、彼等は食べたいときには食べ、飲みたいときには飲み休みたいときには休んで、夫れで満足致して居る、而して其の食べる物、飲む物等は皆此世に充分備はつてある故他世に於て目的とする所などは一つも有りませぬ眞だとか善だとか美杯と云ふ事は彼等の爲に餘り高尚過ぎる、餘り優美過ぎる目的である是等の事に就ては思想もなければ志望もない「知らぬ者には何の望もなし」と云ふ言は哲學上の格言である如く、彼等禽獸は眞善美などの無形なる事柄は一向御存知がない故一向願着はしません成程飢ゆると云ふこともあり渴くと云ふこともありますが人間見

靈魂は何れへ行くべきか

た様に高尚な飢渴はないので眞理の飢渴、未來の飢渴杯は藥にしたくもありません。飢渴は地上の草を食み、渴しては清泉の水を飲み、疲れては腕を曲げて臥する、此れが則ち彼等の生涯である。彼等の嗜欲を満すものは皆此世に備はつて居る、故に此世は彼等に充分の満足と與へる、故に又生命が去ると同時に靈魂も消え目的も消え萬事に休するのである。

萬物の靈長たる人間に至つては事大に之と相違ます其靈魂といふものは光り輝やける玉魂で汎而玲瓏たる眞理と云ふ食物を望んで居り事物の道理を知りたいといふことは凡ての人間の渴望する所であるを見れば一目瞭然である、古來の學者が東奔西走して聖賢の門を叩いたと云ふ事は全く此眞理の飢渴に迫つたからの事である、加之ならず人間には又善美と云ふ思想がふります今日の人倫が倫理學だとか審美學だとか云ふ學問を研究し居りますものは畢竟此善と云ひ美と云ふ光り皎々たるものを追求せんが爲である理想を高くすると云ふのは取りも直さず此事で古來善工杯は一生の間此の爲に働きたが、それでも眞理想したる善美を實際に描寫する事が出来ぬを見て獨り我と我

心に悶々して居つたうちに死と云ふ冥土の神が忽然其生命を奪ふに至つた故古への有名なる畫工の物したる繪畫杯を見ると毎度其下に「考案中」と云ふ三字を書いて置きます其譯は自分の理想したる所を實際に描き出すが爲め苦心經營したが善美の理想は愈々考ふれば愈々遠かる様な心地して到底も之を捕捉し事出来なかつたうちに天が其壽命を奪てしまつたからと云ふのである、我々は今日斯如事を考へませんが然し人間と云ふものは實際此の如く高尚なる動物である、尙又私共の最も注意すべき所は人間と云ふものは圓滿幸福即ち此上もなき仕合と云ふものを渴望して居る事である此幸福と云ふものにとりつかないうちは決して満足致しません此事に就きましても靈魂不滅論の條章に委敷申上げましたから今復た茲に蛇足を添ゆるの必要はないが注意すべき點は此幸福の願望と云ふものは凡ての人の有つて居るもので上は金殿玉樓に位せらるゝ一天萬乘の君より下は賤が茅屋に細き烟をあげて居る小民に至るまで皆此幸福の飢渴に迫られて居りますが惜其幸福と云ふものは何處に在るかと申すに此世に於ては中々認められんと云ふ事である、一にも金、二にも金、地獄の制度も金次第、第二

第五 萬事は何れへ行くべきか 百二十四

の萬事叶ひ給ふものは金、何時見ても悪くないものは此金杯と世間の人が云つて居る。金其物に此幸福があるかと云ふに決して其裡にはない商人が百圓儲ければ千圓、千圓儲ければ萬圓と云ふ様に如何程巨萬の財寶を蓄へても満足いたさんのを見れば何よりも明かなる證據である又彼の位と云ふものは世人の最も垂涎する所のもので彼れも位此れも位、賢者も位なければ事を行ふ能はず愚者も位あれば天下を左右す杯と云つて何事も位だと思ふて居る其位が果して幸福の宿所であるかと云ふに是れ又決して然ではない、と云ふ事は今の人々に就ても明かな證據がある、今茲に人ありとする巡査になりたいと志願する其望遂げられたら如何、果してそれで満足するか決して然でない今度は警部にたつたいと望む其望、亦幸に果されたら如何、今度は輿論の代表者たる一國の代議士にでもならなければ明治の盛世に生れた甲斐がないと思ふ代議士の撰に當つたなら如何、今度は議長の席を眺む、議長から公使の位、公使から大臣、大臣ならば成るべく総理大臣の椅子を夢みて居るに相違ない、然し総理大臣の位は果して我心中の幸福の願望を満すかと云ふに決して然りとは云はれない、と云ふ次第は

正徳になつても満足はしないから、凡そ王様の中にも歴山大王の如く富豪なるものはありませぬ自國希臘を服し、進んで小亞細亞を取り、埃及を略し、尙東の方波斯印度までも破竹の勢を以て征服した者であるがそれでも飽きたらすして遂には已む神にして祭れと云ふ命を配下の國民に傳へたと申すことである、去すれば貴き天子たる富四海を保つ身となつても、幸福の飢渴と云ふものは決して癒されません、既に陶朱翁の富も歴山大王程の位も幸福の宿所となる能はずとせば、其他の事は推して知るべきである、彼の肉身の樂、世上の譽杯の事は言ふ迄もなき事である、斯の如く論じ来れば眞理と善美と幸福とに對する人間の願望は永遠満さるゝ期がないと云ふべきだらうか、それ然り、豈をそれ然らんや、若し果して以上の三者に對する人間の願望が永遠満さるゝ期がないならば萬物の靈長と云はるゝ人間の境遇は一番不幸と謂はなければなるまい、禽獸は飢渴を満たす食物、飲物を有つて居るが、人間は之を有たないと云はるゝ、其境遇は禽獸よりも劣等て居ると謂はなければならん、天下豈此の如き理がありませうか、目があれば光がある、耳があれば音がある、希望がある

ならば之を満す目的物がなければならば、禽獸的の飢渴は草菜と河水で之を満たす
 ことが出来る、眞理善美幸福に對する高尚な飢渴は何が何處に之を満たしてくれ
 是れ即ち人間に取つて未來と云ふ眞善美の世界がなければならぬ理由である、然らば
 即ち未來に於て吾人々間の願望飢渴を全く満足せしめて呉れるものは何ですか、即ち
 是れ造物主である、造物主と申せば萬物の大元、眞理の本源、萬善萬美の泉である、
 人間が此に至るとき初めて其飢渴が癒され、其願望が満たされるのである、其の譯は
 人間の二個の偉大なる能力、即ち智識と愛欲と云ふ二つのものが初めて已に適當なる
 目的物を懐く事が出来るからである、其目的物とは無論今申す全能全知全善の造物主
 を云ふのである、人間の智識は造物主を知りよへすれば、最早外に何も知りた
 思はん、森羅萬象の大本を知つたのであるから、又愛欲は造物主を獲みよへすれば外
 に望みたいと云ふ心は起らん、凡ての善美幸福の源を懐に入れたのであるから、
 故に申す、是れが即ち人間の靈魂の歸着すべき故郷、休息すべき樂境であると、人間
 の心中の無限の願望あるのは無理にでも此故郷へ引さつける爲めである、其願望の現

第五 靈魂は何れへ行くべきか

百二十六

世に於て滿されざる所以は、恰度此未來の樂境に於て滿させざるを云ふ活證となるの
 である、是に於て彼の有名なる聖者オグスチンの申された「吾人々間の心は造物主に
 到達せざる間は悶々して休するを知らず」と云ふ萬古不磨の格言は明かに味はられる
 のである。

是故に人間の靈魂は何れへ行くかと云ふ問に答へるのは誠に易しふります、造物主
 の所へ行くと云ふ丈である、何に引かれて其處に行くかと云へば、愛欲と云ふ引力、
 願望と云ふ重みに引かされて行くのである、「我愛は我重み」と云ふ格言の通り、人間の
 性質の傾く處是非造物主と云ふ中心に引かるるのである、物體が地中の重力に引かる
 如く、人心は愛欲と云ふ引力に引かれて上天に取擧げられます、然らば即ち一切人
 間は皆な悉く此愛欲の傾向に依つて造物主と云ふ大元に復るべき者なるやと云ふに
 決してさうは云はれません、其大元に復ることの出来ないものがあると云ふことは猶彼
 の萬物が或障碍の爲めに其元に復らないものがあるが如きである、例へば禽獸が死ねば
 程なく腐敗して瓦斯や土と成つて其元の原素に復ると云ふは一般の規則である、けれ

第五 靈魂は何れへ行くべきか

百二十七

とも或る障礙の爲めに腐敗せず何時までも其儘で居ることが度々あります、今より見
 そ百何年前シベリア國の氷海の邊りに往古に生きて居つた象に似て其よりも餘程大い
 い獸を氷の中から掘出しまして之をマンラと名づけた、其死骸は氷漬となつて居り
 ましたから何千年以上久しい年所を経ましたけれども少しも腐敗せずして其肉を以て
 犬を養ふたと申す、是れ寒さと云ふ障礙の爲に禽獸の死骸が其元なる原素に復ること
 云ふ規則に外れたと云ふ一つの例である、又彼の草木も其通り枯れますると次第に腐
 敗して土に復ると云ふは通常である、なれども洪水などの爲流れて土中に埋まり空
 気に觸れなかつたならば永く腐敗することなく埋木となり或は石に化し或は石炭と成り
 ます、今蒸氣車、蒸氣船などで焚く石炭は皆往古の草木が地震洪水の爲め深く土中
 に埋まつたのである、人の肉體も矢張り同じことで近年北亞米利加合衆國に於て石に
 化した昔しの人間の屍を掘り出しましたが其身の丈は七尺餘りもあつたと云ふ、又た
 日本などには時々木乃伊と云ふものを發見することがあります、此等の例を以て見ま
 すると、物皆其元に復るべしといふ規則だけれども或障礙の爲めに元に復らぬことが

往々あると云ふは明かである、靈魂も矢張り同じことで或る障礙の爲に其元に復ること
 の出来ないものが澤山あります、其障礙とは何であるかといふに即ち惡しき業である
 何故なれば造物主は既に論じたる如く絶對無邊の御者ですから全能全智全善である、
 全善なるが故に其善徳は完全に在して微少の惡も出来ませぬ故に善を好み惡を嫌ひ給
 ふは造物主の性質である然らば現世に於て善を嫌つて惡を好む様な造物主の性質に反
 對する人の靈魂が何うして死後全善なる造物主の下に復ることが出来ませうか此故に
 靈魂が其元に復ると云ふことの爲めには是非とも善業をなさねばならぬ、惡業は大なる
 障礙で与ります、人の現世に於て善を行ふは身を修める爲斗りではなく死後靈魂の歸
 着即ち全善なる元に復ると云ふことの爲めに最も必要である、されば現世に於て眞
 の道即ち人間の靈魂の元なる造物主に往く道をお知りなすつて之を守り善を行ふと云
 ふは人間の上に一番肝要ではありませぬか。

第六 死後の罰

人間と曰ふものは兎角自分の氣に合ふ説は信じ易く、自分の氣に合はぬ説は信じ難いもので是は世界各国何處でも同じ人情である、今茲にお話しする死後の罰と云ふことなども多くは氣に合ぬ説だから信じ難いで語りませう、殊には死後の罰と云へばア、阿爺さん阿婆さんの信仰する地獄の話かと直にお笑ひになりませう、成程佛敎で云ふ虚言を吐て地獄に墮ちて赤鬼に舌を抜かれるとか殺生するものは蛇に飲まれ虎に喰はれるとかいふ小供瞞しの方便説は小學校の生徒でも信じますまい、今日では地獄極樂の説は世人に輕蔑される時勢様れの愚説はあるまい、なれども私が述べる死後の罰とは所謂閻魔大王が支配なさる地獄のことを今更喋々と繰り返す譯ではくらぬ、眞理に依て考ふれば何うしても死後の罰がなければならぬと云ふことに就て證據を擧げて論ずるので、名前は地獄でも極樂でも何でも構ひませぬ、ソツして此問題は人間一身上に取り社會全体に取りまして其修身道徳に非常な影響を及ぼすことで、是より大切な話はないから能々道理の心眼を以てお考慮を願ひます。

人間の靈魂も世界萬物の規則に従つて其元なる造物主に歸り深く愛されると云ふこと

は既に申上りましたが是は即ち死後の賞である、又惡と云ふ障礙があれば造物主なる元に歸ることが出来ないことと云ふことも申上りました是は造物主に嫌はれたので即ち死後の罰である、サテ此死後の罰と云ふことは何う云ふ道理で、なければならぬかと云ふに靈魂不滅を論ずるときにも述べたる如く現世に於ては罪惡に對する眞正の罰と云ふものはないと云ふは明かである、故に是非とも死後の罰がなければならぬといふのである、何せなれば天地萬物及び人間をお造りなされた無邊なる造物主は毎度云ふ如く正義にして眞理の源である、故に若し死後の罰がないならば造物主の眼からは善も惡も全く同じもので差別がない、其差別を立てるのは人間の夢であるといはなければならぬ、ソツナことが承知されませうか、善惡の差別は何よりも明かで決して人間の想像ではない、善人と惡人とは全く違ふ正直と不正直とは全然反對にして其心は雪と炭である、斯程に違ふ善惡を何うして同じと思はれませうか、況して全能全智全善に在す造物主から見れば猶更云ふ迄もないことである、此故に現世に於て眞の罰がなければ來世に於て適當の罰を受けなければならぬと云ふは明かではあるまいか、さもなければ

第六 死後の罰

ば世界萬物に原因がない即ち造物主はない天道天罰なき云ふは妄説と云はなければならぬ、死後の罰がなければならぬといふ明かな證據が尙一つあります、御存の通り人間と云ふものは肉體と靈魂との二つを具へたものである、ソウして惡事をするものは肉體か靈魂かと云へば肉體でなく、靈魂だと云ふことは無論御存でムリませう、行為は肉體がするけれども之をさせるものは確かに靈魂即ち心である、故に世の人皆不孝もの或は不正直者を指して肉體の悪しきものと云はずして心の曲つたものとか不心得者とかいふ是れ惡事をするは肉體でなく其心即ち靈魂である、肉體は靈魂の從僕だから心が正直なれば従つて肉體も正直に働き心が不正直なれば肉體も共に不正直の働きをするに云ふことを知て居るからでムリませう、然るに世間の事を以て考へて御覽なさい、心を罰するものは一つもない、法律が罪人を罰すると云ふも其實肉體を罰するのみで惡の元なる靈魂を罰することは出來ない、是は法律の方に及ばぬことである、又法律と云ふものは靈魂を罰する力がないから何れぞ之を改良して完全無缺の金科玉條を以て滿たしても全く道理にあふて罪人を罰することは決して出來ませぬ、

例へば茲に甲乙二人の罪人があり甲は一人を殺して乙は十人を殺したりと假に定め法律は之を如何に罰しまするか、一人を殺すも十人を殺すも共に殺人罪を以て論じ死刑に處するの外道はありません、法律でも殺人罪までに至らぬものならば罪の輕重に依て罰にも違ひがある、例へば官物を偷むものは重懲役とかコソコソ竊盜ならば重禁錮とか云ふて其々刑が違ふ、斯の如く一方には罪の輕い重いに依て罪を定めながら前申した殺人罪に至ては一人殺しても十人殺しても同じく死刑では甚だ不都合千萬ではムらんか、然しなから法律といふものは其より外に仕方はないので、シテ見れば死刑に行はれても其罪の償ひの足らぬ十人殺した大罪人は其丈の罪を死後靈魂に受けねばならぬといふは確かなことである。

以上述べたる如く死後の罰は甚だ明かですから世界萬民皆人性に依て之を知て居る、西洋各國の人民を始め亞細亞、亞弗利加の中如何なる邊土の學問もなく智慧もなき蠻民に至る迄之を知らないものはない、殊に又昔しの哲學者文學者ソクラテス、プラト

著しました。且又人間は其生來に従つて惡をなせば曰れの心が已れを咎めて一日一夜も安心が出来ない。諸君御自身は如何でせうか惡事を爲せば心が動き何か恐れ何か案じられ決して平氣で惡事をすることは出来ませぬ。是天の定めたる規則に叛ひき其善なる性に違ふからでムります。聖ポロが人間は變遷ながら其心に天の賦へたる法律があつて之が行ひの善惡を指圖するといふ。曰れた通り若し其指圖に背けば直に恐れ心が生ずる。ソナして人の爲したる惡事の重くなるに従つて恐れも強くなる。之を以て見ると人間は其生來に惡を罰する神様の在ることを知て居るのである。されば死後に罰がないと云ふ人は其生來に背く人でソナして何んの證據もなく道理に合ないことですから罰を嫌ふ人の想像と云ふ外はない。然しながら死後の罰があると云ふことは人情から云へば氣に合はぬ。説だ信仰しがないことである。故に多くは死後を視ないから分らぬといふ。彼までも之を信じない。人々が如何程嫌ふて信じなくても其義は滅ぶることが出来ぬ。人間の信すると信せざるは少しも係りはムらぬ。罪あれば何でも死後罰せられねばなりません。何うか自己の靈魂を大切に思ふお方は造物主

の罰を免れる様に御心配なさい。現在視ることの外何も心に懸けぬ。現世の事斗り心の懸かれる人は造物主の事や靈魂の事や未來の事などは一向に頓着致しませぬ。けれども左様なものは廢人です。廢人は造物主から見れば何も無いに同じである。舊約聖書に左様な廢人は禽獸よりも益なしと書てある。何故なれば犬や馬や牛は飼主を知り飼主に使へるけれども右の如き廢人は其主を知らず其主に事へない故に何の益なきものである。然し私をして正直に曰はしめば恐しき益が一つある。即ち彼等は死後終りなきの罰を受けて造物主の至善なること義の源なること及び其威嚴あることを顯はすと云ふことでもムります。

第七 死後の賞

眞の義を以て考へますれば現世に於て惡事を爲したる人は死後造物主に罰せられると云ふことは明かである。然らば善を行ふた人は死後造物主より賞を受けねばならぬ。云ふことも矢張明かである。即ち善惡ともに其報ひがなければならぬと云ふことは世

人間の事

界各國何れの人も皆自然に知て居る處の議であるから戦争に於て援群の功績があつたものには名譽の勳章を與へます、或は又天災の時に己の生命を抛つて他人を助たとか若しくは國家の爲に財産を傾けて世に益ある事業をしたとか發明をしたとか云ふものは皆其を恩賞を與へるといふ規則がある、是は素より當然で道理に適ふたことである斯の如く人間のなすことでもさへも善業に報ふる義がある、然らば義の源なる造物主に如何でか此義に違ふの所爲がありませうか決して無い筈である、然るに現世の有様のみを以て考へたならば惡に其報ひが無い如く善にも矢張誠の報ひはない、吾儕が努めて惡を防ぎ善を行ひますれば其必は如何にも安全安樂にして甚だ快い之は神様より受る有難い恩賞でふります、なれども是は消極的の恩賞であつて決して行ふた善に適當なるものでない、且又段々一生涯已に克つて善業を爲す人でも身には不幸を受け難義するものも澤山ある、是等の人は心が安全だと云ふても決して其善の報ひを得なとは云へぬ、君子は道を楽しむとか清貧に甘んずるとか云ふことは人間自身から云へば誠に結構なことである、さう云ふ心掛でなければならぬ、然しながら他方から是を論

人間の事

すれば斯の如き人は決して現世に於て善の報ひがあつたとは云へぬ、就中善を行ふが爲めに或は造物主の道を守るが爲に故意に其生命を捨たものは如何であらう、道の爲め善を行ふ爲に其生命を捨ると云ふことは最も爲し難ひ行ひ難ひ善行ではありませつか斯の如きものは最も勝れた恩賞を受けねばならぬ筈だけれども既に其身は死して現世のものでないから迎も現世で其賞を受けることは出来ない、故に是非とも死後に其報ひがなければならぬ左もなければ造物主は義も無く情も無きものである、然れども造物主は限りなき情のある御者であるから現世に賞がなければ來世にあること疑ひない故に若し死後の賞を疑ふならば其人は造物主の貴き所、其徳の優れたることを知らない人である。

次に又た人間は満足を望むの性質だといふことを前に申上しましたが死後の賞が無いものなれば造物主が人間に限りなく望むと云ふ心を御賦へなされた所以が分らない何故なれば來世に満足することが出来なければ造物主は人間を欺き只難義をさせて愚弄するものと云はなければならぬからである、ソナ思ふ考へは迎も起せぬ故に造物主

の性質を幾分にも曉ることの出来たならば何うでも吾儕は満足な幸を望む性質を棄けたから其性質に従つて必ず満足を得る幸を與へられると云ふことを信じねばならぬ。然れども今世に於ては如何なる人も満足する程の幸を決して得られぬ、何故得られぬか現世は人間の本宅でない人生の終りまで居る所でない、故に人が現世に生活するを渡世とか世渡りとか申す、吾儕人間は何時か目的の彼岸に到達もので五十年か八十年の間は假宅である、即ち現世は未來の試験場たるに過ぎませぬ、之を以て造物主の聖慮に遵つて善を行ふた人は死後必ず満足なる眞正の快樂を受けます、此眞正の快樂は決して現世の快樂の如き淺薄なものではないものではありませぬ、人間の性質に全く適ふ處の快樂であります、即ち人間と云ふものは肉體と靈魂とを具へて居り其中にも貴い靈魂には智慧と情とを具へて居る、故に眞正の快樂とするには肉體はかりの快樂は大なる缺點である、智慧と情を満足させる快樂でなければならぬ、智慧を眞正に満足させることは造物主の眞善美を見ること、情を眞正に満足させることは造物主を見て之を愛するといふことである、現世に於て美しきものを見ること或は諸多の學問を

研究して萬物の理を曉るといふことは最も高尚なる智慧の快樂である、然れども造物主は凡ての學問の原凡ての美の原だに依て其本原なる造物主の無限の眞善美を親しく明らかに視ると云ふは、靴を隔て、痒を搔く如き思ひある學問の研究に比べて如何斗り人の智慧を満足させることでありませうか又現世に於て最も大なる快樂は情の快樂で即ち愛である、吾儕が父母親類朋友など相互に愛すると云ふことが一番の快樂である、故に若し其相愛すべき父母もなく親類もなく朋友もなき孤獨なる人間は如何にも憐れなものではありませぬか、斯の如く同類なる人間共に卑く弱い人間が相互に愛することさへも斯様に快樂深きものならば至善至美の徳と具へ給ふ造物主と相愛すると云ふことは其快樂如何斗り人の情を満足させることでありませうか、之を以て見ると現世に於て善を行ふた人は死後如何なる賞を受けて満足することが出来るかと云ふは明かである、ソウして其満足なる賞を得るは人間の自由である、銘々の心配に依て得らるゝ幸である、故に人間の手許にあると云ふのである、人間と云ふものは其幸を受ける爲めに造られたる者はが人生終極の目的で与ります、故に吾儕は新約聖書に人

ば凡ての世界の財寶を悉く得るも若し死後の幸を得ずんば何の益なしと、記されたる通り心掛ねばなりませぬ。

サテ右お聴きの如く死後の賞は造物主の美善美德を見て感ずる智慧の快樂又造物主と親子の如く相互に深く愛すると云ふ情の快樂であります、之がお分りになつたら死後の罰と云ふも如何なるものなるかを自然お分りでムリませう、何となれば罰は賞の反對にして造物主の美德を見られないから人の智慧に如何斗りの苦痛でありますか殆んど暗黒裡に始終居るが如きでムリませう、又た造物主に勘當されて許される時なく何時までも嫌はるゝと云ふことは人の情に如何斗りツラキことでもムリませうか、人が親に勘當され或は生君の勸業を受けるは現世に於ては此上なき情ない事に思ひませう況して全能なる造物主の謀反人となつて限りなく嫌はるゝと云ふは其苦み如何斗りなるか新約聖書に罪人が活ける造物主の手に落ちることは如何に恐しく如何に不幸なるかなど記されたる如くで測り知ることとは出来ませぬ。

然るに世には死後の罰を承知しても其罰に終りないといふは餘りに過酷である何百年

經ても赦すことも憐むこともなく何時も罰の始めだと云ふことは執拗にも程があると云はねばならぬ、是は限りなき憐みのある造物主の仕打とは思はれぬ造物主の性質に合はぬことだから信じられぬと云ふものもムリませう、成程一寸考へれば如何にもソウだと思はれます、けれども是は一を知て二を知らぬと云ふものです、眞の義を以つて考へれば現世は假りの世で旅人の泊まる宿の如きものである、人間の壽命は之を平均すれば三十八九年である三十八九年位は終りなき來世に比ぶれば瞬く間よりも僅かなものであります人間の此暫時の間世界に世渡りするは造物主の命に違ふて善を行ふか或は命に背いて惡を爲すかを試みる爲めである、其證據は造物主は吾儕人間に善惡を撰びの自由を與へ又善なる性を與へ其良心に依て惡を爲す毎に心が動き懼れるやうなし給ふた西洋諸國で是を造物主の聲と云ふ、又人間は其生來に従つて神があり來世があり來世に賞罰があること云ふことまで萬民共に知る様になされた、之を見て甚だ明か

でムリませう、故に現世は春の季候に譬へ來世は秋の時節に譬へられます、即ち現世に於て播た種が來世に於て實を結ぶ現世で惡に傾けば來世も惡に固まる善ならば善に固

人間の事

まる、決して現世に再び生れ来て前世の過ちを改むることは出来ない死した人の靈魂は生きて居る時の如く最早善惡を撰むの能力が無い善若しくは惡に固定して動きませぬ、舊約聖書に山にある樹は枯れ落ちたるまゝに残る、と記されたるが如く善に墮れば善に残り惡に墮れば惡に残る、是は眞理にして疑ひない且又罪を宥されると云ふことには過ちを悔む改むると云ふことが是非とも必要の條件である、然るに死んだ人間は惡に固まつて善惡を撰むの能力即ち自由を失ふたものである、ソコで過ちを改むると云ふは善に遷るといふことである、既に自由なきものが如何でか善に遷ることが出来せうか、之れ死後の罰に終りなき所以でムリとする、サテ斯の如く終りなき罰と云ふは眞に恐ろしいけれども然然だとは云へぬ、是等は皆な自ら招くの罰である故意と罰を求めたのである、造物主の酷い所置とは云へぬ、造物主は限りなき憐みもあるが限りなき義もある、聖書に現世は憐みの時なり來世は義の時なり、とある如く死後終りなく罰さるゝは義の爲である、然しながら聖書に又造物主は未だ燃へざる燈心を消さずとあるが如く未だ幾分でも助かりさうな人善を行ひさうなものをば決して死

人間の事

ぬる様にお命じなさいませぬ、即ち終りなき罰を受ける人は何うしても悔ひ改めの出来ない到底駄目だと云ふもの斗りで詮方なく罰するのである、尙又深く考ふれば死後の罰に終りがあるならば造物主は却て人間に辱しめられるといふ結果が生じます、何故なれば若し死後の罰に終りがあるとすれば造物主に背き造物主を輕蔑し造物主を辱しめるの大惡無道のものだと云ふても何うしても後には赦さねばならぬ幸を與へねばならぬと知つて故意と惡を爲す、是れ無上至尊なる造物主が卑しき殊に惡人に負けることと同じである、ソコナ不道理なることが出来る筈がない、以上説く所に依て死後の罰に終りないと云ふは疑ひない道理である、罰に終りなければ賞に終りがないと云ふも明かな道理である、故に惡人の爲めに死は甚だ恐ろしき程善人の爲めに死は甚だ喜びである、耶蘇基督が御弟子に宣はく汝曹善を行ふ爲め造物主に事へる爲め誘られ悔られ苦しみあるときは大いに喜ぶべしソハ來世に於て汝曹の得る所大いになればなり、と嗚呼死に及んで、大いなる慰さめと望みとを持つものは天主公教信者でござりまする。

第八 聖書は天啓の書なること

是迄論じました處は、凡て信仰に關係する證據を省き去して、唯道理と學問のみを以て證明しました、格別哲學士から論じました、如何となれば哲學は眞理の學問であるからである、故に一言以て之を蔽へば、人智のみに依て研究したので云ります、斯の如く哲學、天文、理化學等を以て論じたといふても、其明かに曉つた所は甚だ僅少なことである、即ち第一、萬物を創造また之を主宰する造物主あること、第二、造物主は無形にして絶對、即ち無限物故に全智全能全善なりと云ふこと、第三、人間は無形なる靈魂を具ふること、第四、靈魂は不滅にして死後賞罰あること、第五、人間は全善なる造物主に造られたるもの故善を行ふため、即ち造物主の聖慮に遵ふ爲めに現世に置かれたるものなること、以上五つの問題だけである、三千年の昔より今十九世紀の終りに至るまでの高名なる哲學者、天文、理化學者の著したる多數の書に、眼を晒して漸やくに曉つた所は右丈けである、其他未だ人間自身に直接の關係あることで分ら

ぬことが澤山あります、例へば何故に現世に於ては人間は病難苦死あるかと云ふこと、何故人世の心は生れながら惡に傾向たるかと云ふこと、人間は如何様にして其犯したる罪の赦しを造物主より受け得るかと云ふこと、人間が現世に於ては如何なる務を以て造物主の聖慮に遵ふべきかと云ふこと、及び世界開闢のこと人間の初のこと等は、少しも分らぬ、是等のことを知るは人間に必要なこと最も大切な問題である、吾儕は是等のことを明かに曉らぬ間は決して安心を得られない、斯く肝要なるにも係らず是は學問の研究に及ばぬこと、之は人智の力に及ばぬことである、然らば結極人間に分らないことであるか、或は他に之を知り得る道あるや決して無いと云ふ筈はない、造物主は人智の淺いことは能く御存じですから、其憐みを以て親ら人間に教示なされた是に依て始めて人間は右の諸問題を明めることが出來眞の安心が得られる、安心立命の道即ち宗教と云ふは是で云ります、故に眞の宗教は造物主の道にして天啓でなければならぬ、凡て人間の立てた道は人間の想像に基くものですから偽りの道即ち偽教である、然らば其天啓なる教は何であるかと云ふに、是は只歴史を以て研究すれば

第八 聖書は天啓の書なること
百四十六

直に分ります、即ち世界萬國古今の歴史に依て現今世界中に行はるゝ、數多の宗教の起原を調べますれば、其内一つを除くの外悉く人間の立てたものであるといふは明かである、然らば造物主のお啓示なされた道は何んであるか、何んな證據があつてソウ云ふか、其道は聖書と云ふ書にして又其書に記されたことは、悉く造物主の道で有と云ふ證據が有ます、此聖書は三十八人の聖人の手にて今を去る三千三百八十八年前より一千七百九十七年前まで正に一千五百九十一年の長年月を以て記されたる世に珍しき書である、ソウして此珍しき聖書が我信する天主公教の基礎にして、此宗教に入るの徒は、皆此書を造物主の道と信するのであります、此聖書を二つに分けて吾儕の教主なる耶穌基督降生以前に記されたものを舊約全書と云ひ、又降生後記されたものを新約全書と云ひます、此舊新兩約全書を合せて天主公教の聖書と申します、此書は一面からいへば天主公教の歴史である、故に其中に記された事實を見れば、世界開闢のことより天主公教の成就する時に至るまでのことが委しく分る、ソウして宗教の歴史と云ふものは國々の歴史よりも餘程大切なるものである、如何となれば國々

の歴史には誤り偽りがありましても其が爲に直接の害を蒙るものは決してない、其が爲めに社會の重大の影響を及ぼすと云ふほどのこともない、只學問上惜むべきことだといふだけのことである、然るに宗教の歴史にして若し誤り偽りがあつたならば、其記したる處は歴代の帝王、人物、事蹟、風俗、習慣などのみならず、造物主の人間成立のこと、及び行末のこと等人間の守るべき道一切でムりますから、古來之を信したるものは勿論、現に今日有する處の三億萬の信徒が直接に蒙る害は如何程なるやも知れぬ、引いては社會全般に及ぼす影響は非常なものでムりませう、斯の如く大切なるものですから、今日まで最も議論ある書、最も嚴重に調べられた書は、天主公教の聖書に若くものはありませぬ、即ち聖書は天啓の書なる故、成るべく誤りなき様にとて先づ章の上に節を分け、之に一々番號を附け且又其語數までも計算し同じ語が幾度記してある何章何節にあると云ふことまで極めて詳細に吟味しました、又此書は天主公教の基礎ですから之を翻譯して出版することは人々の勝手には出来な

い、先づ其草稿を天主公教の頭領に出す、頭領は聖書學者を以て組織したる會を以て

之を精査させ、誤謬がなければ乃ち出版を準許す、斯の如く鄭重なる手續を経て出版した處の聖書は信徒が讀むことが出來ます、さもなければ禁する、是信徒の靈魂を保護する爲にするのである、日本に於て新教と名づくるプロテスタント教は之に反して自由の道ですから聖書の翻譯も人々の勝手である、故にプロテスタント教徒は聖書が大層貴ぶ風ですが、其實眞の聖書を持ちませぬ、偽りの聖書、自由嗅い心を以て翻譯した想像の聖書斗りである、サテ聖書は右云ふごとく天主教の基礎ですから、昔より之を信仰せざるものは、何うかして是が誤謬を捜し出し、聖書の天啓の書でないこと云ふことを證據したいと苦心致しました、故に聖書の如く詳細な所までも研究され吟味された書は他に決してない、然るにも係らず昔より未だ一句の謬妄虚偽をも見出すことが出來なく、却て昔に虚偽謬妄と認められたることも、後世學問の進歩に連れて、却て其正確眞實なることを知り、益々天啓の書たること、人智の腐淺なることを證據すると云ふやうなことは度々ありました、依て私は之より聖書に就て其一斑を擧げ、諸君と共に之を歴史的、學問的に調査て見させう、先づ歴史を研究致し其

眞偽を定めるに、歴史學者の立てたる規則が三つあります、此三つの規則に照せば如何に往古の歴史でも其眞か偽かを知ることが容易い、即ち第一は一人の歴史家が著したるものは疑しくして信を置くに足らぬ、なれども多数の歴史家が地を異にして年月を異にして、各々別々に著した書中の事實が、全く同じき時は、之を眞實と認め得らるると云ふこと、第二は一國の歴史と他國の歴史と全く相符合することは正確にして疑ひなきこと、例へば神功皇后が三韓を征伐したといふ、日本歴史にある事蹟が、支那朝鮮中の書籍に記したる事實と符合するならば、決して疑ふ能はずと云ふが如きである、第三は凡そ歴史は他の歴史と比較、照合すと云ふことのみでは足らない其上に又文字の記しある石とか墓表などの、古昔の遺存物及び城町臺場などの古跡と全く相符合するものは、矢張確實にして疑ひなしといふことである、ソコテ天主教の聖書を此規則に従つて調査て見まするに、舊新兩約全書は前申す如く時と處を異にして、三十八人の多くの聖人等が、各別に書たものであるに、其事實が全く相符合して一人の手に成りたる書物の如きであるから、第一の規則に因て確實なること疑ひな

い、次ぎに聖書中に記されたる事蹟が埃及、波斯、亞刺比亞、希臘、羅馬等の各國の歴史にある事實と全く相符合するから、第二の規則に符まつて居る故に確實に相違ない、次ぎに聖書中に記されたる國、町、山、河などの地名、位置などを地理學を以て調べるに誤り一つもない、又た墓表、城、臺場などの遺存物と、書中にある事實と符合して居るから、是又第三の規則に照して矢張疑ひなきものである、是を以て聖書を歴史として疑ふ學者は一人もムリませぬ。

次ぎに聖書を學問を以て研究致しませう、其には先づ聖書の開闢の事を記したところ即ち人智に最も分り難いことを明かに記してあるものを以て、十九世紀に至つて始めて開けたる、地質學及び十九世紀に至つて非常に進歩したる、天文學、理學等に照して其誤りなるか、否やを確かめませう、聖書に依れば全能なる造物主は世界萬物を創造なさるに六度を以てせられました、之は造物主の御力が足りないと言ふ譯でなく物の順序をお示しなされたのである、即ち元始に造物主は其全能を以て無き處より萬物となるべき材料を御出しなされた、其時天地未だ分れざる前にして混沌たる状態であ

りました、さうして造物主は第一に光りを御造りなされ、第二には空をお造りなされ第三には地球の水を一所に集め乾きたる地を現はさせ、地には草木を生じ、草木は又其實を結ぶやうに御命じなされ、皆其如くになりました、第四には地球を照すところの日と月と星をお造りなされ、晝と夜とを分けました、第五には海と河とに棲む魚蟲及び空中に飛ぶ鳥をお造りなされ、第六には猛獸、野獸、家畜獸をお造りなされ、萬物全く具つて、最後に土を以て人間の肉體を造り、之に無形の靈魂をお與へなされ、之を名けてアダムと名じ、後又エワと云ふ女をお造りなされ、其配偶となされ、是が一切人間の元祖でムります、さて斯の如く六度に分けて萬物をお造りなされたこと云ふ、聖書の説は、學問に合ふことでムリませうか、其昔今日の如く未だ多くの學問が進まない時代には、多くの學者が大に疑ふた説でありました、然るに十九世紀に至つて種々の學問が追々進むで來るに従つて、先に疑ふた點が全く分つて、今日に於ては聖書の開闢の説は悉く學問に合ふ説であると確かに分りました、今之を一々申し上げることは出來ないから其中二つだけ擧げませう。

第八 聖書は天啓の書なること

御存じの通り世界各国に於て石炭或は金石などを採る爲に、深く掘つた所の坑が澤山ある、其坑から種々珍しき往古の樹、魚、鳥、獸の骨或は足跡の印しある石、人骨及び昔の人間が用ひた道具などの如き類が時々掘り出されます、學者が是等種々のものを調べて、漸々地球の成立を明かに知るやうになりました、是が即ち地質學である、此地質學に依て見ると、地球の水と乾きたる地とが分れた時の初めには、未だ海にも地にも植物と動物が少しも無つた、これは金石を掘り出す鑛山に於て、其坑の中に動物の遺存物が一つも見出されないを以ても、禽獸草木の未だ生ぜざる時代の鑛物だと云ふことが分る、ソウして其鑛物類は地の最も下一番深い所にあるものである、なれども地震の爲め大地が高く上り山と成つた、其時に深い所にある鑛物類が共に上へ昇つたものである、是よりも少しく上に見當るものは草木の遺存物斗りで、其處には魚、鳥、獸の痕跡は少しも見へませぬ、猶其上に成つて始めて魚、鳥、獸などの諸動物の骨や其他生息して居つたと云ふ痕跡が見當ります、其より亦上即ち地の最も淺い所に始めて人間の骨、若しくは古への人間の用ひた道具などが見當ります、シテ見ま

すると一番始めに出来た物は草木、其次ぎは魚、蟲、次ぎは禽獸、最後に人間が造られたと云ふことは疑ひありません、之は別に地質學を研究せずとも分るやうに、佛國パリスの地質學の博物館中に各國に於て掘出したる種々の物が陳列してありますから之を視たならば學者の説明を聽かずとも、地球が如何様に造られたかと云ふことは知られます、地質學に於て分りました諸動物の生存の順序、地球の成立の有様と、聖書の開闢説とは全く相符合して居る、ソウして此聖書の開闢説を記したるものは、今を去る凡そ三千四百年前に當つてモイゼスと云ふ聖人でありました、其時代には未だ地質學と云ふ名までも無い昔である、地質學とは御承知の通り最も新しい學問で十九世紀に始めて開けたものである、然れどもモイゼス聖人が三千年以前の昔に於て誤りなきやう學理に合ふやう、開闢の有様を書いたと云ふは何うして出来ましたらうか、之れ決して已れの方でなく造物主の啓示を、其儘筆記したる者に疑ひない、猶又開闢の説の中に驚くべき證據を最う一つ擧げませう、今多くの人が云ふには光りは太陽より出るものにして太陽が光りの源である、故に太陽東天に朝して四面始めて明か

に、其西山に没するに當ては忽ち暗黒の世界に變ずる、之を以ても太陽なければ光りも共になし、太陽が光りの源なること疑ひなしとは、之は昔は勿論今にも多くの人が思ふ所である、然るにモイゼスは開闢のことを記すに全く之を反對に致しました、即ち造物主は第一に光りを造り第四に日、月、星を造つたのである、之を以て太陽の出来ない前に光りを造るとは飛んだ間違ひではないかと云ふて、五六十年前まで無宗教家が天主公教を攻撃し聖書を輕蔑致しました、殊にウオルターの如き巧みに筆を弄する文學者は、様々の滑稽を以てモイゼス聖人の無智無學なることを嘲りました、當時未だ物理學、天文學も今日の如く進まず、逆も其嘲弄を以てする難問に答へられなかつた、ボスウエと云ふ高名な哲學者が曰ふには、光りが太陽の前の如何様にして造られたかといふことが分らないと云ふても、造物主の啓示に依て記されたる書と云ふ體は種々あるから、光りの説に就ても誤りなしと堅く信ずる、後世學問の進歩に依つて或は其深い意味を曉るやも知れずと、高名なる哲學者の答にして之れ文に過ぎませんでした、他の天主公教信徒の困難は之を以ても思ひやられます、然るに僅か數十年

後の今日に至りまして實にボスウエのいふ如く、物理學、天文學の進歩に依て光りと太陽とは全く別な物で、太陽が光りの源でない、光りの本源はエーテルといふ氣體の震動であると云ふことが明かになりました、尙又近年になりまして理學者、天文學者たる英國のテイソナル佛國のフニイと云ふ人等は、凡ての行星が何うしても太陽より先に固まつたものだといふことを極めました、即ち太陽及び太陽系に屬する他の行星又行星の持つ衛星などの中で、最も小さいものが一番先に固まつたものである、其より次第に大きいものが固まつたのであると云ふことを明かに知りました、故に地球の衛星なる月は地球よりも小さいから地球より先に固まつた依て地球と其他七つの行星が最早今日の如く固まつた球となりても太陽はまだ今日の形にはならず、只太陽となるべき原素が八方に廣がつてあつて一つに集まらなかつた、之を以て太陽は地球よりも其成立が餘程後れたといふは確かである、故に學者は凡ての星の老若を分けます、是れは天文學者の疑はない規則である、最早今日に於て百年前の如くモイゼス聖人の書いたる開闢説を擧げて天主公教を攻撃するものは一人もムリませぬ、開

爾説に付て天主教を罵詈し嘲弄したるウォルテールの如き文學者は却つて無智無學を笑はれべきものではありませぬか、天主教は今日の學問を以て無宗教家の惡口に甘くも報ふることも出来なりました、然れども天文學、物理學はモイゼス聖人の頃には少しも開けなかつた學問で、僅かに五六十年前より盛んに行はるゝやうになりました、然るに三千年以前の昔に書て世界開闢の睿智の想像の逆も及ばざることが、今日の學問と一様にして違ふ所がないと云ふは驚くべきほど感心なことではありませんか、之を以て見ればモイゼス聖人は必ず造物主の啓示に依て書いたことは明かではありませぬか、斯様な意味深きことでは、へも聖書に記してあることに誤りがなければ其他は猶更であります一例を擧ぐれば救世主イエズス、キリスト降生何千年前、造物主は大洪水を以て八人の人間を除く外、一切の人間を滅したと云ふことが書いてある、今日開けたる所の地質學を以て地球を見れば、往古大洪水があつたと云ふことは疑ひない、又イエズス・キリスト降生より何千年前八人の人間より再び殖えて一ヶ所に住居する事が出来ないはとゞなりし時、八方に分れくゞに散る前、煉瓦を以て高い塔を建てまし

た、之をバベルと云ふ、之はセシナハールと云ふ平野であると記してあります、今日にも煉瓦を以て出来たる大なる基礎が山の如くに見へる、學者は其所を調べて全くバベルの塔の遺蹟だと思ふて居ります、凡て皆斯の如く聖書に記されたる事は、大なる小となく之を嚴密調査べて物理、天文、地理、歴史の諸學問に全く合うて居る、故に聖書は天啓の書にして造物主の道なることは、明瞭にして疑ひありません、然らば造物主に就て、人間に就て、救世主に就て書いてあることも、決して疑ふことなく安心して、造物主の啓示と信すべきである、又私が之よりして述べる所は、人智の研究に及ばぬことです、右の聖書を引證して論じます積りである、設へ天主教は聖書に依て信仰するといふても、證據なくして妄信するといふ時でないことは、以上申し上げた所で明かです。

第九 人性の墜落

吾儕が道理と學問ばかりの研究を以て即ち人智斗りを依頼として此世界を視ますと

第九 人性の墮落 百五十八

大に合點の出來ぬことがありますが、此世界はどう考へても不義不道理不都合を以て満たされては居ないかと思ふほどである、先づ現世に於て人間はを難義するものはありますまい、世界開闢より今日に至るまで現世に生れて満足を得たものは一人もありませんまい、却て人間は皆大いなる難義を肉軀に受け大いなる心配を靈魂に受けて居るもの斗りである、人々一身のみならず一國の上に取りましても矢張り大いなる禍があります、即ち戦争とか、騒動とか、饑饉とか、傳染病とか、地震とか、海嘯とかいふ様な天災地變がないと云ふことは昔より一年もありません、實に此世界は程ならぬやうに思はれる、斯の如く考へますと人間は不仕合せなもの、人間はご慕ないものは有りません、サテ何故人間は斯やうに難義心配を受ける不幸なものでムリませうか此解釋は迎も人智に及ばぬことで如何なる學問も此問題に答へられませぬ、只此問題を明かに説明するものは造物主の御告げなされた道ばかりでムリです、昔より多くの哲學者ソクラテス、プラトン、シセロ、ブリース、ルキウスなどの如き高名な人々が其大いなる腦髓其深き智慧を以て考へても遂々分らなかつたと云ふは其著した書を

見て知れます、又た佛教に人間は現世に於て難義苦痛ばかりに縛られるのは煩悩といふて人々の心が迷ふて居るからである、故に迷を覺して悟つて死ねば輪回を脱れるから佛に成つて安心が出来る、左もなければ永劫輪轉て娑婆に生れ替り難義苦痛を受けねばならぬといひます、之れが釋迦の此問題に就ての説明である、人智を以て考へればこの位のものであります、尙又之よりも分らないことが一つある即ち人間の心が全く惡に傾向て居るといふことである、昔から人性は善だと誰も思ひ誰もいふ、如何にも其れに相違ムりませぬ、けれども其情は却て惡である、聖ボーロが人間は其好む所の善をなさずして却て其好まざる所の惡をなすものなりと曰ふた通り、其性は如何にも善なれども其情は反對でムリです、之は諸君御銘々の心を省みたなら蓋し思ひ半ばに過ぎるでムリませう、之は何ういふ譯でムリませうか人間の智慧では分りませぬ故に昔の學者たちが大いに驚く所で又た何うしても分らぬことでありました、されば先きに申したブリーヌとルキウスが曰ふには、斯の如く不道理不都合な世界は決して造物主に造られる筈はないから造物主は無いといふ證據であると、然るにプラト

第九 人性の墮落

百六十

ン、ソクラテスなどの如きは之に反して、造物主ありといふことは如何にも明かであるから、設ひ此世界が不義不都合だからといふても造物主が無いとは云へぬ、然しなから如何にして斯の如くなるやといふ所以は、人間よりも智慧の勝れたるものが之を教示してくれることの外決して曉る道がないといひました、又た人性が善なることは疑ひないに却て人の心は惡に傾向して居るといふことの意味が、人智に分らないから人性に就て昔から種々の説を立て、或は善なりといひ、善惡なしといひ、惡なりといひ、善惡混合なりなど云ふて學者に依り其考へが一々異なつて居るのであります、然しなからプリーヌ、ルキユレスの如く、此世界が不都合、不道理であるといふ所以が分らないから、造物主がないなど云ふへは論理に背いて居る、例へば天文学を知らぬ人が地球が太陽の周囲を運轉する所以の理が分らぬから、地は動かすして天体が回ると論ずるが如きである、眞理によれば何うしてもソクラテス、プラトンの如く考へなければなりません、森羅萬象をお造りなされた造物主あることを疑ふことは出来ませぬ、又た人間は造物主に造られたるものであるから其性は善なるに相違ない、善でも

惡でもないとか善惡混合だなどか又た惡だなどか云ふやうなことは決して無い筈である、故にどういふ譯で斯く不都合な世界に成りしか、何故人心が惡に傾いたか云ふ理由が何かなければなりません、只其意味が深すぎて人智に及ばぬ學問の研究が届かぬことだといふ丈けのことである、ソウして是が分りますにはソクラテス、プラトン等の考への通り、人間より智慧の優れたるもの、教示に依る外はない、且又た是を知るは人間の爲めに必要なことであるから人間をお造りなされた造物主が啓示なさつたに相違ムりませぬ、其啓示下さつたことは即ち前に陳ぶる、天主公教の聖書舊新兩約全書に記してあることでもあります、ソコテ舊約聖書の始めには開闢のことのみならず、又た人間の成立より其墮落したと、及び世界の狀態が一變したことまで委しく記してあります、之を讀めば造物主がお造りなされた世界は今日の如く不都合なものでなく、又初めて造られた人間も今日の如き者では無かつた、始めて造られた人間アダムといふ男、エワといふ女が造物主より蒙つた恩の深きことは實に測られないほどであります、其肉體には難義苦痛もなく又た病氣もなく死ぬることも無かつた

第九 人性の墮落 百六十二

其靈魂には智慧が明かにして凡ての眞理を辨へ、心が正直にして一點の私慾もなく、又た惡に拗戻たものでも無かつた、又た世界も平穩にして天災地變など少しもなかつたこと云ふことが分ります、斯やうなる結構な世界、結構な人間が、何故に今日の如く變り果て、仕舞ふたか、是は決して造物主の誤りではない、人間が犯したる罪惡の結果である、即ち元祖アダム、エワの二人は造物主の深き御恩を受けましたけれども、人間ですから自由の權があります、故に善きことをするも、惡しきことをするも其自由である造物主の恩を受けるも、捨てるも又た造物主に違ふも、違はぬも是皆二人の自由でありました、ソウして彼の二人は不幸にも傲慢の心に引かれて、造物主より受けたる深き恩澤をまだ不足とし、其上造物主の如きものに成りたいといふけ外な望を起しました、是れ其受けたる深き恩を忘れ、却て之に報ゆるに仇を以てするものである、三代層恩の主君に對して叛旗を翻すものは、世の人は是を謀反人と稱し極惡無道とするでムりませう、造物主に對しての謀反人ですから是よりも甚だしい惡事はありませぬ、元祖二人は此の重罪の爲めに大なる罰を受けたのであります、即ち造物主は

彼等二人に宣はく、汝等罰のために地は五穀を生せず却つて其害をなす茨と草とを生ずべし、汝等は勞して地より食を求め、世の終りまで難義と苦痛を受べし、又た汝等は土より出でたる者なれば死して土に歸るべし、と是に依てアダムとエワは即座に先きの大なる幸を失ひ、靈魂にも肉體にも大なる罰を受けました、是れが現世の難義苦痛及び病氣と死のある所以でムります、近く申せば萬物の長たる人間が神に逆らふやふに成つたのである、人間が惡に傾いたから萬物も惡く成つて地は五穀野菜を生育する力が薄くなり、多くの禽獸は人間を害し空氣も海も亂れて暴風や海嘯が度々起り、人間の爲めに實に難義な世界となり不都合な世界となりましたのです、是は舊約聖書に記してある事で此話しに依て考がふれば、今の如き世界は造物主のお造りなされた者でなく、人間の元祖アダム、エワのなしたる罪の結果で人間自ら招いたといふことが分ります、是は誠に信じがたいけれども此説を除く外世界の亂れたることを解き明す道は決してない、若し此舊約の説が偽りならばブリーヌ、ルキエンスのいふ如く神がないと云はなければならぬ、神があるならば人間の罪より出たと極めなければ

ばならぬ、是非とも此二つの中でなければなりません、然るに斯の如く元祖の罪に因て世界と人類が天罰を蒙つたといふ説は甚だ喜ばしくない、一切人間は漬れて仕舞ふたとは耻しいことだから、信仰しがたい、けれども是を以て證據のある論を捨てるといふ筈はありませぬ、此説は舊約聖書に記してありますから何うしても信じねばならぬ、今より三千四百年も前に書いた天文、地質、物理などの學問に關係する説が十九世紀の進歩したる學問と全く符合するから學問に關係する部分は信仰して疑はぬ、然らば何故に宗教に關係する説を疑ひますか、モイゼスが意味深き學問上に付て書いた事に誤まりが一つもないならば、何故宗教に付て書いたことに誤まりがありとすることが出来るか、是は論理に背くことで何うしても學問の説を信する如く、矢張宗教の説も信じなければならぬといふ道理ではあるまいか、左もなくして何の理由もなく何の證據にも依らず、好む説を取り、嫌ふ説を捨てるといふは餘り勝手過ることである、尤も元祖アダムの罪に依り人性が悪に傾き世界の狀態が變つたといふは今日の間には少しも分らない、何故ならば生れながら斯やらの狀態を見て居るからでムリ

す、故にニコラといふ哲學者が吾儕はモイゼスの書いた所の開闢説に就て決して論ずることとは出来ない、何となれば今日の世界は開闢の時と全く違ふ世界に住んで居るから昔と今とを比較する基礎がない、故に開闢の時は如何なる有様なるか少しも考へに及ばぬ、是れ舊約の説を信じなければならぬ所以であるといひました、實に其通り現在の様子を以て往古の様子を論じ開闢説を疑ふ譯は決してない、然しながら世界の變つたといふことをまだ疑はしく思ふならば、十九世紀の學者の著した書を読めば、世界は昔よりも大層變つて、漸々弱つたといふことを會得するでムリませう、一例を申せばアンペールといふ物理學者が曰ふに、往古には空氣中に炭酸を含むこと今よりも多かつた、故に草木の成長は今よりも非常に速かであつた事は想像されぬ程である、即ち今は極めて小さな植物なる苔類は往古には其高さ四五十間まで成長し、エクイセタセといふ草は、今日は其幹の太さ直径三分に足らないものであるに、往古には其直径一尺餘までに至つたといふは實に驚くべきではあるまいか、地質學に依れば往古には雨が降ること無かつたけれども、其代り空氣中に濕氣が非常に多かつたから、今日よ

りも餘程熱さが強かつたといふ、是等も植物の成長を大いに助けたでありませう、又地質學者の所々に發見した太古の禽獸などの話は、現在博物館に其遺骨を視ることが出来るから疑ひませぬけれども、若し視なかつたならば殆んど信じられない位である、例へばセオゾロといふて蜥蜴類に屬する動物は今の一番大いなる鯨よりも大きい、又たメガロゾロといふ獸は其長さ九間もある、其中にも最も驚くべきはイチオゾロといふ獸で、其獸の眼窩の骨を視るに窩の直徑一尺三寸あります、此寸方を以て全体の大きさを想像したならば、其大いなることは如何程でムリませうか、是等の事は唯想像話だと思ふたならば飛んだ間違である、右の話はクエヅエーといふ高名なる地質學者の著した書にあることで、其等の遺骨が博物館に陳列してあります、かやうな類のことは澤山あることです、之を以て見ますると吾儕の生息地球は大いに變遷して、昔よりも變つて來たといふは明かなことでムリです、實にニコラ氏の云ふた通り全然違ふ世界に居るところの人間が、今視ることを以て昔しを論じ、舊約全書の説を疑ふは謂れなきことでムリです。

第十 原罪の傳來

右の演説に申し上げました人間の元祖アダム、エワの犯したる罪は只其二人のみに止まらず其子孫にまでも傳來した故に數千里の海を隔て國を異にして生れましても一切の人間は皆アダム、エワなる夫婦よりして殖えて來た人間ですから元祖の罪の汚漬を生れながら受けまする、即ち元祖なるアダム、エワは罪を犯して人性を汚漬した故に苟も人性を受けて此世に生るゝものは皆其罪の汚漬を受けねばならぬ、之を原罪といふ、人間は此原罪に汚れて居りますから造物主に捨てられた者で天罰を蒙むつたる世界に住み生涯難義苦痛を受けねばならぬのである、此話を始めておき、なされる御方は大いに不道理のやうにお考へなされるでムリませう、即ち人間が生れるや否や善惡の分別どころか何の量見もなき無我無心のものが已れの犯さぬ元祖の罪に汚れ、又た其罪によつて罰されるといふは不道理も甚だしいでは無いかとお云ひなされるでムリませう、成程一寸考へれば是は不道理のやうだが決して不道理とすることの出來ぬ

證據が二つあります、一つは原罪の傳りといふことは造物主が聖人方にお告げなされたといふことは舊新兩約聖書に明かに記してあるといふこと、一つは罪が子孫に傳はるといふは世界萬國の法律や習慣に合ふといふことである、先づ聖書に記されたことの中で最も大切なることは原罪の説であります、之れが聖書の基礎ともいふべき者で聖書の中より原罪説を除いたならば聖書の眞の旨意がなくなり、舊新兩約全書を著したる目的がムリませぬ、されば先きに論じたる如くピブリアなる聖書は造物主の道で悉く偽りなしとするならば猶更其中の最も大切なる箇條に就ては偽りなしと信じねばならぬといふ道理ではあるまいか、又たとひ聖書に依らずとも人間の先祖に罪を犯した者が有つたらうといふことまでは智慧深きものは必ず考へねばなりません、何故なれば罪なき者が罰さるゝ所がないといふは誰にも自然に分つたる道理である、造物主は眞理の源であれば誰にも分りきつたる罪なき人間を罰するといふ不道理の所爲があるべき筈はない、然るに今世界に生るゝ人々は皆難義不幸を受けて居る故に其原因がなければならぬ、即ち人間は如何に依て罪を負ふたもので無ければならぬ、

佛教に女子は生れながらにして罪深しなど云ふが女子のみならず一般人間が罪あるものといふ考へを起す筈である、現に左様に考へたものがあります、而かも世界三聖人と稱せられた中の一人ソクラテスである、其説に曰く世界と人類の狀態を見れば天罰を蒙むつたること疑ひなし、故に往古に於て何か人類に大なる過失の有りし者ならんを考へねばならぬと、御存の如くソクラテスは天主公教を信せぬ、舊約全書のあることをも知らなかつた人でありますが、只其智慧のみを以て道理を考へ斯やうに申されたのでムリです、之を以て見るとソクラテスの如く世間の事を深く観察する人ならば先祖の罪が其子孫なる吾儕に傳つたのであらうといふは如何にも曉られさうなことであります、又た人間は前に申した如く其心が本來の性善に反して惡に傾向して居るといふことも吾儕日々の經驗するところでムリですが、斯の如き人間をお造りなさるは至善なる造物主の所作でないから、矢張原罪の汚れを受けた結果と何うしても考へねばなりません、然らば其原罪は何故に一切人間に傳來しましたか、何千年前の元祖の罪が何うして吾儕に傳來しましたか其理由は確然と説明することは出来ないといふても親の

第十 原罪の傳來 百七十

罪が子に傳はるといふことは世界萬國の人情習慣法律に合ふことである、故に眞理なること疑ひありませぬ、野蠻國でも開明國でも親の罪の子に傳はる道は分り難いけれども不知不識規則のやうに成つて居ります是は實に妙なことであるまいか、ソレデ先づ眞理を以て見ると物の善惡は原から出るもので原が善ければ末も善い原が悪ければ末も亦悪い水源濁りて末流清しといふ道理はない、故に一切人間の元祖が罪に汚れたならば其子孫なる一切の人間が其汚れを受けるといふは疑ひない道理ではあるまいか、是れ世間に親の罪惡耻辱は其子に移つて、其子が人々に輕蔑せられるといふ習慣のある所以である、例へば維新以前に日本に於て穢多といふものは四民の外とし四民よりも汚れた人間と致しました、是は何百年前昔しから其子孫代々に移りて來ました、維新後政府は穢多をも平民として同一の民權を與へました、けれども諸君の眼から見ればまだ、其汚れが子孫までも移るでありませう、又た日本には門地や血統を尊ぶ習慣があります、是れ矢張親の善惡が子に移るの一例である、猶又法律は是を眞理として私生兒格別姦通に依て生れた子に就て嚴しく定めました、即ち佛國ナポレ

オンの立てた民法に於ては私生兒なるものは其父が公然の手續を経て已れの實子と承認して後始めて嫡出子の權利が得られる、若し其父が承認なければ財産を相続するの權利もなく一家を立てるの權利もない又姦通に依て生れた子即ち有夫姦に依て生れた子は親が如何程心配しても嫡出子とすることは出來ない、之はきびしく禁じられて有りますから左様な子は親の罪のために一生涯癡人となつて仕舞ふのです、日本に於て最早間もなく實施になる民法にも是に就て種々規定がある、先づ其一つ二つを擧げますれば凡そ家督を相続するものは最も先きに生れたるものといふ定めがあります、が、庶子や私生子は嫡出子よりも先きに生れたといふても、相続の權利がありません、又た庶子は其父母が婚姻をしなければ嫡出子とすることが出來ませぬ、私生子は其父母が婚姻して後父が已れの子なることを手續を以て認めて始めて嫡出子となります、又姦通に依て生れたる子は夫に否認訴權といふて已れの子でないといふ認め權があります、是れ日本民法の財産篇、人事篇に明かに記してあります、是等は皆其父母たる者の罪が其子に移るのでありませう、斯の如く進歩したる時代の法律でも親の罪が子

に移るは道理と認めて居ります、況んや昔しの法律には是よりも非常に嚴重であつて、今よりも凡そ二千年前羅馬國の法律には、演劇といふは不埒な營業であるから俳優が官吏となることが出来ないは勿論其子が親の業を繼がずとも官吏となることが出来ぬのみならず民権を奪はれるといふ規定でありました、又日本に於て一家一族が流竊たもので其地に子孫が住んで居るといふことは歴史に澤山ありますが是等も親と同様の罰を受けると同じである。

サテ斯の如く親の汚れは子に及び、親の恥辱は子に移り、親の罪のために子が罰されるといふ様なことは世界各国の人情にも習慣にも法律にも共に合ふことで不道理でないならば何うして造物主のなさることのみを不道理といはれませうか、是は始めてお聞きなされば疑ひが起るでせうが能く考ふれば如何にも有りさうな事である、ソコで此元祖なるアダム、エワの犯した罪が吾儕まで傳來て吾儕人間は其罪の汚れに依て造物主より勸當されたものだといふことが我天主教の基礎で其必要なる所以で有りませう、何故なれば何れの國でも親に勸當された子が其親の赦しを受けるには自分で直接に

親に願ひませうか決してさうでない、先づ親の惡意なる人を頼み之を媒介者として親に願ふでムりませう、是と同じ道理で吾々人間が造物主に其罪の赦しを受けるには汚れたる人間が自ら全前なる造物主に對して願ひましてもお聞届けなさる譯はない、故に若し汚れなくして造物主の聖慮に適ふお方があつて人間の媒介者となり、其上人間の受けねばならぬ罰を人間に代つて受るは心に心配なされたならば造物主は其善良なる媒介者の爲めに悪しき人間をも憐み給ふてお宥しなさるでありませう、されば斯の如き媒介者がなければ吾儕は皆造物主より勸當されて今世のみならず來世にも終りなく捨てられて仕舞ひます、然るに幸ひにして吾儕人類をお助け下された有りがたい媒介者が一人あります、是れ諸君は其深き恩を知らずして嫌ふ所の耶穌基督である、此耶穌基督は吾儕人類を救はんが爲めに御自分が種々の難義苛責を受け、其上最も耻辱なる刑 磔 柱に釘架られ血を流し、生命までもお捨て下されるほど御心配なされた、故に之を救世主即ち世の御助手一切人間の救ひ主と仰ぐのでムります、歐羅巴亞米利加諸國の人々は是を知つて居りますから、何よりも一番ありがたく思ふ

て居ります、然るに諸君はまた之を御信仰なさらず其有り難いことをも御存じないか、
是より耶蘇基利斯督のことを委しく陳べ、其眞の救世主なること一切人類の御助手
であるといふ事を證據する積りで居ります。

第三篇 耶蘇基利斯督の事

緒書

モンテスキューが、天主教は造物主と人間の學問であると、申されました通り、天
主公教といふ宗教は造物主と人間に就て、其性質や其働き、及び其二者の關係を教へ
る所の學問で居ります、故に他の學問と同じく、人智を以て眞理を考へ、眞義に依
て研究せねばならぬ、之を以て既に論じたる、天主教の基礎ともいふべき要點、即ち
造物主の在ること、及び其性質は絶對無邊にして、始もなく終りもなく全智、全能、
全善に在らし、凡ての學問眞理の本原、凡ての力、及び美の源なりといふこと、又人
間の肉體の外靈魂を具へ居ること、其性質は禽獸と全く異なること、及び靈魂の不滅、
其行末などのことは、主として哲學者は人智に自然曉り得た所の眞理を以て説明し
ました、さうして是等のことは、造物主の啓示に依らずして分ることで居りますから

毎度の如く、アリストット、プラトン、ソクラテス、シセロなどの、昔の哲學者は、天主公教の説を知らず、又た學びませぬけれども、右のことは能く分つて居りました、故に此十九世紀に當つて、世界の諸學校に教ふる所の哲學者に明らかに書いてあります、然しながら人智といふものは、如何に深いといふても限りがある、只目前にあることを知る斗りである、現世のことだけは幾分研究が出来る、けれども過去、未來に至りては分らぬことが如何程多くあるか分りませぬ、例へば人間は何故生れながら其心が惡に傾向て居るか、造物主の造りたる世界に何故斯く人間を苦しむるの現象多きか、逆も分らぬ、又有限なる人智には、全智に在ます造物主の命令、其聖慮なこのことは猶更分らぬことであります、故に造物主の啓示がないならば、人間は眞の道を知ることが出来ないから、廢人となつて仕舞ます、然れども造物主は人間を憐れみ給ふて、人間に必要なことは啓示下さつた、其は舊新兩約全書に書いてありますさうして此書は確かに造物主の啓示を記した聖書だといふことは、證據を擧げて前に申述べました、其他又此聖書に依て、元祖なるアダム、エフ、の罪の爲に世界が天

罰を蒙り、一切人間は惡に傾き、病難苦死などを受くべきものになつたといふことも説きました、之より申述べることとは、救世主なるイエズ、キリストのことであります、是も矢張人智の研究に及ばぬことです、造物主の啓示なる聖書に依て説明すの外ムりませぬ、故に先づ聖書は造物主の道なりといふことを、豫じめ御承知置なさるが肝要でムります。

第一 耶蘇利基斯は何故貧賤を以て世に處る

ことを望みしや

人間といふものは皆生れながら元祖の罪に漬れて居るから、至善なる造物主に對當されて仕舞たものである、故に造物主の赦しを蒙らなければ、現世は勿論來世までも終りなき廢人となつて仕舞ひます、けれども人間の力では、其漬れを洗ひ其罪の償ひを爲し、造物主の赦しを受けるといふことは、逆も出来ませぬ、是非とも漬れなき御者で、造物主の聖慮に適ふたお方が媒介者となつて人間をお助け下さらなければ吾儕

第一 耶蘇利基斯督は何故貧賤を以て世に處ることを望みしや 百七十八

は救はるゝことはできないものである、然るに幸ひにして其貴き有難い媒介者が一人ありました、此お方は今明治四十三年を去ること、一千九百十年前十二月二十四日の夜半に、猶太國のペトレンエムといふ町、而かも廐の中に御降誕せられました、此お方の御名を漢字に耶蘇と書きます、耶蘇といへば日本人の敬膜には惡魔といふが如く響くでムりませう、けれども西洋ではイエズ、キリストと申しまして、其語の意味は一切人間の御助手即ち救世主といふことである、歐羅巴、亞米利加諸國に於てはイエズ、キリストを、其語の意味の如く確く信じ、何よりも有難く思ふて居ります、然るに日本に於ては耶蘇といへば其名を聞いて之を嫌ひ之を惡むことは蛇蝎よりも甚だじいといふは、抑も何の理由でムりませうか、是れ蓋しイエズ、キリストは、貧賤に暮し、終に厭ふべき磔に處せられて御死去なされたといふを以てありませう、實にイエズ、キリストの如く、貧賤にして此上なき離義耻辱を受けられたお方はありますまい、是は果して何の爲めでありませうか、何いふ譯でムりませうか、是より其所以を説明させよう、然しながら先づ諸君に一言御注意申し置たい事は、天主教教には微少

も虚飾話や方便の説はありませぬから、本心を以て正直にお考へなさるが必要だといふことである、已れを欺むくやうな不正直なものは、縦ひ如何なる議論を聽かして、も逆も分ることは出来ませぬ、ソコで本心に依て見ますと、人間といふものは、原罪の潰れの爲めに如何に正直なものでも、其心の底を調べて見れば、三つの惡しき慾があります、一は傲慢といふ、即ち已れを貴とび人を卑しむといふこと、二は貪慾といふ、即ち金錢を何よりも大切に思ひ貪ること、三は淫慾といふ、即ち淫れことを望むこと、此三つの私慾は人間に生れながら有て度々強く起り、如何に其慾に克つことの出来難いかは、諸君御自分の心情にお問ひなさればお分りでムりませう、故に昔しより何れの國でも、人間が善を行なふの難きは險しき阪を攀ぢ登るに例へ、惡を爲すの易きは水の下きに流るゝに比べます、又昔しより諸先生方が云ふ如く、人が其私慾を抑へること、即ち全く已れに克つといふことは、逆も人間の力に及びませぬ、淫慾を抑へれば、傲慢に負け、傲慢を抑へれば、貪慾に負けるといふやうに、一つを抑へれば随つて他の一つが起る、吾儕の心は、斯の如く全く私慾邪情に蔽はれて居ります

第一 耶蘇利基斯督は何故貧賤を以て世に處ることを望みしや 百八十

る、故にイエズ、キリストは、一に元祖の罪を贖ひ、吾儕人間の潰れを滌ふ爲め、二には吾儕人間の鑑となつて其私慾を抑へ惡しき心を矯め直させる爲に、御降誕なされたのです、手近く申さば藥りが病を癒す爲にあるが如く、イエズ、キリストは靈魂の病を直す爲めに御降誕なされたので有る、ソウして病を癒す藥といふものは其病に反對する藥でなければならぬ、例へば火傷は水を以つて冷すが如く、靈魂の病疾なる傲慢、貪慾、淫慾を直す所の藥は、是等の私慾に反對する善行を以てしなければなりません、即ち傲慢に反對することは謙遜である、貪慾に反對することは財寶を輕んずるといふことである、淫慾に反對することは肉体の難義辛苦である、故にイエズ、キリストは人間を助けたいといふ憐み深き思召に依て、人間の私慾に反對なることを言を以てのみならず、行ひを以てお示し成されました、即ち底の如き汚穢中に其産聲を擧げさせられ、三十歳に至るまでは木匠の職をなされ、極めて貧しく御暮しなされ、御齡三十に達するや猶太國を歴巡つて傲慢、貪慾、淫慾に就て嚴しく訓戒しました、所が良藥口に苦く忠言耳に逆ふといふ諺の通り、猶太國當時の長老教師などの傲慢なる輕

薄なる偽善なる人々に太く惡まれ嫌はれて終に彼等の手に磔に處せられ御死去なされました、是が歐米各國人の尊とふところ有難く思ふ所で却つて日本に於て嫌ひ惡むところである、然しながら若しイエズ、キリストをして長者の如く有福に暮し、或は功名手柄して位は帝王の高さに昇り、富は四海を保つといふ榮華の身であらしめたなら如何であらう、諸君は随分感心するでムりませう、又之を羨むでムりませう、けれども元祖の罪を贖ひ人性の潰れを滌ひ、吾儕の私慾を抑へ、惡心を直し、死後の助けを得させるといふ爲めには何の益もありませぬ、諸君は陶朱猗頓の豊裕なることを聽て有難く思ひませうか、アレキサンドル、ナポレオンの功績を讀むで辱なく思ひませうか、唯感心するのみでムりませう、是れ皆な吾儕の爲には何の益も功もないからである、却つてイエズ、キリストが様々の難義苦勞を爲され、色々の苛貴耻辱をお被ぎなされ、磔にまで架けられなされたのは、皆な吾儕人間の爲である、之に依て吾儕は今世に於ては私慾を抑へるの便りとなり、來世には終りなき助かりを得らるのですから、是は實に何よりも有難く思ふべき事ではあるまいか且又た能々考へれば人間の

心はご淺ましい穢ないものはありませぬ、昔しは支那戰國の世に、彼の蘇秦が志を得ずして其家に歸つた時に、其嫂は輕蔑して機屋を下りず、其妻は飯をも炊かなかつた、けれども後出世して、六國の相印を帶び歸つたときには、先きとは打て變つて其妻さへも仰ぎ視なかつたといふ話しがムります、是が人情の常である、人が貧乏なれば之を卑しむ、金持なれば之を貴ぶといふ、其心の底を調べれば決して其人を敬まひ貴ぶのでなく、其人の有つ所の財産を崇ぶのである、故に一朝不幸にして財産を無くすか位を失なへば、忽ち道路の人の如く振向ひて見るものもありませぬ、シテ見まするとイエズ、キリストの如く生涯貧窮にして、位もなく、身分もなく又何の戦功もなく、只耻辱と難義のみを受けて、磔にまで架けられたといふやうなお方で、昔しより多くの人々に貴ぶれば、敬まはれ、現に今日世界人類の三分の一の人々に救世主と仰がれますのは、是が眞の敬ひ貴びでムりませう。

尙又天主教を立てたイエズ、キリストと、他宗教の開祖とを比べて御覽なさい、一切人間を救はんが爲めに其生までも、御捨てなされた開祖は、イエズ、キリストを除

くの外一人もありませぬ、又多くの開祖の中には、行ひ正しき人もありましたなれども、生れるから死に至るまで一擧手一投足、皆な善行にして吾儕の守るべき規矩となり、吾儕の手本鑑となるといふやうなものも、イエズ、キリストを除くの外一人もありませぬ、故に吾儕信徒は居常に目をイエズ、キリストに着けて其行ひを考へますから、吾儕は大に力を得て心強く思ひます、例へば現世に於て最も凄みにくい難義は貧窮である、俚言にも四百四病の中に貧はご辛ひものはないといふ通りである、妻は病の床に臥し兒は餓に泣くといふ憐れなる境界にあるものは、他教に於ては何を考へて其難義を凌ぎませうか、何を考へて其悲しみを慰さませうか、實に彼等の心を慰さめ彼等の心に力を與へるものは一つもムりませぬ、然れども天主教の信徒は斯様な肉體の難義あるときは、吾主イエズ、キリストが吾儕の爲に吾儕よりも貧しく、吾儕よりも難義をお凌ぎなされたといふことを考へる故に吾儕も御主に對して現世の難義は何處までも凌がねばならぬと考へ、そのまゝ大なる力を與へるものではありませぬか、大なる慰めではありませぬか、又御主イエズ、キリストは、吾儕に訓ふるに現世

第一 耶蘇基督は何故貧賤を以て世に處ることを望みしや 百八十四

に於て貧しきものは福なり、來世に富を得べければなり、現世に於て難義辛苦あるもの福なり、來世に大なる快樂あるべければなり、といふ御金言を以てせられました吾儕に大なる難義や大なる悲しみがあるときは、忽ち右の御金言は吾儕を慰め吾儕に大なる力を與へます、格別吾儕信徒は死期に及んで何の懼れもなく、何の業もなく却つて大なる悦びと大なる望とを以て居ります、何故なれば生前に犯した如何なる重罪も、人間の爲めに磔に架けられたイエズ、キリストの御心配に依て、其罪は赦されたと信じて居るからである、歐羅巴、亞米利加の各國人も所謂耶蘇を有難く思ふは實に之が爲めで与ります、ソウして此耶蘇の有難い所が、丁度諸君が嫌ひ惡む所でもりませう、吾儕は耶蘇が腕にお生れなされる程貧乏だから有難い、耶蘇が長老や教師等に卑しまれ嫌はれたから有難い、耶蘇が人間の爲に最も耻かしい罰、磔に架けられたから有難いのである若し之に反して、位高く金持で一生涯榮華榮華に暮したならば、何の有難いことも感心なこともありません、故に諸君の輕蔑する所は、丁度吾儕の感心する所、諸君の嫌ひ惡む所は、丁度吾儕の此上なく有難く思ふ所である、サテ斯の如

くイエズ、キリストを此上なく有難く思ふものは、歐羅巴や亞米利加の何等な人民斗りでせうか、無智文盲なる翁さん婆さん斗りでせうか、左様思ふ人は豆のやうな小なる目で日本斗りを視て居るからである、廣く世界を視ましたならば、昔しも今も高名なる學者大なる發明家が、皆なイエズ、キリストを救世主と仰ぎ、敬ひ貴んで居つたことが分るで与りませう、今一人二人を擧げますれば、地球が自轉すること及び太陽の回りを公轉することが始めて分つた理學者ニベルニツク、ガリレを始め亞米利加を發見したコロンブス又蒸氣の機關を發明したバベン、近年に至りましては電氣燈や電話機を發明した合衆國人エデソン、などの如く、深く學問に達したる人々よりシヤルレマーギユ、ナポレオンの如き英雄傑傑に至るまで、皆悉く日本人に嫌はれ惡むる所の、耶蘇を貴び敬ひ、又之を有難いと信仰した人々であります、是等の學者英雄が、何の理由もなく無茶苦茶に有難いと盲信するやうな、不權衡な話しは決して無い筈である、何か深い所以が無ければならぬと考へるは當然ではあるまいか、ナポレオン一世が絶海の孤島聖ヘレナに流されたとき、イエズ、キリストに就て何と云ひま

第二 耶蘇利基斯督は何故賞賜を以て世に處ることを望みしや

百八十六

したか、吾れは歐洲諸國に勝ち、其功名は世の終りに至るまで傳はるべし、されど今は遠流の身なるを以て吾を愛し、吾朋友たるもの一人もなし、吾功名を聞て感心するものはあるべし、されど吾の爲に生命をも抛たんと思ふものは一人もあらず、イエズ、キリストは國王にもあらず、軍勢もなく戦功もなし、彼は只磔といふ耻かしき死様をなしたり、されど千八百年の昔より今日に至るまで、彼を信じ彼を貴び、彼の爲には喜んで其生命をも棄つるもの何萬人あるやを知らず、是れ如何なる功績、如何なる勝利よりも感ずべき事ならずや、蓋し是れ人力の企て及ぶ所にあらず、之を以て見ればイエズ、キリストは只人間なるのみならず、造物主の現世に天降りたるものなること決して疑ひなし、之をしも疑はざる盲目に異ならず、と曰ひました諸君よ、ナポレオンは無智な人でしたか、無學な人でしたか、是は申すまでもふりませぬ、斯の如く學者、智者、英雄、豪傑皆悉くイエズ、キリストを深く信するには、必らず其丈の理由がなければならぬ、諸君が正直な心を以て天主公教をお調べなされば、何うでも其理由を得得ることが出来て、今迄嫌ひ惡むた心は離れて、却つて有難く思

ひ、貴び敬ぶやうになるのでありませう、故に是よりしてイエズ、キリストは、只人間なるのみならず一切人類を救はんが爲めに、此世に御降誕せられた造物主で、眞の救世主だといふ證據を擧げてお話し致しますせう。

第二 預言を以て耶蘇利基斯督の神なることを證す

社會學者モンテスキエーの著した萬法精理といふ書に、凡そ人間は事物の皮相に引かれて、修飾あるものを書み、却つて修飾なきものを嫌ふと、書いてありまするが、是は人情を能く穿つた語である、今日日本人のイエズ、キリストを嫌ひ惡むといふも、矢張此人情に基くので、畢竟イエズ、キリストの皮相の事實即ち其大いなる難義や耻辱を受けたこと斗りを視て、其事實の真相を極めず其有難い所以を知らないから、漫りに之を輕んじ嫌ふて居るのであります、又舊約聖書に、全智なる神の聖慮は無智なる人間の考へとは反對して居ると書いてありまする通り、凡て人間の目から貴といと視へるものは、神の目には却つて賤しいもの、人間に取りて賤しいと思ふことは神

第二 預言を以て耶蘇利基斯督の神なることを證す

百八十七

に取りて却つて貴といふことでありませぬ故にイエズ、キリストの生涯を、表面から視ますると、彼は底の中に生れ、三十三歳にて御死去なさるゝに至るまで、貧窮の生活を爲し、時の長老、教師、貴人、官吏などに甚く嫌はれ惡まれて、磔にまで架けられたといふことは、卑しむべく輕んずべきものゝやうに思はれませう、けれども歐米各國の開化なる人民が、イエズ、キリストを此上なく有難いと信じ、救世主と仰ぎ神として度で拜むといふには、何か其理由が無ければならぬ事であるといふことを考へねばなりません、私は是よりイエズ、キリストの此上なく有難いといふ所以、救世主なる所以、眞の神なる所以に就て、證據を擧げて追々申し上る積りですが、先づ前申し上げたところを、お考へを以てお聴き取り下さらなければ、決してお分りになりませぬ。

そこでイエズ、キリストが何の爲に世界にお生れなされたかといふに、人間の元祖アダム、エワの二人が神に造られて後、間もなく傲慢心に引かされて、神の命に背いた其罪は子孫たる吾儕人類に傳はり、爲めに人間は現世、來世共に難義不幸を受くるやうになつた、此罪の赦しを蒙りせんが爲に現世に天降つて、人間の身代となり磔に架られ、生命を棄て、人間を罪を贖ふて下さつたのであるといふことは、前に委しくお話し致しましたが、其天降りなされたお方は誰れでありますか、即ち造物主である故にイエズ、キリストは、吾儕と同じく靈魂も肉躰も具へて居る、眞の人間で、又た眞の神様である、原罪に漬れた一切人間を救ひ給はんが爲に、人間の形を藉りて、世界に天降つた造物主で、人の性、神の性を併せ具へさせ給ふ御方であるといふことは吾儕天主公教信者の堅く信じて居る所です、ソウして斯様な驚くべき話しを信仰するには、最も確かな證據が無ければならぬ、且又無智無學の人までも救ふ爲に天降つた神ですから、無智無學の人にも信仰することが出来るやうに、最も分り易い、最も明かな證據がなければなりません、然らば其證據は何であるか、先づ第一に預言で云ります、預言とは未來の事を豫め言ふといふの義である、然れども彼の天文學者が、何年何日に日蝕或は月蝕があると、曆に記す類ではない、是等は日月星辰の運轉する規則が確然と極つて居りますから、未來の事といふても、先きに言ひ表は